明治三十一年十二月五日發兌

女鑑

第百七十號

東京國光社

女鑑第百七拾號

目錄

坂田藤右衛門の妾



將來の女子

將來の女子にむかつて、吾人の希望することは、千言万語も、なほ盡くすべからざるはかりなれど、然れども、一言の、最も切に最も急に希望する所は、家庭敎育の上なり。今のわが同胞一般の家庭敎育を見るに、實におぼつかなく、賴み少くれはゆる事のみ。されば、吾人は、此の家庭敎育の事を以て、將來の女子に大にたのまむとするなり。女子は一家の婦と成り、其の家庭をあづかり守り、其の家庭を敎へ導き、其の家庭の主任者たるべき者なればなり。

そも〳〵、吾人の心意行動を誘ひも導きもする、やがて、吾人を敎へ吾人を化せしむるものは、さま〴〵なるむきより來る力のあるべきなれど、大よそに分けあぐれば社會の力と學校の力と家庭の力となるべし。即、社會の敎育、學校の敎育、家庭の

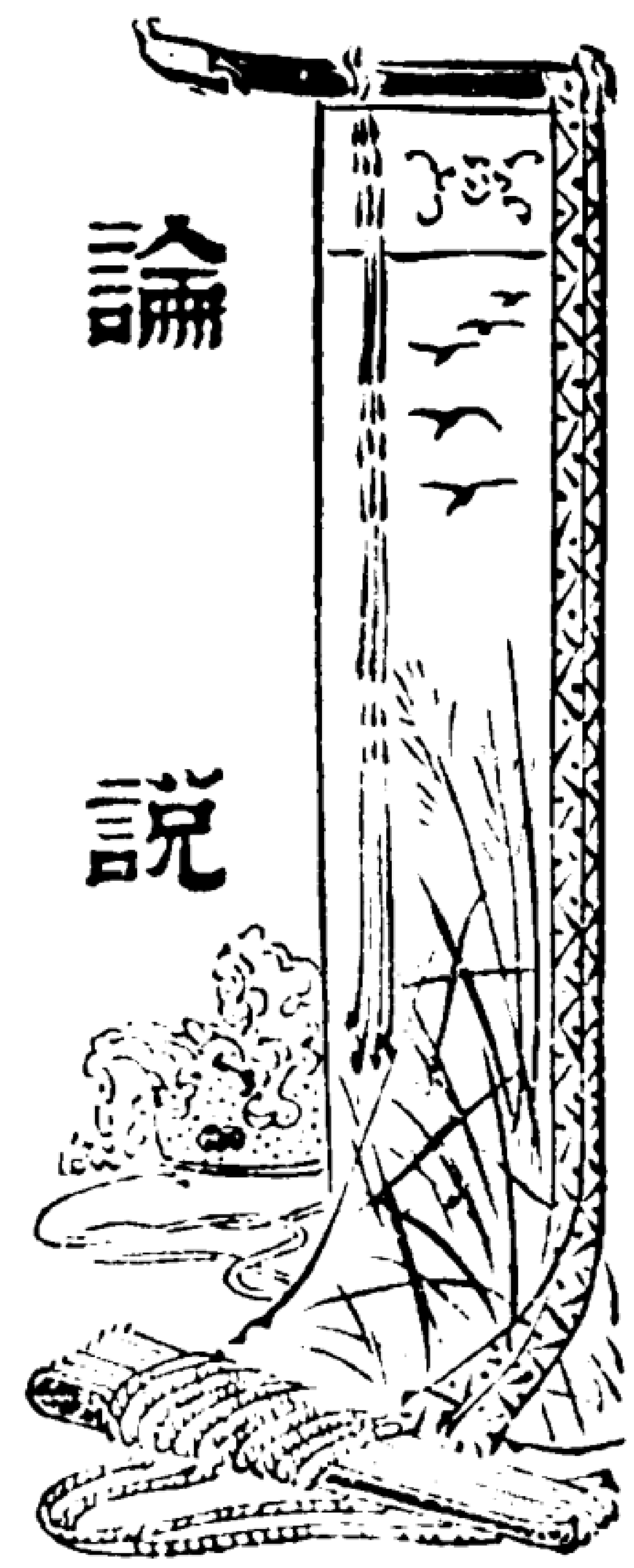
教育といふべきものなり、社會の政體、風俗、社會の如何は、大に吾人の心意行動を誘ひ導くものなれば、學校の教育も、また智識のみにはあらず、吾人の精神擧動の上に、大に力あるものなり。されど、社會の教育も、學校の教育も、家庭の教育には及ばざるべし。家庭の如何こそ、最も吾人の人物如何に關係あるものなれ。家庭教育こそ、最も人物養成の上に力あるものなれ。これ、家庭は、吾人の生るゝ所、吾人の養はるゝ所、吾人の身を置く所、やがて、吾人が本となる所にて、家庭の教育こそ、吾人が世にうくべき教育の本たるものなればなれ。

見よ、彼の社會の如何によらず、學校の如何によらず、單に美なる家庭によりて、世にうるはしき人たりし人を見よ。彼の建武の忠臣名和公は如何にぞや、公は實に道もなきおどろなす山陰の一小臣なり。而して、當時の世情は如何。皆武門の權勢にこび、私利にのみはしれる時ならずや。公はかゝる汚き社會の生れ、かゝる道なき山陰に出でて、單身進みて、よく、助けなき天皇を迎へ奉りて、遂に中興の業を遂げさせ奉れり。これ、實に、名和が約束の松の美談にとゞめたる公が家庭の美は

しかりしによれるなり。また、彼の南朝の忠臣楠氏の一族を見よ、向背節なく、反覆義なき亂世にありて、其の一家一族のみは、よく節操かたく、始終忠義を守り、遂に王事につくして仆れぬ。これ、實に、楠公が七生なほ王事に仕へむとの誠實なる家庭によりたるのみ。

家庭の訓の力や、斯の如く大なり。敎育を思ふ者は、先づ、第一にこゝを思はざるべからず、學校の敎育は次なり、社會の敎育はなほ次なり。敎育の事は單に家庭のみにありといふも、強ちに過言ならざるべし。然るに、當時の世態を見るに、敎育の事はたゞに學校にのみゆだねて、家庭はたゞに衣食の所と爲すのみ。甚しきに至りては、たのみ少き學校敎育にて、幸に、僅に養ひ得んとする德をさへ、反て、賴むべき家庭の亂れたる爲めに、空しくやぶらるゝものあり。敎育の本たるべき家庭の敎への力なきのみならず、なほ末なる學校の敎育をさへ妨ぐるに至りては、實にればつかなく心細き次第ならずや。女子よ。將來の女子よ。今日の家庭敎育を見よ。見て而して、將來の事を圖れよ。家

庭は、實に女子の責任、女子の務むべき所なればなり。



日本古代の女子道德

白松園主人

女子道德の乱を救ひ、國民の母として、完全なる女子を養成せむがために、各縣下に、女學校增設の急を叫ぶ頃とはなりぬ。知識の進步に相反して、道德の腐敗去ぬること、今日より甚しきはなかるべし。大利の出づる處には、大害の依りて生ずるものなりとかや。ことわりの外になり行く習ひは、げにすべなきものなりけり。

凡、道德は、其の國の品位を表明する者なり。我が國の如きは、倫理の標準を求めんには、開闢以來の、歷史的風俗慣習によらざる可らず。此の事については、ひとり女子道德に止らず、外人雜居に臨める今日、敎育家の一大問題として、研究を要すべきは、いふを待たざる所なるに、內外多事、事業多端の爲にや、學者の研究、未、其の緖につかざるが如し。今日上中下の社會についての女子道德は、漸く彼のことやうなる花をめで、

枝を愛する事のみをつとめて、本來の特色をぞ、さがりに〳〵て、うたてある樣とな
行くめるが、口惜しけれど、覺束なくも、ひとつふたつ、日本古代、女子の道德とれ
しきふしを、書き記しつ。
抑、我が國、女子の道德は、遠く二神の國はじめ給ひしときより、淵源し來れる者にし
て、風儀や道德や、事世の變遷に伴へる推移は、免れざれ共、其の骨髓たる、一定不變
の道の存ずるありて、古來嘗、失ふことなく、違ふことなし。思ふに明治の女子たらん
者も、須く此の歷史的道德の精神をもて、倫理の立脚地と定められんには、庶幾は其の
本分を遠かること少からんか、今之れを古史に徵するに、古事記神代の卷の、二神天降
ませる條に曰く、

爾、伊邪那岐命、然者吾と汝と、是天の御柱を行廻り逢ひて、美斗能麻具波比爲と、詔
給ひき。如此いひ期りて、乃ち汝者、右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむと、詔
給ひ、約意て、廻ります時に、伊邪那美命、先づ、阿那邇夜志愛袁登古袁と、言給ひ、
後に、伊邪那岐命、阿那邇夜志愛袁登賣袁と、言給ひき。各言給ひ竟て、後に、其妹
に、女人袁言先だちて、不良と、曰給ひき。云々

又、日本紀にも、

陰神先唱曰憙哉遇可美少男焉（少男此云烏等孤）陽神不悅曰吾是男子理當先唱如何婦人反先言乎
言既不祥宜以改旋　云々

之れぞ、確に太古より、男女の分を制定せられたる御おきてにして、千古不易の神勅になるを、方今輕跳浮薄なる一部の女子、動もすれば、不倫の言をなして、耻ぢざる者あり。此れ等の徒は、ずべて、此の神勅を冷笑して、假説のものとすめれど、歴史的事實は、決して之の妄言をゆるさゞるなり。

然らむ、こは、女子を逆待して、翫弄物たらしめたる者か、決して然らず。男女相愛の情は、鬱然として、その美はしかりしを見る。古事記、伊邪那美の神の。火の神を生み給ひて、神逝り給へる條に、

故爾、伊邪那岐命、詔給はく、愛しき我が那邇妹の命や、子の一木に易つるかもと謂給ひて、御枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐て、哭給ふ時に、　云々

又同書に、日子穗々出見命の、豐玉毘賣と別れ居給へる時に、豐玉毘賣よりの御消息に

赤玉は緒さへ光れど白玉の君がよそひしたふとくありけり

日子穗々出見命のれんかへしに

おきつ鳥かもどく島に我いねし妹は忘れじよのことごとに

又、須佐之男命の、櫛名田姫とすみ給はんとて、宮をしつらひ給ひて、

やくもたつ出雲八重垣つまごめに八重垣つくるその八重垣を

その相慕ひ慕はれ給へるさま、此の事實此の御歌にて、伺はれぬべし。

又、建速須佐之男命の、まかり申し給はんとて、天照大神の御許にいでませるときに猛威甚だ盛にして、行きすぎ給ふ所、震駭しておそれのゝぎけれど、天照大神之を推かんと待ちまうけ給ふさまを記して曰く

爾天照大御神、聞驚かして、我那勢の命の、上り來ます由は、必善はしき心ならじ、我國を奪はんと、おもほすにこそと、詔給ひて、即御髪を解き、御美豆羅に纒かして、左右の御美豆羅にも、御鬘にも、左右の御手にも、各八尺勾璁の五百津の美須麻流の珠を、纒持して、曾比良には、千入之靫を負ひ、五百入之靫を付け、亦伊都の竹鞆を取佩して、弓腹振立て、堅庭は、向股に蹈那豆美、沫雪なす蹶散して、伊都の男建蹈建て、待問給はく、云々

是、日本女子の、變則的特性を發輝し給へるにて、貞靜閑雅なる淑女も、一朝の大事に遭遇するときは、たとひ水火の中なりとも避けず、露にもなやむ大和撫子の、おもひ定めぬる上は、雄姿颯爽たるべき鑑を、後昆に示し給へるなりけり。

又、須佐之男命の、出雲の國にて、足名椎手名椎にあひ給へる時に、爾速須佐之男命、其老夫に、是汝の女ならど、吾に奉らむやと、詔給ふに、恐けれど（…）も、御名を覺ずと、答白せど云々

名を聞き祖先を知るに非ざれど、面貌服裝はいかにうるはしかりとも、決して嫁せしめ（…）ざるは、我が國特有なる家庭法律にして、血統門閥を重んずる美風は、はやく神代に胚（…）胎せるを見るべし。

又、同書に、

於是、天津日高日子番能邇々藝命、笠沙の御前に、麗き美人の遇へるに、誰が女ぞと（…）問ひ給ひき、答白給はく、大山津見神の女、名は神阿多津比賣、亦の名は木の花の佐（…）久夜毘賣と、謂し給ひき、中略 爾詔給はく、吾汝に、目合せんと欲ふはいかにと、詔（…）給へど、僕は得白さじ、僕父大山津見神ぞ、白さむと白給ひき。云々

元、我が國、女子の嫁するには、父母の承諾を得ざれど、正しき婚姻法にあざらりし（…）を知るべし。今日、歐風の浸潤するに從ひ、自由結婚などの、やゝ行はるゝは、いたく（…）我が古有の道德に悖れり。況、物好にも、節を外人に賣るなどは、實に、いふに忍びざ（…）るなり。萬葉集の開卷第一にも、

籠もよ　み籠もち　ふぐしもよ　みふぐしもち
この岡に　なつます兒　家きかな　なのらさね
そらみつ　やまとの國は　おしなべて　われこそをれ
しきなべて　われこそませ　我こそは　せとはのらめ
家をも名をも

とは、雄略天皇の御製にして、嘗て野邊に出で給へる時、會々岡邊に、若菜つみに來れりける女の、名を問ひ給へるなり。されども、上代の風として、夫婦の間ならでは、他に向ひては、猥に家名を云はぬ例なりけれど、答へ奉らぬにより、天皇やがて、萬乘の尊なる由を知らしめ給ひ、汝の答へぬもことわりなれども、やまとの國は、おしなべて統治する朕なれど、かりに朕をぞ夫として、家名を聞かせよと、宣へるなり。

古事記神代の卷に、大國主神、須勢理比賣命の、嫉妬に堪へ給はず、その共に住み給へる、出雲の國を出立して、大和に行き給はんとすとて、歌ひたまはく、

(上略)いとこやの　いもの命や　群鳥の　我むれいなむ
ひけ鳥の　わがひけいなむ　泣かじとは　なはいふとも
やまとの　ひともとすゝき　うなかぶし　ながなかさまく

朝雨のさ霧に　たゝむぞ　わか草の　妻のみこと　云々

須勢理毘賣、即、大御酒杯を取らして、立ちより給ひつゝ歌ひ給はく、

八千矛の　神のみことや　あが大國　ぬしこそは
男にいませど　うち見る　島のさきざき　かき見る
いそのさきおちず　若草の　妻もたせらめ　吾はもよ
女にしあれど　なをきて　夫はなし　汝をきて
つまはなし　(下畧)

これ、汝がかく嫉みふかきにより、今より旅立ちいぬるなるが、我が出で行かど、例ひ泣かじと汝はいふとも、朝ぎりの如くに涙に咽びなんぞ、かくてもなほ物嫉みあるにやと、仰せ給ひしかど、我が君は男にませど、わか草の妻數多持たせ給ふとも、ことわりに侍り。妾は女にしあれど、我が君の外に夫はなし、今は嫉みはえ侍らじ、憤を霽え給ひて、出立を思ひ止り給へとなり。さるを、世には、中流以上の身にてありながら、いさゝかも、夫の身に過あれど、いたく恚り狂ひて、離縁を求め、はた、之を種に、いふに忍びぬわざする者の、れほかめるは、文明とは榮ゆるものから、道徳は、古代にれよむぬにや。

萬葉　敷島の大和の國に人ふたりありとしもはむ何かなげかん

古今　君をおきてあだし心を我もたばすゑの松山波もこえなむ

（以下次號）

割烹と禮節と（九）

石井泰次郎

第二節　現今の禮節家を論ず（續）

以上擧げ來れるが如く、實に現今本邦禮節家を以て稱すべきは、唯有住齋氏一人のみなりしに、今は既に其人もなし。嗚呼惜乎。嗚呼惜乎。

論者頃日試に筆を執りて、禮節家を國學者に見立たる反古あり。文箱の中に納む。即ち、

荷田東麿――伊勢貞丈　加茂眞淵――松岡辰方

本居宣長――有住齋　平田篤胤――

是なり。伊勢貞丈、禮格傳授によりて禮節の基を再興し、君臣の道の敬禮を忽にすべからざるを、裏面より論辨し。松岡辰方、其深意を受けて益々斯道を研究したるも、未だ時勢に憚る所ありてにや、斯道の古事を講究することとさまで敏活ならざりし。然るに其門下に出で、貞丈翁が辨論を考案して、辰方先生が未だ公衆に訴へざりし禮節古事を、五十余年間の歳月を費して、漸く傳授するの好結果を得て、故實禮節の師範として、世に

其名を止めたるは有住齊氏なり。其傳統よりするも、其功績よりするも、國學四大人の一に合せたるは、蓋、動くまじき見立ならんか、唯憾むらくは、平田篤胤大人に合すべき人物の未だ世に頭角を顯出せざることと是なり。

平田大人に合すべき人物は、是を禮節講述者中に求めざるべからず。禮節講述者として論者が知れる處のものは、（姓名五十音順）

有住常子　故實禮節家、有住齊氏令娘

國分操子　日本女禮式、貴女の栞著者、東京女學館講師

關　葦雄　故實禮節教授、又茶道教授を以て名あり

坪谷善四郎　日本女禮式大全著者、其他禮節書の著あり。

中村鑑太郎　四條流の禮法を教授すと傳聞す。

神谷銀一郎　弓馬禮節教授、小笠原清務氏先代門下

佐方鎮子　女學講義、其他雜誌禮法講師、女子高等師範學校教授

田邊和氣子　女禮鑑の著者、東京女學館講師

中島義式　新撰簡易禮法を主張せんとす。

其他有住齊門下生等の諸氏なり。又、

小學女禮式明治十四年印行の著述者

日本の裁縫と女禮明治廿五年の著述者

禮式圖解明治二十七年の著述者

諸禮式大全明治廿九年の著述者

女のしつけ明治十二年の編輯者

普通禮式明治三十年の著述者

日本諸禮式明治廿年の著述者

和洋禮式明治二十八年の編輯者

女訓綾の雛形國光所載の著述者

民間婚禮式明治八年の著述者

新撰諸禮式 百人一首詳解附録 明治廿六年 の著述者諸氏をも、其次に序して、禮節の講述者として迎へんとす。又、

各地方諸縣に、禮節講述を以て聞たる人多からんも、未だ之を知るに至らず。是等の禮節講述者中に於て、禮節界の平田大人を求めんとす。果して平田大人其人ありや否や、論者不幸にして淺識、能く之を知る能はざるなり。

以上論じ來れる處は、禮節學上正面より之を觀察したるに非ず、即論者は局外の位地に立ちて之を窺ひしのみ。さはいへども、徒に無責任の放言をなしたるにはあらず、其無責任の放言をなしたるにわらざるよしは、幸に之を、論者が献身的に研究せる禮節の傳統及其範圍に就て明にすることを得んか。即論者が就て研究したる禮節の傳統及其範圍は、

伊勢貞丈
水島元成

三代 根井新兵衛——安永年代 石井治兵衛　伊勢貞丈
二代 松岡次郎太郎——天保年代 石井治兵衛　有住齊 故實禮節師範
初代 大谷小仲太——仝 石井治兵衛　有住常子 齊氏娘
二代 大谷小仲太——文久年代 石井治兵衛　吉田朝胤 蕊御厨子所預門人諸禮節教授者に就て講究せし人
小笠原清務 弓馬禮節家

如斯と雖、しかも論者は未だ禮節學上に於ける初等一年級の位地にだも達すること能は

ず、恰も幼稚園に通學する兒童に異ならざるのみ。されど幸にして講述者諸氏の列に加へらるゝを得るも、僅に其末班を汚すに過ぎざるべし。然るを、今、をこがましくも斯く禮節學上に敢て愚論を弄する所以のものは、禮節の弛廢、實に論者をして、最早默する能はざるの時に到らしめたれど、是又已を得ざるに出づるなり。

（第二節終）

女德のをしへ（十八）

三輪田眞佐子

第九迷信　人の心は、智、情、意の三に分るゝが如し。その中にて、情は道德に最も關係多きものなり。如何となれど、親子、夫婦、兄弟、君臣、あるは朋友等の間に人倫の存するは、さるべき道理に基くとは言ひながら、情の厚薄暖冷によりて、愛敬親睦の度を異にするものぞかし。左れど、人に感情の強きは、道心の生ずる源にして、以て譽むべき點ならん。

されど、一得一失の相伴ふは免れがたきものなれどにや、情に附隨するものは想像なり、更に想像には迷信の續出する傾向あり、蓋し迷信は、智なきがために乘せらるゝものなるを以て、おのづから愚と評せらるゝのみならず、往々そが道德を害する結果を釀することさへあり。思はざるべけんや。

きて、女子は、天性感情に富むを以て、恩愛、及び悲慈などの主體となりて、世の苦
を慰籍し、亦は智に伴ふ乾燥無味、並に意に從ふ生存競爭など、總で果かなき味きな
社會の分子を潤澤調和するに足るものなり。しかのみならず、女子は感情の賜にあり
、天然を詩的に解釋し、以て人生に風韻を與ふることもあり。されど、女子の感情强
は、露ばかりも惡むべからず。
、女子が感情にのみ馳せられて、迷信に流るゝことは、自然女德を害するに至るを以
、戒めざるべからず。源氏物語の河原院に於て夕顔が「山の端の心もしらで行く月はう
の空にてかげや絶えなんと、心ぼそく、物恐しう、すごげなる樣を寫し、次に住みな
ぬ夜の景色にわなゝき惑ひて死にける樣は、一般の女性を書きたるものと知るも可な
ん。現に世の中の女子を見るも、家族に病人あるとき、名醫に診察を求めずして、怪
亂神を迷信し、以て呪咀を事とし、或は子子たらず、親親たらざるを以て、前生の因
に歸し、反りて現在の德を修め、身を顧るを爲さず。あるは吉凶禍福の前兆を說きて
取の氣象を害するもの少からず。大和俗訓に「世俗の語り傳ふること空言多し、悉く信
べからず。ことにあやしき事、多くは僞りなり。神佛の寄特も、俗人の語り傳ふる事
そらごと多し。およそ正法には奇怪なし、奇怪あるは正法にあらず。奇怪なりとて貴

ぶべからず、神佛をほめむとて、なきことを作り出し、或は似たることを實にいひなし、奇異なることを言ひつゞけて、かへつて神佛の徳をけがすことを知らず云々。これろかなる人は、さゝろなるそらごとを信じて迷ひ易し。そらごとを作りて語りつたふること世に多し、信ずべからず云々」これ亦俗訓に止まらず。教育ある女子も、なほ迷信の恐なきにあらざれど、以て戒めざるべからず。

れのれは迷信を惡むといへども、人には確信あるを要すと信ず。讀者この差別をなしてよ。抑、迷信とは、道理に戻り、邪僻を信ずるを言ふ。これに反して確信とは正義に典り本分を信ずるをいふなり。されど、人として確信なく、さながら浮雲の如く、漂泊の如きものは、最も卑しきものなり。故に、女子は、迷信を有つべからざると同時に、是非とも確信なかるべからず。

孔夫子は、朝に道を聞かば夕に死せんも可なりとのたまひけり。誠に人は道を確信し、たとひ劍の山に登されんとも、變操せざるこそ偉けれ。元來迷信は、邪僻を信ずるのみならず、信向の根據薄弱なるを以て、朝に變じ夕に迷ふことさへあるべし。實に確信と迷信とは似て非なるものなり。

卑俗なる女子の、毫も確信なきものは、徒らに名利の奴隷となりて、更に汚辱を知らざ

ものとなるべきに、幕末のころ、攘夷と開港の二論相衝突して、民心を激昂せしめけころ、横濱の岩龜樓に龜遊なる名妓ありけるを、米國人來り、その艶美なるを見て、巨額の黄金を以てこれを揚げんと求めて止まざりけれど、忽ち龜遊は、目下浮川竹の境涯に陷るとも、神州の女子と生れしからは、などか外人に操を破るべきとの意をものする遺書に(露をだにいとふやまとの女郎花ふるあめりかに袖はぬらさじ)の歌をよみて自刄しけりとかや。あはれ、娼妓などは、利欲のためには如何なる醜辱をも厭はざる習なるを、龜遊は大和民族の躰面を重んずべき道理を確信すればこそ、斯る決心も出づるなりけれ。今日教育せられたる女子にして、大義名分を確信し、以てあだし心のために動かざる決心なからんか、娼妓にすら耻ぢざるべからず。





坂田常右衞門の妻

鹽井ふく子

れと丶しの先つ年より戀ふるを、むかしの心長き人さへ、はや堪へぬ音に立つれど、人も亦久しき戀とき丶傳へ、詠み傳へぬ。げに待つは一夜も千秋の思ひ、まして女子が夫に別れ居る中の年月ばかり、長くも、つらくも、心細くも思はる丶ものやなからむ。されど、天水の姜維が妻は、夫が蜀の國にあるに當歸の草を送りて其の歸らむ事をうながせしと聞く、女心は誰もさある中に、之は夫が遠志をさまたげむともせず、四十年あまりの年月を霜に雪にみがきたてたる坂田常右衞門の妻の操ばかりは亦たぐひあらじとぞ思ふ。

常右衞門は鍋島家の臣にて、妻も亦同僚の女にて、氏は何と呼びけむ、名は何とつけ丶ん聞くによしなけれど、其のいはけなき頃、たらちねの父母して、常右衞門と配偶の約を結びぬ。然るに常右衞門年二十二歲の時江戸在勤を命ぜられあづまに出でけるが、篤實に精勤するものから、主人之を歸す事をいと惜しみて、故鄕に歸へるを許るさず、兎角する程に契約の年も暮れ、はや女が振り分け髮も肩すぎて、なほ數年を過ぎぬるに、女の父より、常右衞門の父にうち談ひけるに、兎に角引き取りて常右衞門が歸國を待ち、後、結婚せしむべしとあるに、もとより他に遣はすべき女ならねど、兎角をれまかし申すべしと談らひあひ、やがて常右衞門が家に迎てられて行きける。此の女、いと孝心深き者にて、其家に行きてより、偏に舅姑にかしこみ仕へ、孝養怠らず、つねに常右衞門が家に在るが如く、家事を宰理し、奴婢を御し、みづから紡績して舅姑を暖かならしめ、涼しからしめ、食も撰びてすゝむれど、夜は肩

を採み、腰をもさすり、四方八方の物語りなど取り出で、舅を慰め、姑をいたはり、起きて思ひ臥してかぞへ、己が花の顔うつろふは知らず、たゞ舅が頭の雪の深うなる、姑が歯のこぼるゝを心細く、たゞ子の歸りて養ふまでを、風も嵐もな吹きそとばかり祈りては遠く東の空をながめて、あゝ我が夫と心に呼ぶもあはれなり。

舅姑を天といたゞきおのれが養ひの足らはぬを恐れ、心を碎きてかしづくほどに、いよ〳〵積り行く白雪に舅は遂に斃れ果てぬ。姑もまた間なく枯れ行きけり。其の病床にあるや、妻女が、介抱、藥餌心を碎く大方ならざりしかど、なほ夫が歸りての後自ら養はぬを歎ゝらん、何とて今少し待ち給はぬと歎くもいとあはれなりし。夫よりは益々身を愼み、家政を宰理し、住の江の岸に年經る松ならなくに、久しくも松のとぼそに心深き年を積む茲に四十餘年、頭の霜に雪とかはり、額のさゝ波深うも覺えける天明五年の春、常右衛門年七十餘歳、かゞまる腰に卯杖をつきて、漸く歸國しける。かの大澤中に十九年の星霜をつみにし漢の蘇武もたゞならぬ心地して迎ふる妻も迎らるゝ夫も、たゞ先立つは涙、やがて夫妻白髮の翁媼にて、はじめて婚儀を行ひけるとぞ。夫は忠ゆゑに家をとはず、妻を省ず。妻は夫が遠志を思ひて、當歸を送らず、互みに積りし思ひ如何に春立つ風のとけけむ。

波自采女

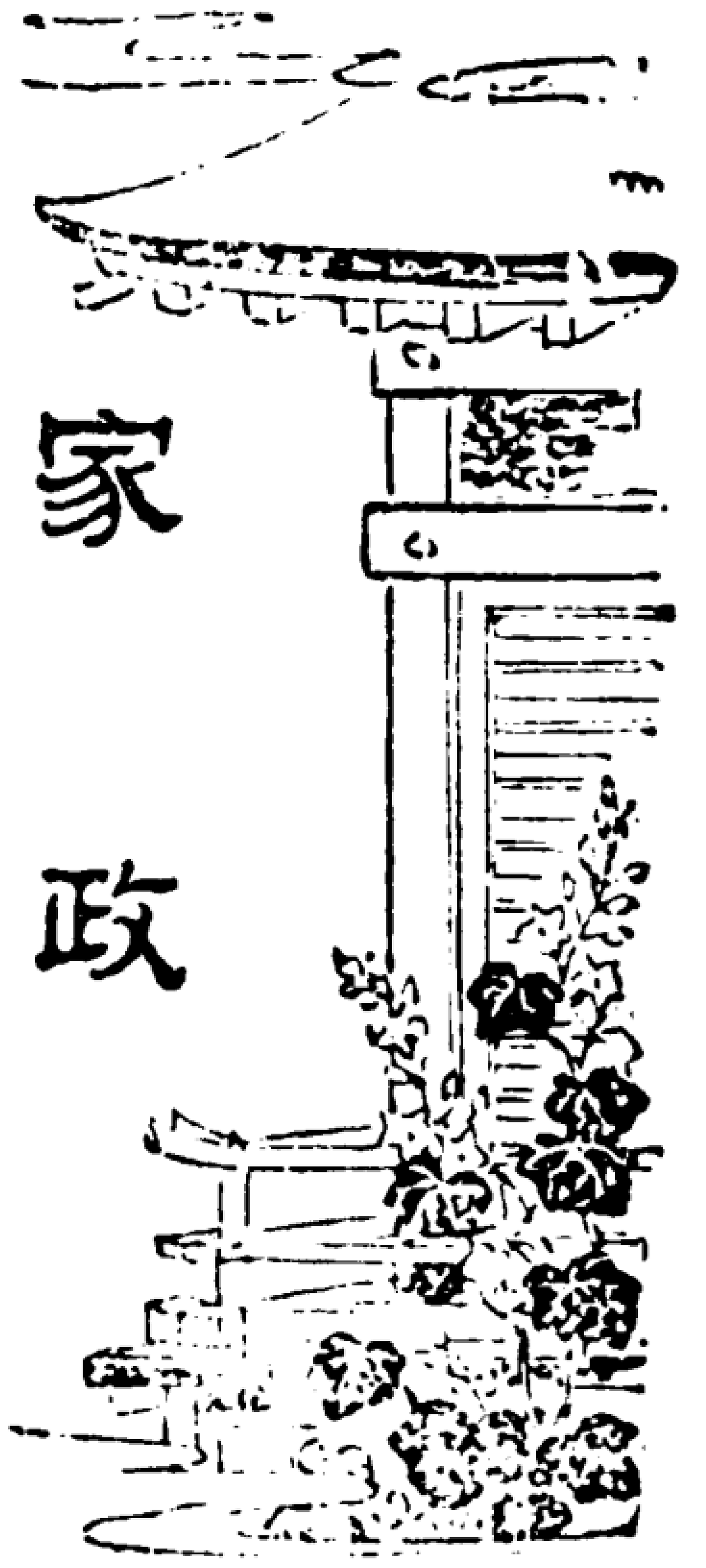
山本正周

高橋波自采女といへるは、對島の人某が妻なり。夫死して後、誓ひて貞操を守り、善く舅に事へけり。さて、舅もまた、程なくて死にけれど、墓の側に廬を作りて之に住み、毎日齋食して餘念なし。人皆其の行に感じたりきとなん。此の事官に聞えければ、之を閭に表して身を終るまで租を免じたまへり。

眞玉主賣

壹岐の國の壹岐某といへりし者の妻眞玉主賣といへるは、年十五にして夫に死に別れけるが、誓ひて更め嫁せず、夫の墓に供給すること、三十餘年一日の如くなりけれど、寶龜四年、爵二級を賜はり、一生の間田租を免されきとなん。





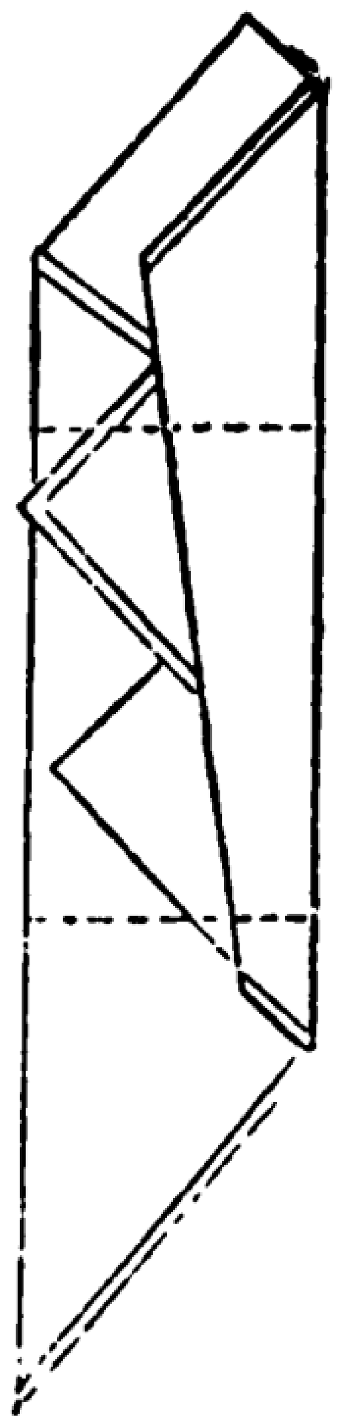
包の記

故有住齊先生敎授

門人　なみ子　鑠子　筆記

是は兒童の手

(草)手遊包



遊物を包みて

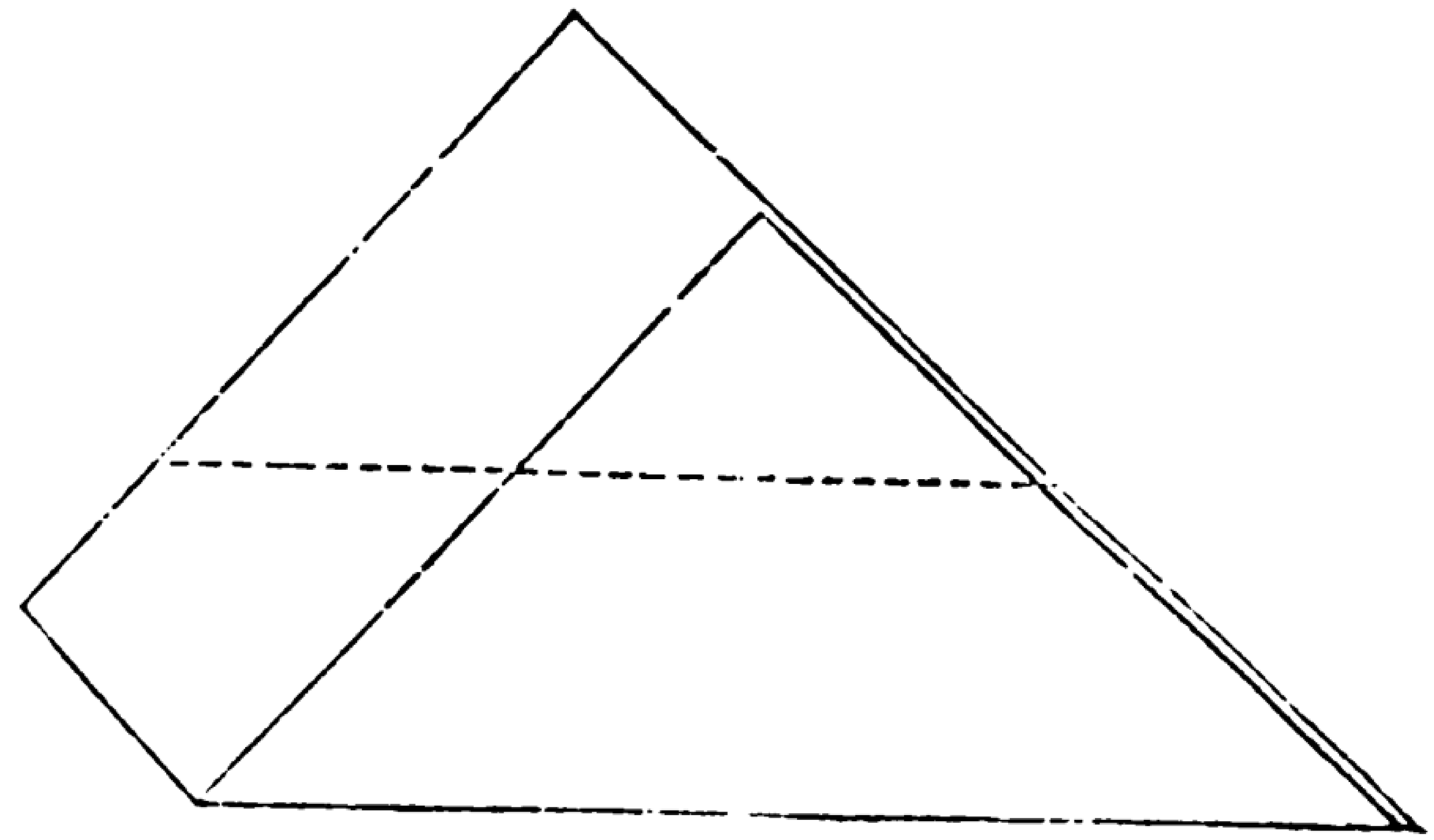
贈る時に用うる包方なり、水引にて中結わるべし。(點線の處裏へ折り返す)

包方

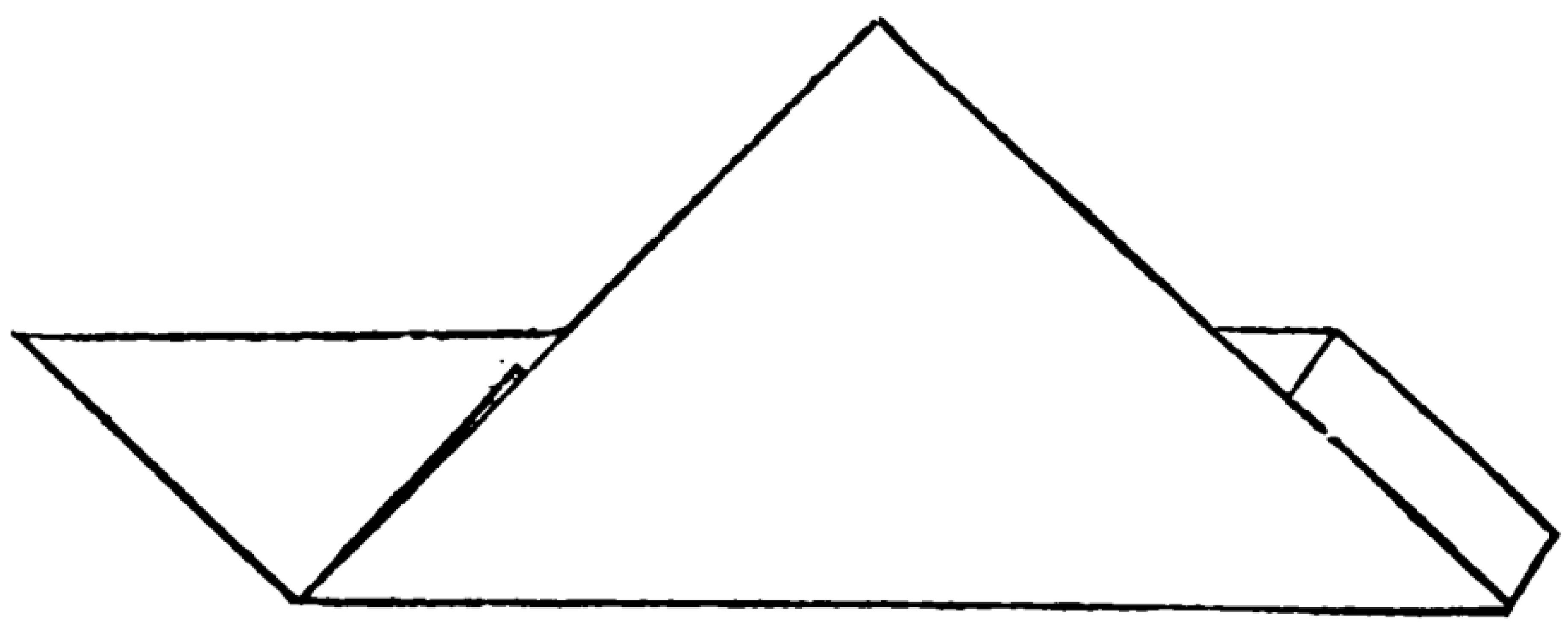
紙取をなして(紙取は前條所載に同じ)第一圖の如く紙のすその方を

折合せ、包の幅を見斗ひて、同圖に記せる筋の程を、

第一圖



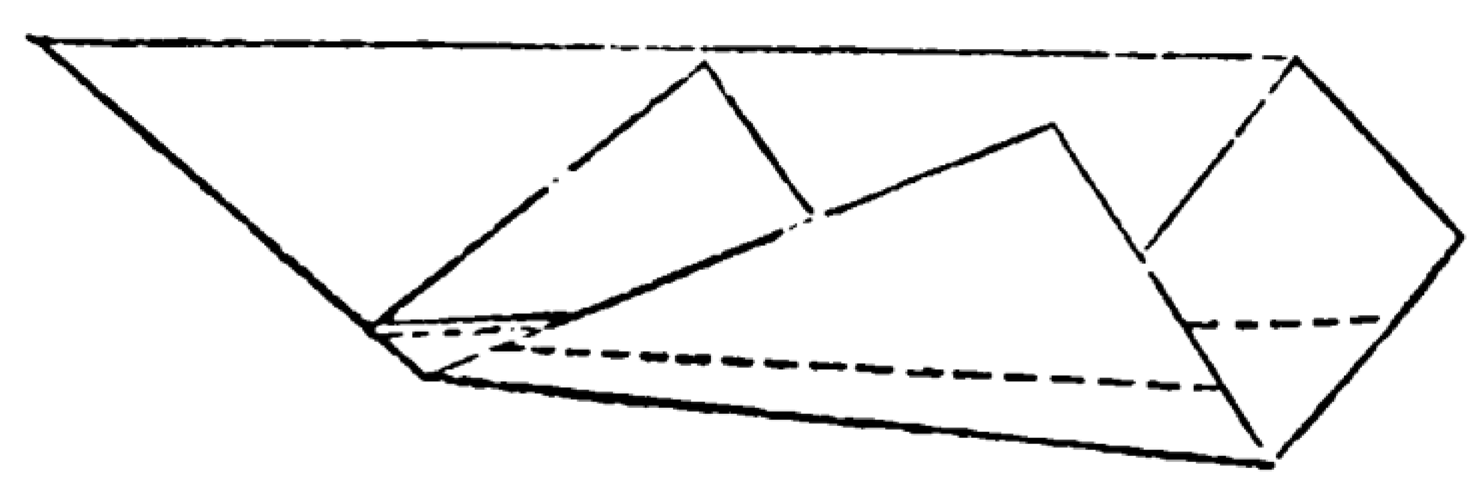
第二圖



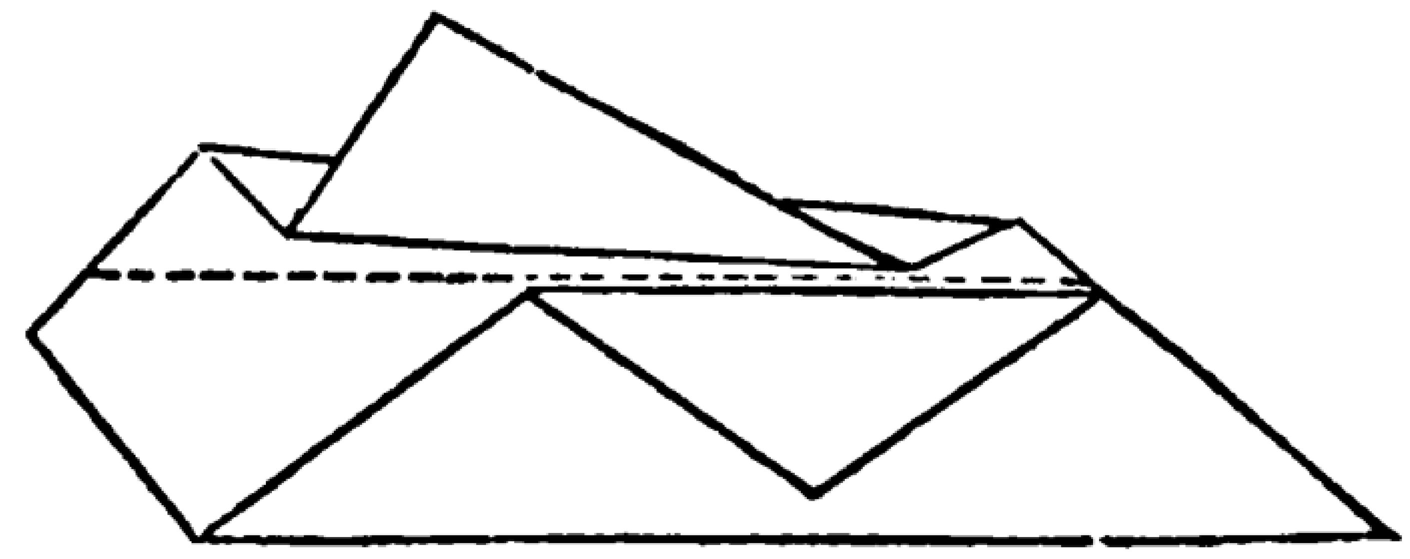
第二圖の如く、向ふを前に取直して折るべし。次に折りたる上がへを、手前の方へ開きて、第三圖の如く、向へ一つ折り、又向を前に取直して、同圖に記せる筋の通りを、向へ折かへすべし（第四參照）。さて、上かへ、下かへを合せて、形紙の圖の如く、折目、折目に

墨にて筋を引て、

第三圖



第四圖

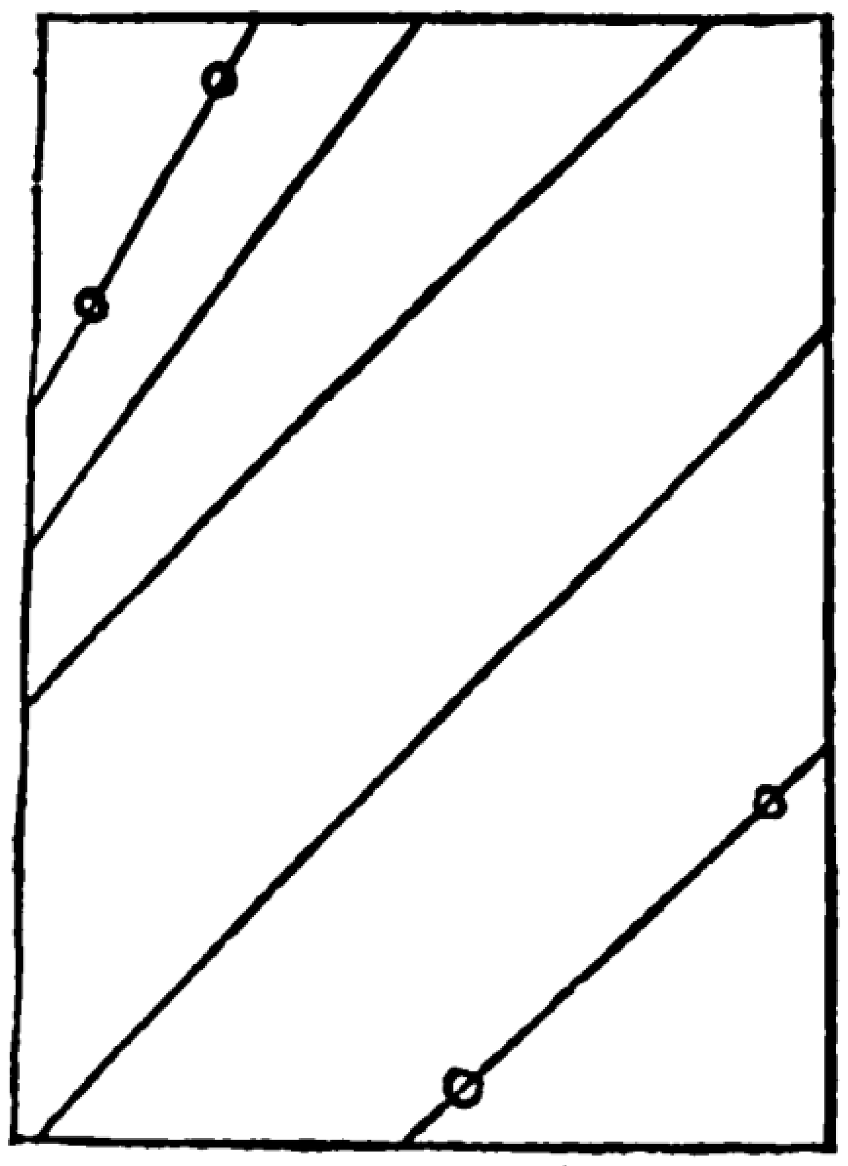


形紙厚き紙にて、裏の筋、表に見えざれど、裏より筋の両端に、錐にて標をうちて、其標の所を、表より○をかきれくべし。薄き紙の時は、筋引たるまゝにてよろし。

形紙をつくりて、今用うべき紙を裁板の上にのせ、形紙をあて丶、大きさを合せて、錐にて一面に二所づゝ、四方ともしるしをつけて、形紙をとりのけて、標の所

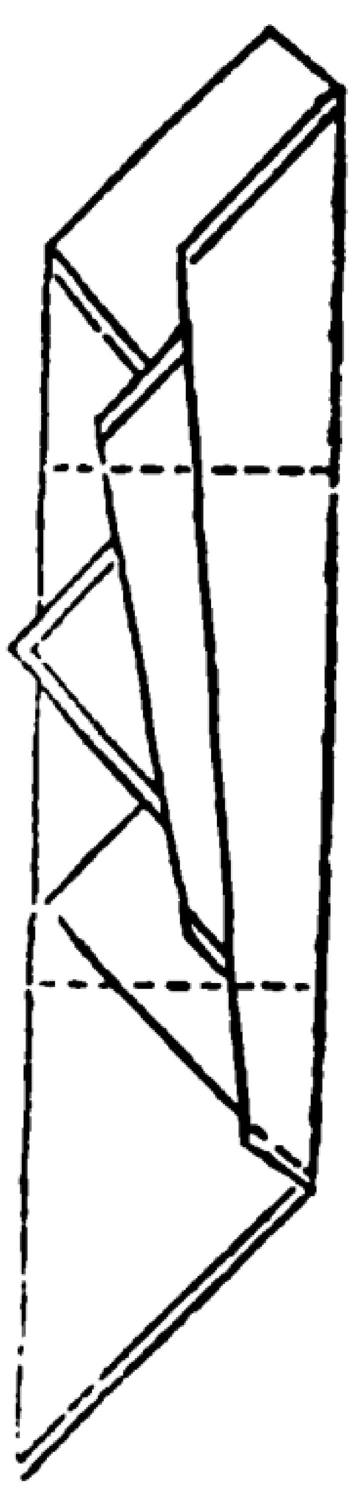
よりたちれとし、次に裏紙をたちいたにのせて、たちたる紙を上にかさねて、まなかの所をすこし、糊にてとめ、
(裏紙紅紙にて、表奉書なる時は、紅紙の裏と奉書の裏とを糊にて、とめれくなり紅紙の裏は匂ひをとりて、後に紅にて出るほどをぬりて用うるなり。裏紙、共に白き時は、表紙裏紙たゞに二枚かさねて用うるなり。さまざまの紙用うるにも、れほかたかくのごとし。)
四方五厘づゝ、又は一分づゝ、裏紙の方を大きくして、錐にて標をうちて、四方をたちれとし。
(五厘、一分づゝ殘せる所を、匂といふなり。)

形紙の圖



形紙を、表の方よりあて、上の方、下の方と一筋つゝ標を錐にてうちて、(形紙の裏より錐にてそとうち出したる所、即○をかきたる處に標をつくるなり)
裏の方より、定木をあて、へらにて筋を引て、形紙をりたる時の順によりて、表より折る時は、へら裏よりあてゝかげんをなし、折りあがりの時、へらにて折目を押ひらむべし。裏より折る時は、表の方よりへらをあてゝかげんをなしてをりなすべし。折方出來の時、上下より裏へ折かへしをなすには、裏の折めの所へ、錐の柄などにても丸き物をあて、兩の手に端々をもちてころがして折目に丸みをつけて折かへすべし。
(水引かけやうは、眞結(こまむすびとも、まかむすびともいふ)に結びて、端に縮々を擧げ、又はもろわな、丸きもの、時は片わなにむすぶべし。

(眞)手遊包

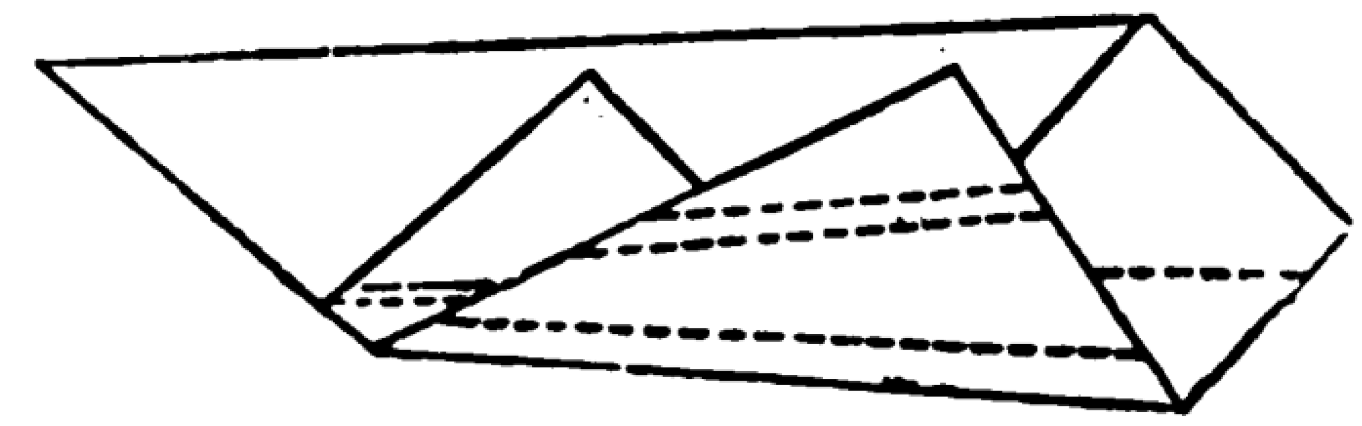


點線の處裏に折り返す

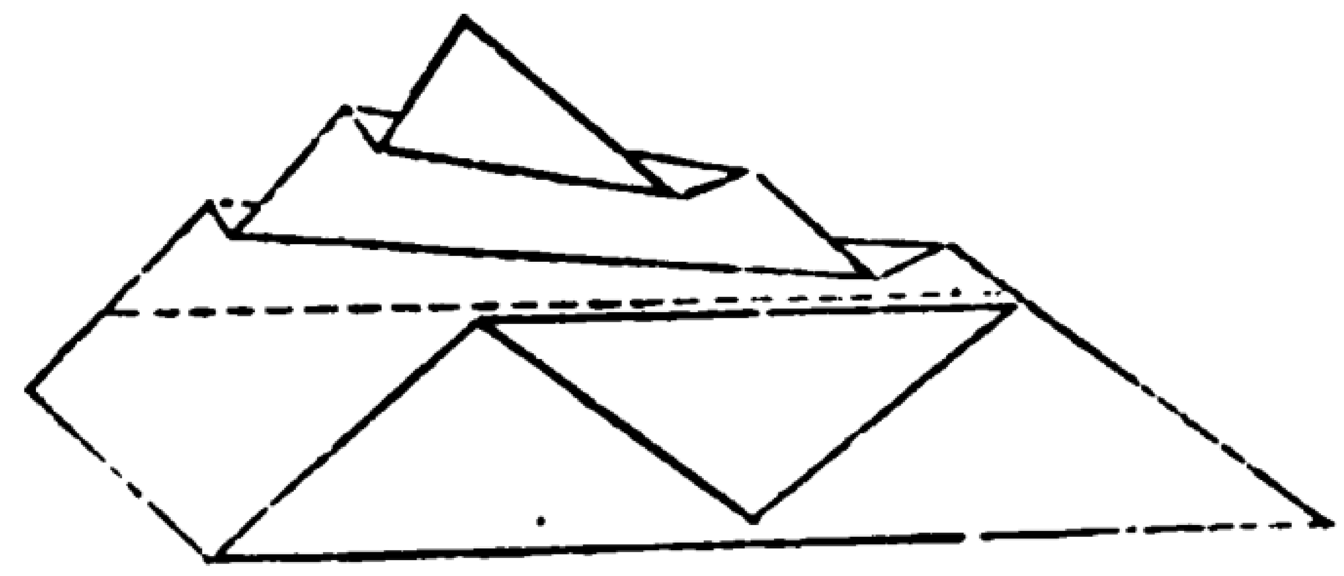
包方

草の方の第一圖第二圖の如く折りて、さて、此の第三圖第四圖の如く次第に折りなして、形紙をつくりなすべし。

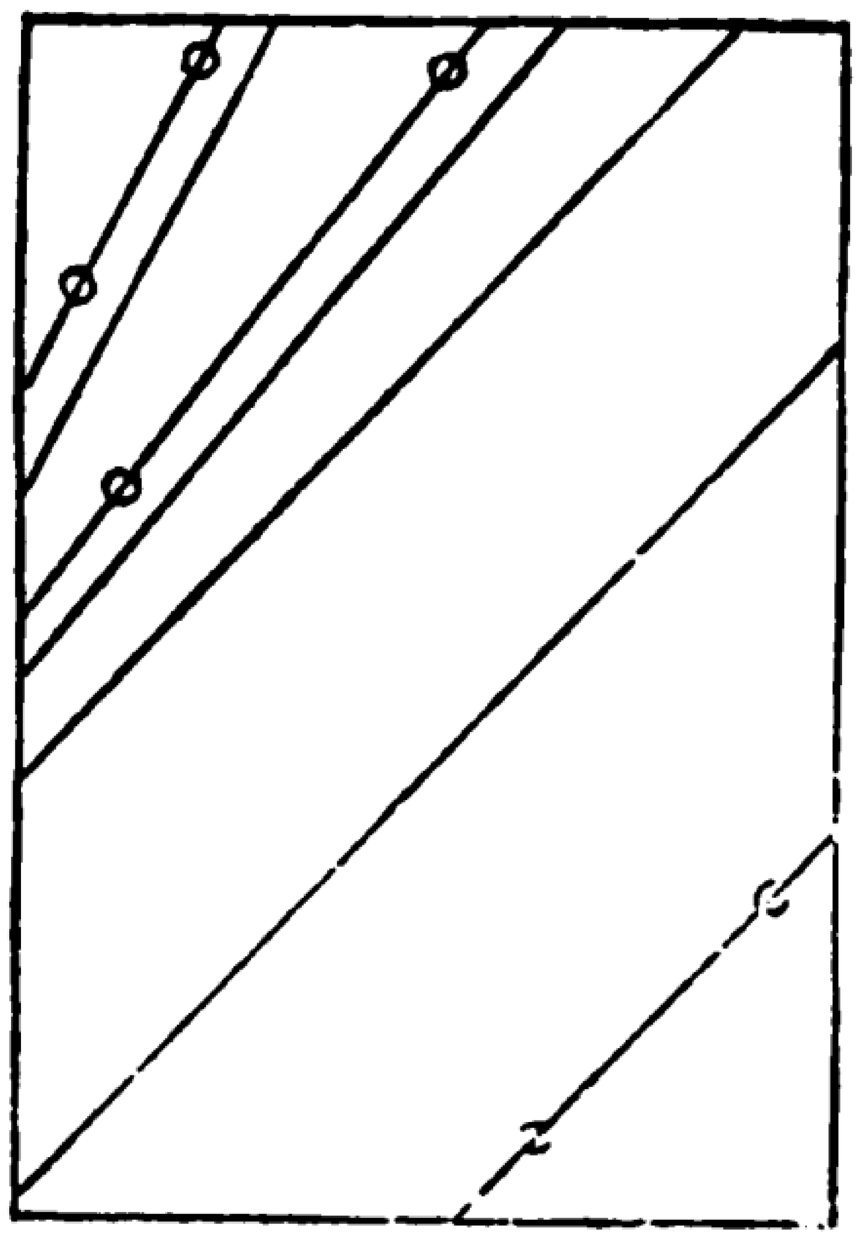
第三圖



第四圖



形紙の圖



形紙つくりやう、包方をりなすやうは、草の方にてよく志らるべけれど、かさねていはず。

茶の湯

茶禮初學

孤峯庵碌仙齋不美

關　葦雄

一客中立

但風炉の時は膳引終り、炭取持出、炭手前、次に菓子を出し、客中立。

不美曰、炭斗を持出、炭手前には亦習有之、前以炭斗の炭を組置べし。其組様は第百四拾四號に詳しく掲けたれど爰に言はず。扨、茶の湯の時は、釜敷組物の類不用、必釜敷紙を用ゆべし。(但し是は杉原紙を用ゆる事故實なれ共、此紙當時得がたきときは、是に換て半紙を用ゆるも無妨、半紙は四ッ折にして懐中すべし)偖炭手前の時釜敷を出

す場合に至り、此紙を取出し用ゆべし。(但し炉風炉共に折目を釜の方に着ると心得べし。尙口傳)炭仕舞香を焚。蓋をする時、客方香合の所望をなすべし。主是を請て向を直し、例の所へ出す、跡炭の仕方第百四十五號の通り、灰炮錄炭斗引終り、直に座箒持出(但し座箒は鳥の尾羽を束ね結たるもの也)炭斗置たる邊より風炉の前通り輕く掃べし、凡そ掃方は、横に二個竪に一個と、跡へ逆行して勝手口の方へ掃込べし。勝手口の外にて座掃を前に置、勝手口締切て後、勝手の方は別に掃出しに成方を明け置、其方へ掃出すべし。此中客方は香合を前に取寄、次禮して順次拜見すべし。末座に至らば上客へ戻し、上客より亭主へ返す。亭主は香合の戻りたる場合を見斗ひ、出て釜の正面に座し、釜の蓋を切掛、客方に向ひ一禮して香合持入べし。此時客方より香合の挨拶として賞翫の言辭を呈すべし。主は謙遜して仮初にも誇言が間

敷事を言ふべからず。直に菓子を出すべし。(但し菓子は茶の湯に限り、大振に製して一個付、銘々菓子器たるべし。菓子器は和漢其品多しと雖先づは一閑張、如心齊好、菱形の盆等よし。菓子の種類無量、又季節の斟酌もあるべけれど爰に不言。黒文字の揚技を水に濡し、其儘附すべし。是を脇取盆に載せて持出、例の如く上客より順に引終りたらば、勝手口に下り、召上たらは暫時御中立可被降と云て勝手口締切べし。此時客方は御鳴物にて爲御知可被降と云べし。扨亭主は是より先に、中立すべき腰掛へ、圓座、客の數程煙草盆を出し置べし。そこで客方は懐中の紙を出し菓子を盆より取移し、楊枝にて扱ひ食すべし。(但し此揚枝は必持歸るものなり)菓子盆は上客より順々重ね送り、末座に至り、是を辨宜の場所へ置べし。次に上客は二客へ御先へと一禮して居直り、床の掛物を再見し、立て風炉の前に往、湯相火相の

度合を見合、潜り口の外向に座し、潜口を明け、草履を直し、先両足を出し、履物をはきて罷出つべし。二客以下同様に一旦退くべし。末客出たらは例の如く潜り口の戸を微音ある様に締切べし。

(以下次號)

女禮

有住常子

焼物出しやう

次に焼物を持出で、本膳本、二、三の膳を參らせて、の向へ進め參らすべし。進めやう、本、二、三に同じことなり。

本、二、三の膳さぐるやう

〻み出で〻、焼物ある時は、焼物膳の手前三尺ほどに跪きて、兩手をそろへて進めて、膝を右左と進めてわりて、焼物膳の足に手をかけて引よせて、兩脇をもちて持あげて、右膝を引て爪立て、左膝を引てつまだて〻、右膝をすこしうかめて、右に膝をひねりて、右に膝をひねる時、左膝を右の方へずらしてよするなり。

たちて、右足、一足を引て、左を一足引て、右を、左足のあとに横につけて、左足を右足の先にたてにつけて、めぐりて立かへるべし。次に三の膳をさくべし。

三の膳は、進みゆきて、三の膳の方へ向くやうにして、跪きて、兩手をた〻みの上にならべ進めて、膝を右左と進めながら居りて、膳の足をもちて引よせて、兩脇を持ちて、右左と膝を引ながら爪立て〻、左膝頭をうかめてたちて、左足より、一足引て、右足を引て、左足を右足のあとへ横に引て、次に右足を左足のさきに竪につけて、左にめぐりて立かへるべし。

是三の膳のさげやうにて、本、二の膳、焼物膳(向詰という)と、さけやうかはるなり。本膳をうけての引やうなり。

次に二の膳をさくべし。

二の膳は、進みて三尺ほど手前にて其方へ向くやうに跪きて、兩手を進めて、兩脇を進めて居りて、膳の足を引出して、兩脇を持ちて、右膝左膝を引ながらつまだて、右膝頭をうかめて右にひねりてたちて、右足より三足前の向詰の膳の如くめぐりて立かへるべし。

次に本膳をさくべし。

本膳はますぐに、手前にて跪きて、兩手を進めて、兩膝を右左と進めながら居りて、膳の足をとりて引よせて、左手を膳の下にいれ、右手にて右脇をもちて、右膝を引てつまだち、左膝を引てつまだちて、右膝をひねりて、たちて、右足より三足ひきて、右にめぐりて立ちかへるべし。

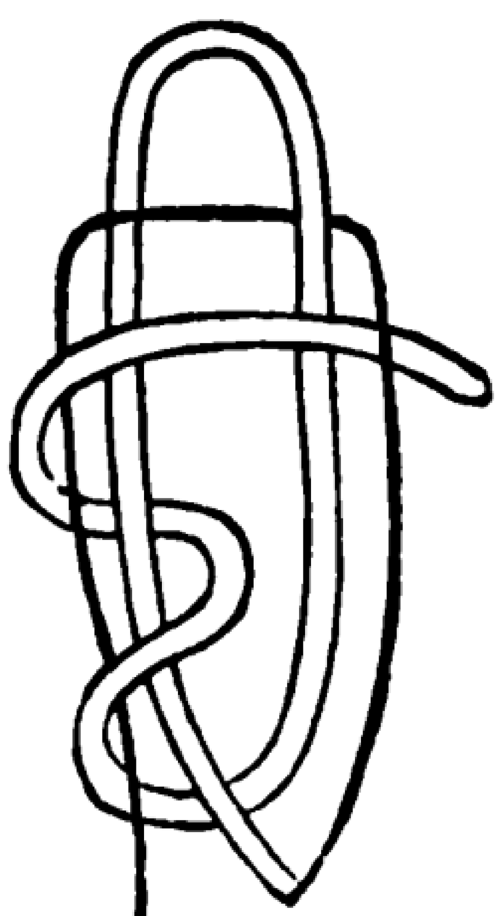
新撰結物百種

百草庵一無

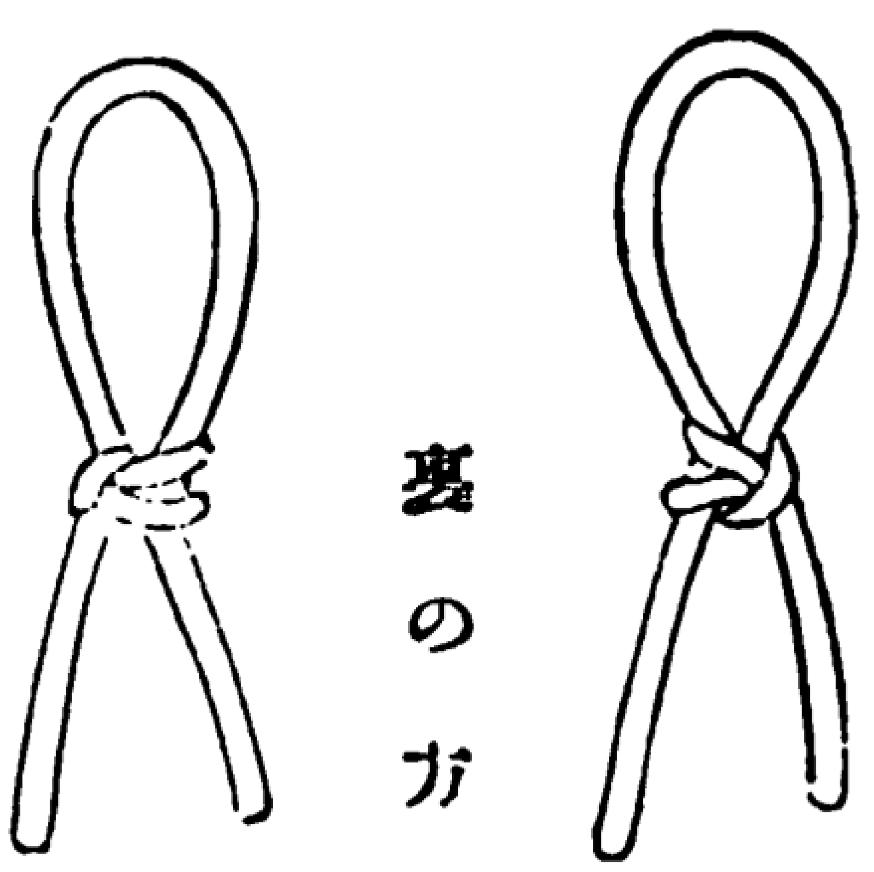
うさぎがしら17

（石井泰次郎云ふ。是は貞丈翁が教へのおとをとゞめたる結の記に見えたる結びなり。鷹の餌袋につくる結びなり。一方には鳥の首をつけ、他方にうさぎがしらを付るなり。餌袋の圖も同記に見えたり。）

第一圖



第二圖



表の方　裏の方

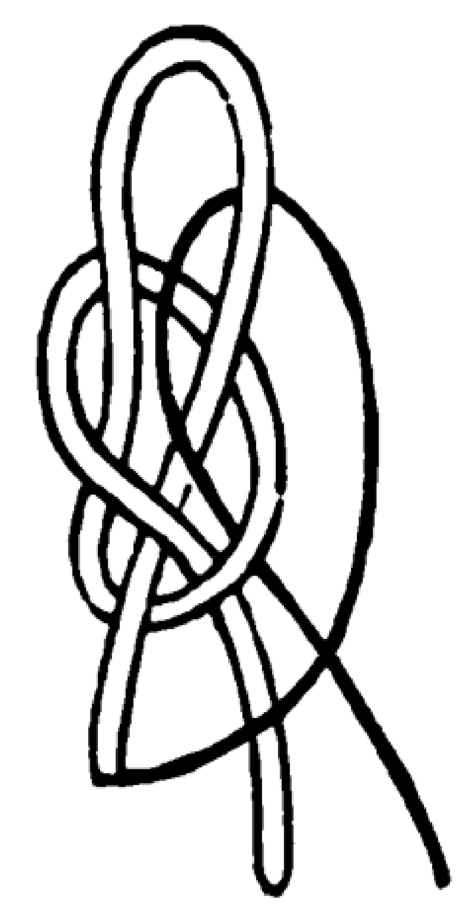
結び上り

麻苧結18

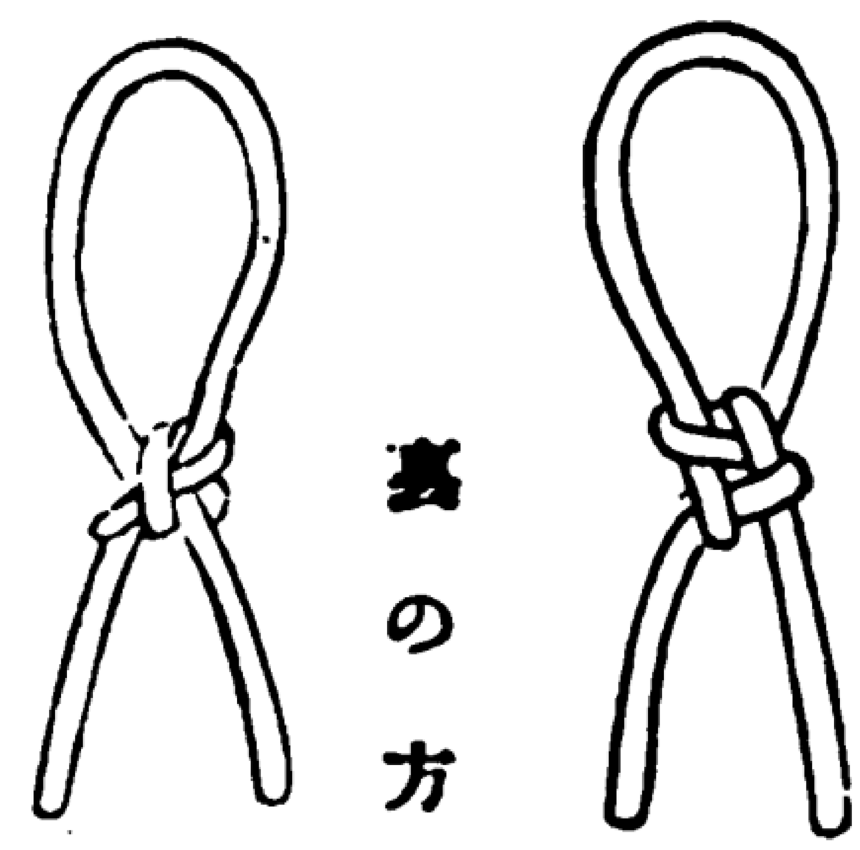
（同云ふ。是も同記に見えたる結びなり。黒線の如

く引通して締むべし。締むる時糸筋違へど此の圖の如くならず(結記)

第一圖



第二圖



結び上り

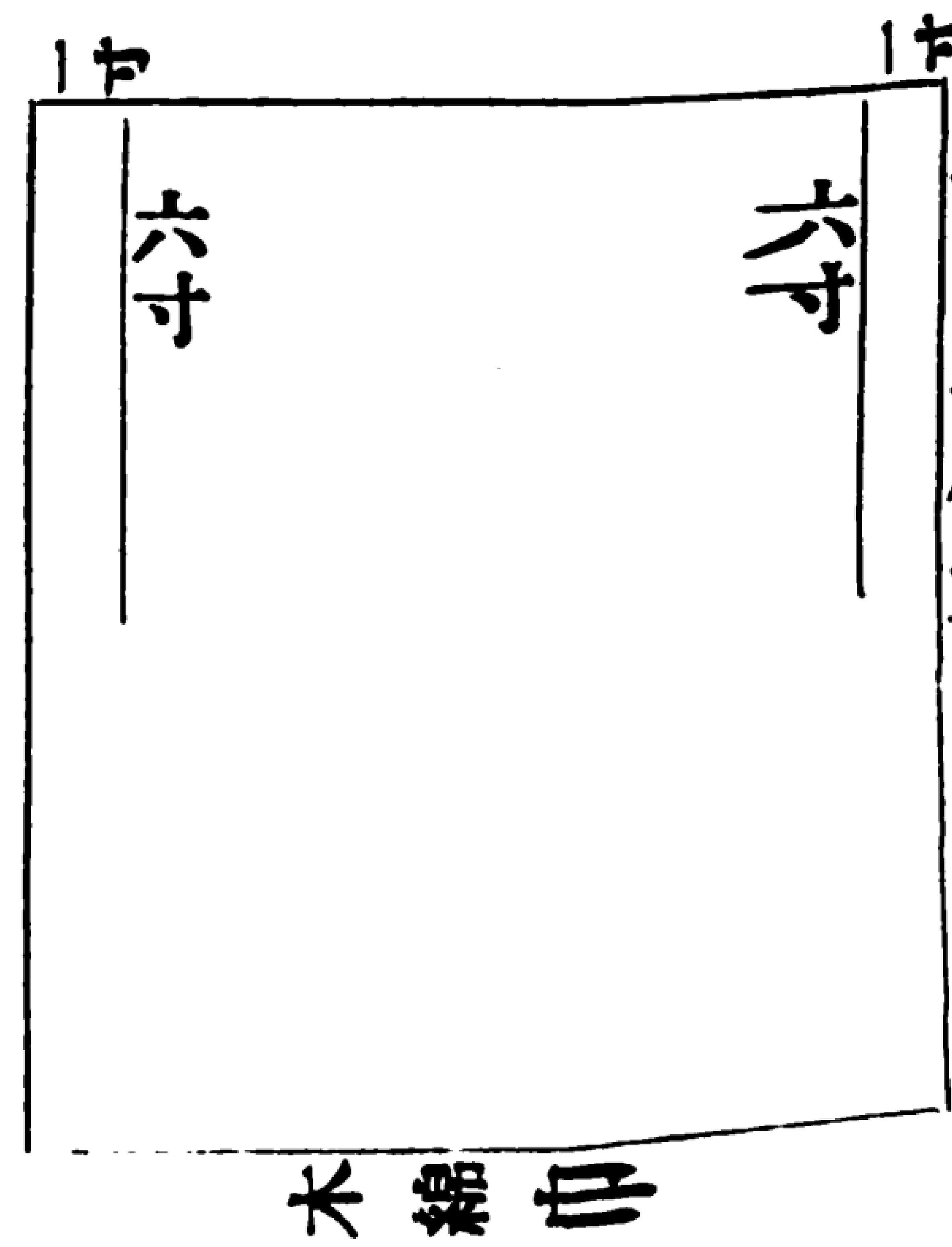
たちぬひ

西山たい子

(九十九)　猿子

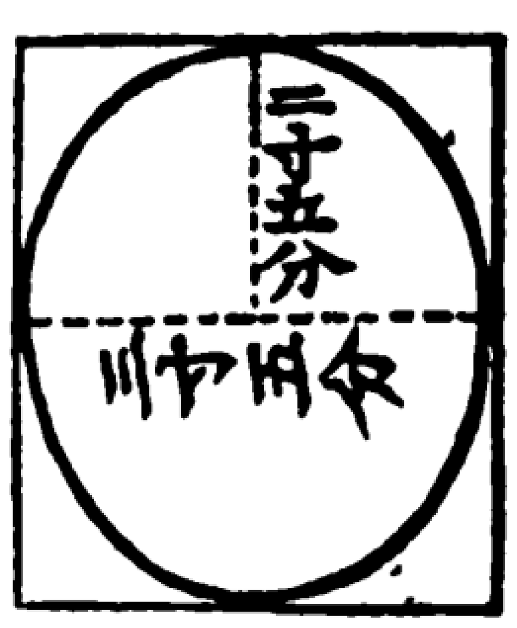
猿子は脊を暖かならしめむため、背にわつく綿を入れ、着すれど恰も猿の子の背の如く圓く高くなる故に、猿子と名づけて、小兒に着するに尤も便りよきものなり。

そのたち方

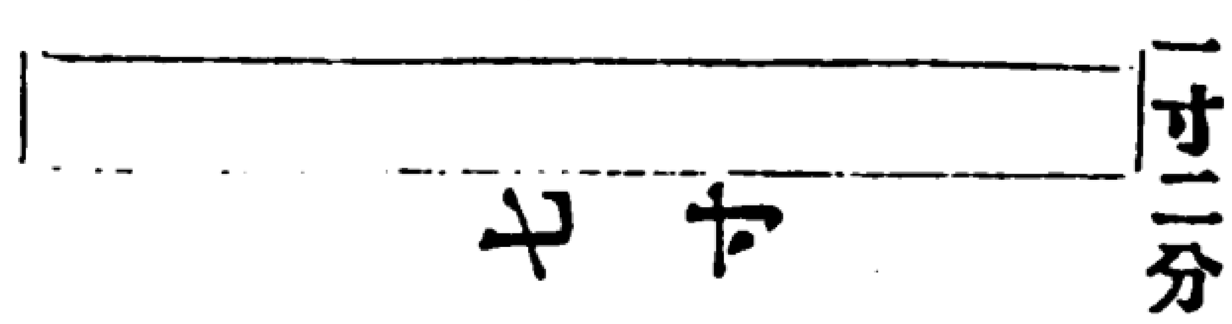


裏表を合せて、二つとも同じく木綿幅にて、丈け一尺二寸だかりのものを、圖の如く兩脇を一寸だけ、六寸切りこみて、あとは離さずにおくべし。其の細き方、前となり、廣き方うしろとなり、六寸は脇明となるなり。又外に天鵞絨にて三寸五、六分

えり



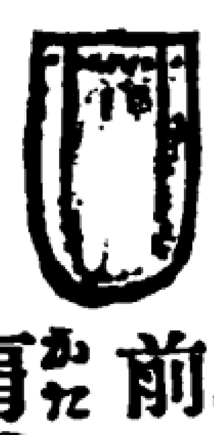
ひも



巾の五寸切を先きの圖の如く切り、襟とし、又圖の如きひも切二つを要す。そのぬひ方はまづ最初に、紐を二本ぬひ、綿を入れてひき返し、一方のはしをく丶りて、紐をつくりおき、夫より襟をとり、



圖の如く二つに折りてぬひ、綿を入れて、引きかへすべし。但し襟には綿を入れずともよろし。けれど、綿を入れたる方愛らしく見ゆるなり。夫より身衣を取り、

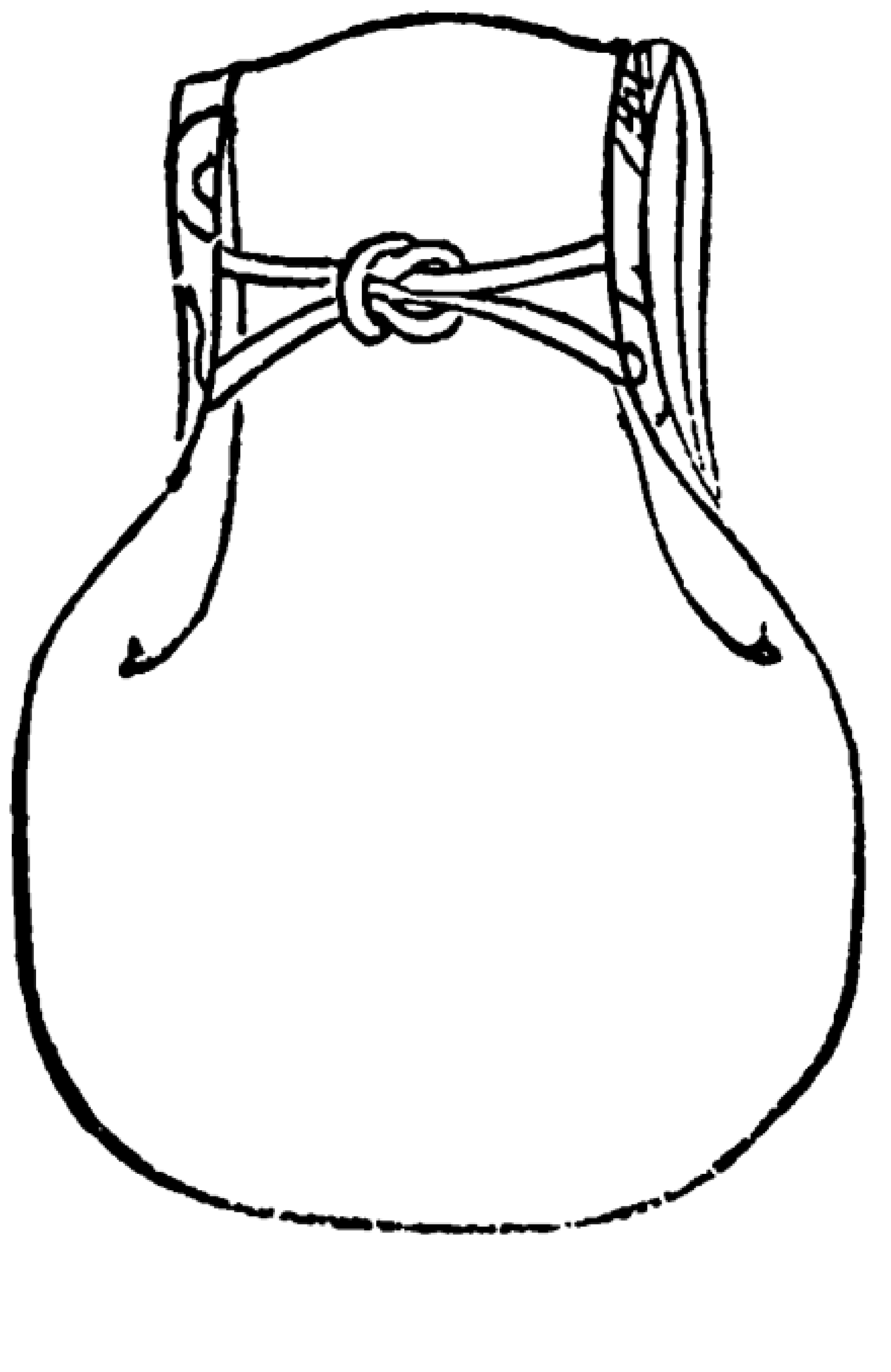


前後の肩、圖の……の處を引き合せ、裏表とも、左右縫ひ合せ、前にかへして細かに〆つけをかけ、それより、表と裏とを合せて、襟の處だけをあけおき、又前の細き所、上より三寸五分むかり下げて、左右に紐を挾み、周圍をぐるりと縫ひ、裏へ返して細かく〆つけをかけ、綿を厚く入れて、ひきかへし、脇をくけ、襟を裏側にぬひつけ、身衣の方へ返して、表にて絎け、垂らすべし。切は、縮緬、唐縮緬、太織、緞子、何にてもよく、裏は、絹、甲斐絹無地の唐縮緬、緋金巾、桃色木綿、何れにてもよく。

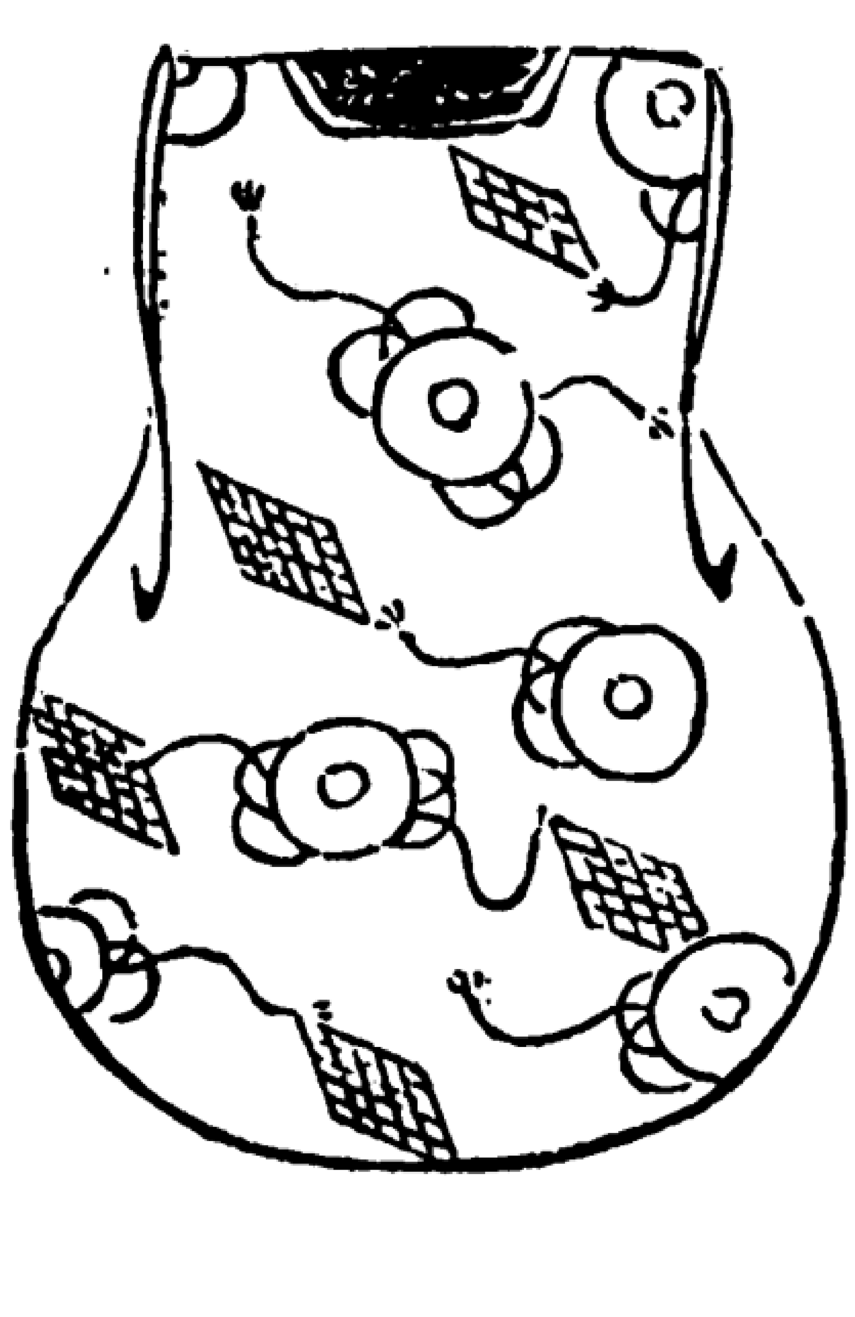
又、鶴、龜、寶物等を繡などにするもあり。いと優美にして、切も僅かにて足り、殊に暖かにして、いとよきものなるが、此のもの昔は大にはやりたるを、今のごとくすたらせむはいと〳〵口惜しきかぎりとてかくふるめかしきを取り出しぬ。

仕立上り

前の方



背の方



だいどころ

煮物

鯛すつぽん煮、くわゐ、はす○焼はぜのやわらか煮に大根うま煮○鯉のすつぽん煮に、生姜○鮒の甘露煮に大根甘煮○ひらめの煮付に、花形生姜○鮎の甘露煮、ひね生姜○金海鼠の煮付に、自然薯塩煮○榮螺の塩煮に、金柑甘煮○鶏に、こんにやくのころ〳〵煮○鴨のたゝきに、獨活のうま煮○半月大根に、牛肉甘煮○牛肉に、さゝがき、牛房の煎煮○海老と半月大根のうま煮○

和物

はしらのおろしあへ○あわびのわたあへ○伊勢海老の卵のきみあへ○ぶりの、きくらげ味噌あへ○人参に、白合根の胡麻味噌あへ○ねぎの白根に、きくらげ、芥子あへ○あげくわゐに、小松菜味噌あへ○白魚をさつと湯を通し、鶏卵味噌あへ○たらの芋湯で、胡麻味噌あへ。

汁

つみ入に、小かぶ、葉を付てたてに細切○ぶり一さいの目に、いてふ大根○むかの剣身に、すくひ豆腐○くづし豆腐に、小はまぐり○あられ豆腐に、菜こま〳〵○小芋わ切に、菜こま〳〵○赤貝へぎて、小芋輪切に、せりこま〳〵○焼豆腐さいの目に、はうれん草たゝきて○小鳥のたゝきに、粒椎茸、青菜たゝきて○





秀歌集（三十四）

鹽井正男

○

思ふことなくてぞ見ましほの〴〵と
　ありあけの月の志賀の浦波

○これは、増鏡にあり。元弘の昔、花山院大納言師賢卿、後醍醐天皇に、代りて、叡山に上られ、衆徒をあつめたまへるに、思ふやうならずして、衆徒ども心かはりしてけれど、大納言も、忍びに山を下り、笠置なる、天皇の御方へまゐらむとて、夜ふかく志賀の浦をすぎ給ふに、有明の月くまなくすみわたりて、寄せかへる浪の音もさびしきに、よみ出でたまへる歌なり。○思ふことなくて、今は國の爲め君の爲めいろ〳〵心にかゝることと思ひわづらふことあれど、かゝる心配なくして此の景色を見たいといふことな り。○見まし。ましは、元來むといふ未來をあらは す詞より轉ぜるものにて、大かたはむは同じけれ ど、をりには、願ひのこゝろを含むことありて、こ の歌のは、やがて、それなり。○ほの〴〵と。ほんの りと有明の月のにほふけしきなり。

○一首の意は、ほんのりとにほふ有明の月の光りに 面白き志賀の浦波のけしきよ、心にかゝる心配なく して、見たいといふことにて、一首の意は、明なり。 思ふことなくてとの一言に君を思ふ限りなきこゝろ の見えて、あはれなり。なほ、全じ人の歌に、

○

別るとも何かなげかむ君すまで
　うきふるさととなれる都を

○これは、師賢卿が元弘の御事ならずして、下總の 國へ流され給ふことなり、五月の十日あまりと都

出でられける時によみたまへるなり。○別るとも。都を出で行くをいへるなり。都に別るともなり。○何かなげかむ。何んで悲しまんや悲しみはせぬといふことにて、何かのかは[illegible]所謂反語なり。○君すま[illegible]で、天皇樣の住みおはさずしてといふことにて、君とは、後醍醐天皇を申し奉れるなり、元弘の御事やぶれて、天皇樣は、既に隱岐の小島へ出でさせられ給ひて、京都には住みたまはねど、かくいへるなり。○うきふるさと。悲しき古里といふことにて、ふるさととは、もと都にて、今はあらぬ里をいへるなるが、京都は既に我が君と仰ぐ後醍醐天皇のおはしまさぬ故に、今は憂き古里なりといへるなり。

○一首の意は、我が尊び仰ぎ奉る天皇陛下も、今は住みたまはず、されど、我が勤王の士の爲めには悲しき古里となりはてたる此の都なれど、今おのれは、この都に別るとも、何んで悲しまん少しも悲しみはせずといふことなり。都に住みなれたるも、君

あれむなり。都のうれしきも、君あれむなり。都のこひしかるべきも、君あれむなり。その君なければ、今はをしくもあらじとは、[illegible]、君を思ふ忠[illegible]の情見えて、あはれに[illegible]くかなしき歌にこそ[illegible]なは、おなじ人の仝じ時の旅路の歌に、

○

海山を見る空もなし我が心
　さながら君にそへて來ぬれど

○見る空もなし。見る氣もなしといふやうなる意也。○さながらソノマヽ或は、スベテといふ如き意なり。我が心を總べて君にそへ來たりとの意なり。○君にそへて、君の身に附き從はせて來たりたれどといふことなり。君とは後醍醐天皇をさし奉れるなり。

○一首の意は、海山さまぐ面白くかはりたる景色はあれど、おのれは更に見る氣もなし、如何となれば我が心は、總べて、我が戀しき天皇陛下の御身に

附き從はせて、天皇さまの御側に置き來たりたれど、我が心は空虚なれど、いかなる海山も、更に見る氣なしといふことなり。さまでの歌にはあらねど、忠士の情おなじくあふれて、ゆかしき歌なり。おなじ御時、増鏡に見えたる天皇の御歌一二首をあぐれど

○

まだなれぬ板屋の軒のむら時雨
　音をきくにもぬるゝ袖かな

○これは、元弘の御事たがひて、天皇様の、六波羅なる南の板屋のいとあやしきにおはしましける時、ならはぬ御宿りに、時雨の音さへはしたなくて、つくゞゝとよみたまへる御製なり、一首の意は、明なれどいはず。

○

いのちあれどこやの軒端の月も見つ
　またいかならむ行末の空

○これは、隱岐への御旅路の途、攝津の國、昆陽野の宿にて夕づく夜ほのかにをかしきをながめたま
てよみたまへる御製なり。これも、一首の意は、明
なるべし。あはれにかたじけなく、御心の中思ひし
のばれたてまつるになむ。

○

思ひきやうらめしかりし武士の
　なごりを今日はしたふべしとは

○これは、おなじ御時、土佐へ出でさせたまひける
尊良親王が、土佐におはしましつきて、御おくりの
武士にのたまはせける歌なり。○思ひきや。思ふれ
りや、思はざりきといふことなりやは例の反語なり
かゝる事は、かねては露ばかりも思はざりし事なら
といふことを、強くいひたるなり。○うらめしかり
し武士、親王を土佐の國へ送らむとて、護衛に立ち
たる敵の武士をいへるなり。かく事たがひて、心に
もあらぬ鄙の住居へ護衛しゆく武士なれど、うらめ

しかりし武士とも思へるなり。○などり。もと波殘りの意にて、波のうちよせたるが、かへる時に、あとに殘しゆくしはをいへるなり。それより、轉じて、すべて、もの事の過ぎ去れる後に、なほ其の氣の殘るをいふ。故に、離別の時、あとに殘るこひしき心をもなごりといふなり。

○一首の意は、我れを心にもあらぬ鄙の住居へ護衞しゆかむとて來たれる武士は、うらめしくも思ひたるを、今日は、そのうらめしく思ひたる武士のいとなつくしく、別るゝ事のいとかなしく、なごりををしまんものとは思ひし事か、露ばかりも思はざりし事なりしよ。といふことにて、さびしきれん身の上をのべたまへると共に、大かたの人草をすてたまはぬ、深きなさけのこもりて、あはれにやさしき御歌のけしきなり。

源氏物語講義（十五）

下田義天類講義
山川　鵜一筆記

内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし。勅使來てその宣命よむなむ、悲しき事なりける。女御とだにいはせずなりぬるが、飽かず口惜しう思さるれば、今ひときざみの位をだにと、おくらせ給ふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々おほかり。物思ひ知り給ふは、さまかたちなどのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく、にくみ難かりし事など、今ぞおぼし出づる。さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなう猜みたまひしか。人からの哀に情ありし御心を、うへの女房などもこひ忍びあへり。なくてぞとは、かゝる折にやと見えたり。

○その宣命よむなむかなしきことなりける　宣命は内記に命じて作らしめ、少納言をしてよましむる天皇の御詔書なり。こゝは贈位のことを書きたる宣命

なり。かなしきことなりけるといへるは、尋常一般の加階ならむ、悦むしかるべきなれども、こゝの贈位は、これを此の世の限りとして御授け下さるゝ位なれば、その宣命を承るが、却りてかなしき由なり。

○女御とだにいはせずなりぬるがあかず口惜しうればさるれど云々　天皇の御心の内を双紙地にて書き出したるなり。母君北の方の詞に依りて見るも、御息所は、生れし時より思ふ心ありし人にて、父なる故大納言の今際となるまで、たゞこの人の宮仕への本意、必とげさせ奉れ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづをるなと、返す〳〵諫めれかれたる人なりしこと知らる。北の方は、この遺言をたがへじとして、いだしたて侍りしを、陛下にも思召し知り給ひて、身にあまるまでの御幸遇をも賜ひしなり。されど、遂には昇進せしめて、后妃にもすゝめ給ふべく思召し、掟て給ひしなるべし。然るに、人生は常なくして、假にこの悲みを見るに至りたれど、陛下の御希望は水泡に歸して、后妃の位はおろか、女御とだに言はせずなり果てたるを、殘念に思召さるれど、せめて今階の位をなりとも授けて、從來四位なりしを三位とし、女御と同等の資格になさむとて、贈位せらるゝのであるとなり。位をだにの下には、授けむと含めて見べし。

○これにつけても憎みたまふ人々れはかり　疾視目の重圍中にありし御息所は、この死後の御贈位のあるにつけても憎まれたまひしなり。死後の贈位の如きは、さむかり祝すべきことにあらざれども、嫉妬の念に藉られたる人たちは、これにつけても御息所を憎みたりとなり。

○物れもひしりたまふは　物の是非善惡をわきまへ知りたまへる人々はなり。

○さまかたちなどのめでたかりしこと、心ぜせのなだ

らかにめやすく、にくみがたかりしことなど　御息所の樣子なり。さまかたちは風姿態貌なり。心ばせは心術性情なり。即外貌内容をいふなり。などらかは角立たぬこと。めやすくは恰好よきことなり。

○いまぞれはしいづる　人間の毀譽は、棺を覆ひて後に定まるとかいへる如く、是非善惡の辨ある人々は、御息所の死後となりて、始めて外貌内容の完全無缺なる婦人なりしことを思ひ知りたりとなり。毀譽褒貶の定めなかりし御息所の本領、こゝに至りて始めて斷定せられ、いよ〳〵公義正道の婦人なりしことを云ひいて給へるなり。

○さまあしき御もてなしゆゑこそは云々
御息所の御寵愛が尋常一樣ならざるゆゑに、他の女御更衣たちはけをされて、手を束ねてのみあるありさまなれど、外見が甚不恰好であつた、その不恰好なる御待遇をなされたる故にこそ、御息所にも愛憎なくあたりて、妬みそねみもしつれとなり。すげなうは酸氣なくなり。甘くも辛くもなきことゝなり。即冷淡無愛憎なるといふに當る詞なり。

○人がらのあはれになさけありし御心を、うへの女房などを云々
うへの女房とは女御更衣より以下の宮仕人なり。即女嬬命婦などをいふなり。御息所の人品の、可憐情深くおはしましたる御心を、女嬬命婦たちも忍びあひて、戀ひ慕うたとなり。うへの女房などもとある‖もの字に眼を付くべし。御息所の公義正道の婦人なりしことは、心ある女御更衣の人々の思ひ知りたるのみならず。以下の女嬬命婦たちまでもの意なり。

○なくてぞとは云々
古歌に「ある時はありのすさびにくゝかりきなくてぞ人は戀しかりける」。とある歌の句を引けるなり。歌の意は、世にある時は在に任せて憎くあつたが、亡くなりて後に思へぞ、今更その人の戀しいものであるといふ意なり。古歌にかく讀みしは、斯樣なる折

によみしものにやありけむと思はれたとなり。因に言ふ。引歌は文章上最趣味あるものゝ一つなり。他の一句をかりて其の全躰の意を持たせ、以ちて吾が文意を修飾す。文章にとりては最も氣の利きたる方法なり。されど、その用法當を得ざれど、却りて吾が醜を示すに似て、甚見苦きものなることは勿論なり。故に、引歌をなさむには、なるべく人口に膾炙せる秀歌を取るべし。苦心の作意も、その原歌に判然せざるより、其の功を奏せず、却りて文意を損ふに至ること、往々見る所なり。古抄などに、引歌は三代集の歌を出づべからずなどいへるも、これらの注意なりと知るべし。この源氏物語は、引歌をなすこと殊に巧妙を極めて、其の自由自在なることは、その所々にて喫驚すること多かるべし。能々含味して見習ふべし。

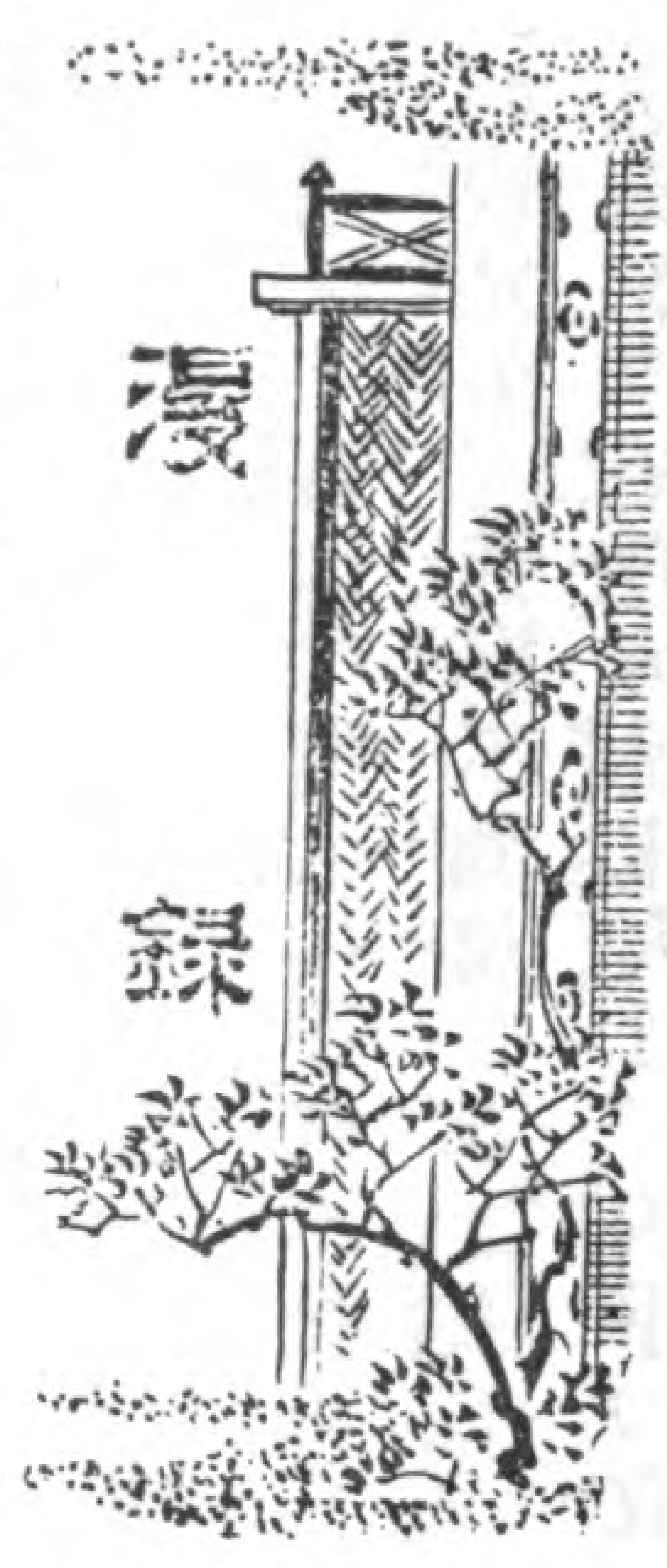
さてこの一段中「女御とだに言はせずなりぬるが云々より以下の句は、すべて草紙地の文なり。その地

文中また「女御とだにいはせずなりぬるがあかず口惜しうおぼさるれど云云れくらせたまふなりけり」までは、上の三位の贈位ある所以の説明なり。又「さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみたまひしか云々こひしのびあへり」とあるは、前の「さまかたちなどのめでたかりしこと云々いまぞおぼし出づる」とある句の注釋なり。

以上の一段をとり總べて申せど。

兎角する程に、内裏よりは勅使を差遣せられ御息所に三位の位を授けたまふ由にて、勅使式場に臨みて、其の由の宣命文を讀みあげたまふ。位の一階進みたるなれど、ありがたく拜受すべきなれども、これをこの世の暇乞として贈らるゝ位かと思へど、それを承るが却りて悲しいことである。さて、朝廷のかく御贈位したまふよしは、御叡慮に、この御息所をど、后召の位にも進めまほしく思召したりしに、后妃は愚、女御とだにも言はせず

飽きたらず殘念におぼしめさるれど、四位の位なりしを、せめて今一階なりとも授けたまはむとて、贈らせたまふ所以である。この死後、贈位につけてまでも、猶御息所をにくみたまふ人々がおほくあつた。然し、その内には、是非を辨へたる人等は、生前における御息所の、風姿態度の非難すべき點なく、足り整ひたりしこと、心術性情の角だゝず、恰好よく、惡まむとしても憎み難かりしことなど、死後の今となりて、はじめて追想した。元來、御息所の、人々に憎まれしは、ひとり御寵愛を專にし、他の女御更衣たちは、外聞あしき御待遇にてありし故にこそ、その餘憤引きて、御息所にも愛相なくねたみの炎を向けつれ。決して人に憎まるべき性質の人にあらねど、今となりては、女孺命婦の人々に至るまでも、御息所の人品の可憐に、情深くおはしましたる御心を戀ひ忍びあへり。古歌に「ある時はありのすさびににくかりきなくてぞ人は戀しかりける」と云ふ歌をよみしは、斯様なる折に讀みしにやありけむと思はれたり。と言ふ意なり。



主從心得草（初編下之卷續）

諏訪忠元 寄贈

論語三に、子のいわく、これを愛して勞すること勿らんやといへり。此心は、子を愛するとならど、我儘をさせず、勤勞さすべし、是を愛する事の深しといふ。又勤勞させず、氣隨にそだて、子を捨るといふもの也。愚人のする所なり、無慈悲の第一也。是大聖人孔子の御言葉にして、少も相違なし。急度心得べし。水滸傳にも、自在は人とならず、不自在は人となる。とあり。

上の事と合せ見るべし。
御明君の御文章、又不自在の事ども、一々心を留て考へ見るべし。我慢、我心、驕奢をれさゆるには大妙薬也。
日々服用して、己が高望、無理の願事をやむるの秘傳也。心を留よ〳〵。不自在の道理能手にいらぞ、大自在の場所にいたる日あるべし。秘密〳〵。堀田豊前守殿仰には、我氣に入たる家來壹人もなし、又我をよき主人なりと思ふ家來壹人もなしと。是よき悟りなり。賢人も世間大方此分際也。然れども、子供衆には行義等嚴敷して、家來にはやさしく遊ばされ候と承り及候誠にありがたき御心栄也。人間一生記に、二十三十壯年の行跡違ふ時は、老後の怨となる事必定也。千里の道の違ひも一足の下に發るといへり。今踏出す所は一足の向よふなれども、左右東西に分れて行時は其行着所にては千里の違ひある也。壯年發足の迷ひ道は色欲なり、此色欲は、佛も傳授なく、聖人の敎へにもなけれども、己と自然に發明す。正三位家隆の歌に、

●れしへぬに我からわれと心得て
　戀をぞ人のならふものかは
若き身は殊につゝしめ皆人の
　ふみ迷ふのは戀の山道

辛抱すれぞ安心にして樂み多し。誰に恐るゝ事もなし又辛抱なし、放蕩する者は少しはたのしみのやうなれども、末に大きなる苦みあり。夫のみならず、常に心に何となふ恐れありて、苦みたへぬものなり。●諸人能此道理を辨へてつゝしむを安心と思ふべし。
兎角其身〳〵の程をしりて、樂みもよいかげんにすべし。公家、武家、百姓町人の手代奉公人となる事、多くは己が親兄弟、貧窮不如意なるに依て、家來となり奉公するなり。又抱へ置主人は、四季の衣服をあたへ、飲食恣にさせ、其上給金を遣はし、家職をならわせ、是は後々主人の名代と成て、其家を相續し、あるのたすけをなさしめんと思ふ覺悟なり。●面々心を忍か

せにせず、廉直に勤る時は、立身加増の徳付て、其家の家老番頭となりて、従類下僕下女等迄恐れをなし、主人に相次での威光也。己が丁雅の古しへ濡草鞋のときをかへり見ぞ、分際に余る大慶、内外のはまれならず。然に、己が心に奢りを發し、氣隨を働て惡を好み、惡所にさまよひ、茶屋に立入、或は色里にれもひきて、多くの金銀を費し、主人を倒し、親兄弟請人に難義を掛、其身も没落す、是影に居て枝を折、流れに住で源を濁らすなるべし。誠に主人の大恩を報ずべきはづなるに、かへりて主人の金銀を遣ひ、又善を行ひ、彼これをもわらはすべき筈なるに、却て主人の惡名を引出す、是何事ぞや。不忠といふもあまりありなく〜心をせめ、身を愼んで主人の繁昌、家の譽れを願はすべし、其内に我威勢も籠る也。其心にて勤なも、譽れもありて安心の大道也。此外の道は、わやうしく〜。心學にいわく人の物を大事にし、費へなき様にするは、人の爲にはあらず、皆手前の爲となる陰徳の一ッ也。とあり。此道理を合點して、主人の爲、親の爲を第一とせよ。是福徳の涌出る種也。我身の立身をこゝろにかけず、忠義孝行をせよ。歌に、

君に忠親に孝行する人は　此世からなるいき如來なり

正直を心にかけてますかゞみ　かけひなたなく奉公をせよ

此心は奉公にかげ日向、あるは正直ならぬ心より起る事也。人といふ者は、正直になくては天地の中に居所なし。兎角正直にして世の中を大事に勤べし。忠孝は其内にこもると知るべし。

（未完）

島津齊彬公逸話鈔

公御幼年の頃御讀書にふけらせられ、御身の御さはりにならせられんと、御近習の人々、御母公に告げ奉り、たまには御遊びごとをもあらせられんことを願ひ奉りし

に、御母公聞かせ給ひ、いかにればし召されけん、やがて一つの盆石を公の御もとに進せられ、それに御取そへの御短冊

ひかりなき石とみなしぞ心もて
　みがきわげなむ玉となりなん

公これを御覽せられ、御禮の御文に添へられし御歌

いにしへの聖のみちのかしこきを
　ならひて學ぶ朝な夕なに

御母公是を御覽じて御喜ありしと。是、公十二歳の御時なりと云々。

新瓦

緒言

新瓦、一篇、東里先生の作る所なり。東里先生、姓は中根氏、諱は若思、字は敬父、伊豆の下田の人。幼うして父を喪ひ、母に事へて孝謹、始め佛に入り、中年之を悔いて儒に歸す。物部徂徠に學び、はずして、室直清に行き、晩に姚江の學に得る所あり。新瓦は、姪女芳子の爲に遺す所なり。先生學識高遠、有德の君子なり。太田錦城、古賀侗庵皆推尊して隱君子となし。その文字は實に秦漢之文なりとなす。古雅にして簡約、確固にして平遠、之を近代に求むること難し。而して新瓦に至ては、特に惻然として人心を感ぜしむるものあり古人以らく、李密が陳情表を讀んで泣かざるものは、その人必ず孝子にあらずと。われ亦云はんとす、東里先生が新瓦を讀むで泣かざるものは、の人必ず孝子にあらずと。吁、人心を感ぜしむる如此は鮮し。先生も亦醇乎として醇なりと云つべし。先生嘗、高子啓に與へて曰く、僕携二芳子以過二植野一、西指二芙蓉一、而告二之先人所レ居、因懷二羈旅之悲一焉、又閔二芳子弱喪而未二自知一也、乃作レ歌曰、率二曠野一兮履二秋霜一、望二西山一兮悲二故鄉一、嗟

與レ梓兮在ニ彼陽一悠々旻天兮俾ニ心傷一乃命ニ芳子一、朝夕誦レ之、他日其思親也、將レ有ニ以知ニ此情一云々。又、芳子、年八歲、其父と俱に相に歸らんとするや、云はく、莫春春服成り。游子方翺翔。况乃與ニ乃父一携レ手歸ニ故鄉一。芳草萋以綠。鶺鴒鳴ニ路傍一。伯氏既仁厚。故舊亦温良。爾將下承ニ其德一永繫中于苞桑上。此行尤可レ樂。別離曷足レ傷。但母之不レ存。豈不レ斷ニ中腸一。庶幾遂ニ愛日一。令ニ老親復陽一。縱見ニ上林華一。勿レ忘ニ曠野霜一。と。新死、今、この章なし。故に特に抄してこゝに揭げぬ。讀者、庶幾くは、先生の淑德を察知するに足らん歟。

死

延享三年丙寅。予居ニ于下毛知松菴一。是歲冬。家弟叔德以ニ其幼女芳子一至レ自ニ相模一。因屬ニ芳子於予一而還。明年丁卯夏。芳子纔四歲。未レ可レ誨也。而予老矣。故叙レ所レ聞。以爲ニ一編一。畵ニ鳥獸於端一。飾以ニ朱綠一。名曰ニ新死一。乃使ニ芳子弄一レ之。庶乎遂能讀レ之以私淑也。不レ然。凡百君子。將ニ或以レ此誨ニ芳子一焉。則予雖レ死亦不レ朽矣。其辭曰。

咨汝芳子。汝相模人也。何爲遠來。居ニ於下毛一。此汝父不レ能レ庇レ汝。以爲ニ我累一。其薄才拙謀。誠可レ笑也。雖レ然。以レ汝觀レ之。其哀哀者。孰大ニ於是一。吾將レ語レ之。往年甲子春二月二十四日。汝母纔生レ汝。未レ及レ擧レ汝而違レ世矣。則愍レ汝憂レ汝者。唯汝父與ニ汝外祖母一也。我之愍レ汝。雖レ不レ如ニ汝父一。亦當下與ニ汝父一同上憂焉。然相去四十里。徒憂レ汝耳。於レ汝何益哉。汝父雖レ愍レ汝。而汝之鞠。則不レ如ニ汝母一也。惟其不レ如ニ汝母一也。是以愍レ汝益深。愍レ汝益深。故凡所ニ以鞠レ汝者莫レ不レ至矣。則雖ニ汝母一。亦無ニ以加一焉。其所レ闕者乳耳。家貧不レ得ニ爲レ汝買ニ乳婢一。則乞ニ乳於人之婦一焉。汝之啼也。抱而就レ之。然汝未レ能ニ多飮一。纔飽則已。少焉復饑。々則復啼。汝父安得レ不ニ數往而乞一焉。乍往乍還。日夜不レ輟。如レ此者數月。終爲ニ其人所一レ厭矣。於ニ它婦一也。亦如レ之。故不レ得レ已。乃代レ乳以レ糜。豈不レ悲哉。然汝父躬爲レ之。

飪不失宜。多寡有節。與之以時。故汝雖不得乳。亦未嘗瘠。且無病矣。是汝父能應其變。以完汝也。夫親之於子也。父生之。母鞠之。若汝父。非唯生汝。而又鞠焉。此乃兼父母之德。而其勞苦又如是。汝豈忍忘之哉。

咨汝芳子。曩者汝父之鞠汝也。不唯鞠汝。亦不可以不自食焉。苟不自食焉。無以鞠汝。故託汝於西家之嫗。而從事於市。將多得錢以與其人。而使厚養汝。且以自食焉。亦不得已耳。於是竭心竭力。任重忍難。日行數里。營々汲々。莫或遑處。然錢不可多得。而所以與嫗者。或未備也。吾雖遺之錢。猶未足補其闕也。則欲使嫗不厭望而遷怒於汝。其可得乎。此汝父之憂所以愈深也。吾明告汝。昔者。吾與汝父寓於江都。其鄰之婦。貪而虐。人皆惡之。竊號爲豺狼。嘗養人之兒。以受其直。之未入也。愛兒如子。既得其直。則如棄焉。此其所以爲狠也。兒纔三歲。其始至也。豐頰喜笑。

可愛也。未幾。其憔悴不忍見也。是何故哉。饑不必得食。渴不必得飲。誰攜之使行。誰定之使寐。口未能辨。心未能慮。自投而泣。恐其將見怒於狠也。不敢出聲。怫欝泣血。如幽囚然。又有群兒侮之。唾其面。紾其臂。擢其髮。爪其膚。使其號泣以爲嬉戲。而狠不禁焉。豈徒不禁焉。又從而笑之。見其父來。則僞愛兒。抱之撫之。使笑且言。欲以欺其父。不亦狡乎。夫飢者易爲食。渴者易爲飲。今此兒也。唯狠之虐是畏。敢望其慈。故纔見抱。載笑載言。悲夫。父見兒之憊也。潸然涕下。豈不察其所由哉。不敢言耳。且欲以慰兒。故笑而見之。兒亦見父顏。如解倒懸。見齒而笑。乃言曰君來君來。其喜愈甚。而愈可悲也。於是父寘兒于懷。與之飲食。從其所欲。使極歡焉。然後去。其將去也。慮兒之弗許。故不敢告以實。予之菓子若木偶。以怡悅之。然後給曰如廁。或曰如鄰。兒則許之。

出其門。則木偶及菓子。盡爲群兒所奪。而不能與爭也。呼父而啼。々極而寐。寤則復啼。吾與汝父不忍聞其聲也。遝坐而食。猶未能飽。況其父乎。彼度兒之將如此也。豈不腸回魂飛哉。然不得淹留以順適之。蓋其所事急於此也。於是父子不相見。或二三日。或五六日。數月之間。大低如是。而皆病矣。自此以往。吾不得而知焉。夫汝之於嫗也。亦此類耳。然而未至於此極者。以汝外祖母在其隣也。此雖不得養汝。然未嘗斯須忘汝也。苟得甘脆。輙以賜汝。々之啼也。趨而視之。且數餽嫗魚及菜菓。以致敬焉。嫗甚憚之。是以不敢輕汝而肆其虐。汝父賴之。去年丙寅秋九月。汝外祖母亦沒矣。則汝父無以爲助焉。江都之事。將於汝子是之。是以不忍復與汝別。將賫什器以鞠。猶恐終無以完汝也。冬十一月。來謀諸我。々恐嫗之將虐汝也。未及問其詳。乃讓汝父。以不與汝偕來曰。此投肉於虎。而冀其不食也。豈可得乎。於

是使汝父速還迎汝。然後計日以俟。是時也。天將雨雪。寒威可畏。吾又謂汝不能來。其必死矣。借使不死。能無病乎。則雖欲來。不可得矣。天之未汝亡也。雪不果下。寒威忽減。道路無虞。故汝父得遄臻于西家。及汝之未死。而救之矣。然而汝困憊已甚。泄利數日。張如鼓。頭生瘍。衣帶枕席。二洩成氷。蟣蝨繩々。雖見父來。而不能起。又不敢言。唯目逆之。汝父既更衣。又以身嫗汝。抱以還家。鞠之如初。且使飲藥。經二三日。而後汝纔言且笑。然泄利未已。食飲尙少。不可以風。故汝父欲暫家居以待汝全愈。且以自休。然後發焉。既而又謂嚢中之錢纔足以治裝。若曠日以費之。不可往矣。天雖寒乎。路雖遠乎。安得已焉。且汝之在西家也。奚翅天寒。然汝已得不死。況在我懷抱乎。我之適市也。奚翅路遠。然吾未嘗以自休。況與汝俱往乎。遂發。置汝於襁褓。日行十里。不能十里。如其費行。東有啓明。西有長庚。大明南至。厲

風北來。是月甲寅。二十三日宿于戸塚。汝猶泄利。乙卯宿于江都。汝始善食。丙辰宿于杉戸。泄利乃愈。丁巳至于知松菴。是歲汝父年五十。當此祈寒浹辰之間（自子至亥十二日）。跋涉往來百二十里。而其窮苦又如是。雖云矍鑠。吾未嘗不爲之惴惴也。

咨汝芳子。汝之初至於斯也。雖與汝父倶。然以憚我。故未嘗見齒。終日塊然坐於一處。而無爲矣。見者或謂此將死。不能長矣。吾與汝父亦以爲憂。然汝父又將從事焉。不可以不早還相模。雖欲暫留以待汝親。我豈可得乎。其將行也。與汝菓子而別。且誡汝曰。唯伯父之命是從。亦可悲也。而汝未有悲色。不知其遠行也。及至日暮。而後思之。乃泣曰君不在。君不在。吾雖爲之悲。抱汝負汝。强笑多言。以慰諭汝。然未能止其泣也。汝非唯於汝父爲然。凡愛汝者。汝亦愛之。其來也喜。其去也悲。由此觀之。自汝外祖母之終也。汝父恐嫗之將[illegible]汝。汝不[illegible]雖[illegible]西家。及其來[illegible]我[illegible]。則[illegible]

若之何。而汝之所以泣者。豈如此哉。於斯之時。西家之人。皆將助嫗爲虐。豈有慰汝如我者哉。若使汝京氣甚滋乎。死矣。或如成人。戀々戚々。以蒸心焉。亦死矣。或使汝父迎汝少安。亦死矣。吾每念此未嘗不寒心也。汝父亦能寬裕。含詬包荒。以小不忍爲傷勇焉。故雖至於此極。亦未必如吾所慮也。不然。安能堪其憂。而活汝於將死乎。是時也。有謂汝父不慈而惡諸我者。不亦異乎。夫慈之義大矣。固非汝父之所盡也。然父子之愛天性也。其誰無之。今世之人。所以失之者三焉。貧也。窮也。貪也。貪者易之。窮者忘之。貧者忍之。於是乎。有飲藥以自敗其胎者。有憂多費而不擧子者。有男則擧之女則否者。有鬻嬰兒而衣食之者。有棄嬰兒於道路以自逸者。斯數者。豈人之所爲哉。非唯人不爲。雖鳥獸乎。亦不爲也。夫貪者。吾不論也。貧而不忍。窮而無忘。是謂守節。守節爲士。雖士也。可[illegible]

也。今於汝父纔見之矣。豈不足以爲偉哉。而謂之不慈。則吾不信也。豈使汝父每事如此。其誰間之。會是不意所以受其名也。詩曰。采葑采菲。無以下体。汝父有焉。吾懼衆口之罔極也。故明辨之。而詳言之。不唯爲汝解嘲焉。亦將使汝深考其德。而篤信之。庶乎。雖有讒人。亦無如汝何矣。

（未完）

茶事の說

藤井行麿

皇國にて、茶のことのものに見えたる濫觴は、類聚國史に弘仁六年夏四月癸亥嵯峨天皇近江國滋野韓崎に御幸ましける時、崇福寺大僧都永忠護命法師等、手自茶を煎て供御に奉たることとあるが初にて、同年六月壬寅畿內並に近江、丹波、播磨の八ヶ國に此種を播しめ給ひ、それより每年献茶することゝなりしかども、碾石に葉を挽き、抹にして飲むは、栂の尾明恵といふ僧、木種を撰び栽て培養にこゝろを竭し、芽立を摘取、蒸し焙りなどして製法を發明し、唐の陸羽が風雅に倣ひ喫せしが、建久、正治の頃より追々所々にも殖しかども、山城國久世郡宇治の地に相應し、つひに此郷園の名產物と成て、世に賞味せらるゝは、心臟を助け養ひ功ありて、衛生には良藥なり。然れども、口に苦ければ嫌ふ人れはし、飲食しでのち、胃の膨脹して神氣緩み、睡眠を催す時などのめは、忽ねぶり醒てこゝろひきたち、痞鬱をちらし、やがて食物をも消化さす能力ありて、所謂健胃劑なり。僧侶座禪の閑室にもちゐ觀念の眠を覺し。鎌倉の將軍實朝、酒氣の解散に好で喫飲せしより、東山公方義政につたはり。延德のころ、珠光といふ僧、點茶饗應の禮式をはじめ。永祿にいたりて武野紹鷗繼で此の道の會式をなし、千宗易に傳授せしを、宗易中興の祖となりて嚴かに規則を定め、賓主和して敬禮をあつくし、道德信義を以てまじ

はり、寂と侘との風雅により、貴賤上下の隔をなさず、一小菴のうちに膝を寄、袖をまじへて親睦をなし、世事の善惡猥雜談を禁じ、貧富身の分限によりて器具を備へ、麁物麁菜も、其とり合せのおもしろきを賞感して、清潔を主とし、ねんごろに心を用ゐたる料理をよろこび、賓客愉快なれど、あるじもまた其意を喜悅し、禮節正しき中にとけてかたらふ交際の會なれど、世に行はれて、人みな此道を嗜むことゝなりしものなり。かくて此わざをするを、世に茶湯〳〵と、ふるくよりいひ來りしことなるが、神佛に供するを茶湯といふは聞えたれども、點茶の手前を習ひ、其わざをなすを、茶の湯をならふ、茶の湯の稽古をするなどいひては、いかなるゆゑとも、其こゝろとけがたし。これにより熟考ふれど、此道、延德、永祿のころ、京都の俗詞に、けふは、某殿の茶會、翌日はそれがしどの、御茶會といへりしが、五十聯音の相通より、ゑの假字[illegible]うつり、其[illegible]ども、此頃は兵事の烈しき時にて、かゝることゞも誰咎むる人もなく、文字をさへに會とかゝず、湯とかくを、此道の宗匠家すら、世俗にならひ、しか唱へしかど、いつしか訛誤となりていひ來りしことゝもはるゝなり。湯をならふといふことは、いかにもことわりたちがたきことになん。

尼將軍（二）

安藤正次

古語にいはく「哲夫は國をたもち、哲婦は城を傾く、婦に長舌あるは亂の階なり」と。吾人は敢てこの言を以て婦女子を辱めむとするにはあらねど、牝雞の晨する所多く不祥のことあるは史の昭に證する所。然れども、斯のごとき婦人は、必竟その才慧の常人よりも敏にして、その氣質の勝れて強きところあるに倚ら[illegible]

の才慧氣質をして範疇をこゑざらしめきはめて、陷りやすき偏狹剛戾の弊をまぬかるゝことをゑせしめむ、却りてある點に於て、その內助の業は他の優婉なる女子にまさりて、着々その効を奏することをゑむ。されど、驚悍なる女子を制しうることは到底難事に屬す。政子は實にかゝる類の女子なりき。彼は一方に於ては、その強き女子的感情にいでたる偏狹嫉忌の心を有せるとともに、他方に於ては、亦男子も及むざる程の銳敏剛强の心を有したりき。幕府創始の英傑賴朝は、流石よく之を統御しゑたりしかども、猶時としてはこれに困しみたることも少しとせず。

今、その始、政子が賴朝と親しみそめたる時の事情をみるに、實に左の如きものなりき。

始賴朝が、池尼の憐をゑて、助命せられ、伊豆に配流せらるゝや、清盛即國人伊東祐親をして之を監護せしむ。然るに、居ること久しくして、賴朝其の少女に通じて子を擧ぐ、祐親會々京師に在番して之を知らず、期滿ちて鄉に歸り、遊ぶ所の雅兒をみて之をあやしみ、訊ねて實をゑたり。卽大に怒り、その平氏に聞ゑんことを憚り、こゝに賴朝を殺さむことを斗る。然るに、祐親の子祐淸、密に之を賴朝に告ぐ。賴朝よりてまぬかるゝを得、去りて北條時政によりぬ。

れもふに、この時にあたり、賴朝一族敗滅の餘を以ちて、威勢隆々たる平氏の一流民たり。たとひ其の東國に於ける賴義以來父祖數代の播種せる恩威は、この時に及ても源氏の正嫡たる彼が聲望は、優に諸大族の望を繫ぐに足るものありしとはいへ、是たゞ父祖の餘光によるのみにして、一も賴朝自身に於ては、親近なるものあるにはあらざりしなり。されど、賴朝はこの點に於ては、大に欠乏を感せしなるべし。而してその親近をうるには、姻族の關係をつくるを以て最捷徑とすとは、彼のこの際とりたる方針なるべく、こゝに於て伊東氏と結むむと欲して、この策の實行を試みたるが如し。然れども、祐親頑强の爲に、意外に失敗をとり、

漸く虎口を脱して北條氏によるに至りぬ。北條氏も州の豪族なり。頼朝はまた姻族の關係をえて、深く之と結むことを謀りたるもの丶如し。然れども、前に伊東氏に失敗したりしを以て、深くおもふ所あり。時に時政に二女あり。長は美にして、次は醜なり。頼朝よりておもへらく、長は美なるを以て容易に人に嫁せしむるをうべけれど、次は然らざるべし。如かず之を娶りて以て父母の驩心をえむには、美醜はわがとふ所にあらずと。即安達盛長に托して書を次女に通せしむ。然るに、盛長いかにかしけむ。引たがへて之を長女に達しぬ。長女は即政子なりき』

曾我物語の記者はこの間のことを記していはく、次女前夜一夢を見て頗る之をあやしみ、晨に之を姉政子に語りてその吉凶を諮る、政子その夢兆をおもふに頗吉夢なり。よりて、之を己にえむと欲し、即之を凶夢なりとあざむき、鏡一面と換へて己にゆづらしむ。かくて頼朝の玉章は次女にあたらずして政子に達したりと、稗史信すべからざれども、政子後年の性情よりみるに、頗之に類するものありて、兄弟親戚に對しても、きはめて友情に乏しかりき。おもふに、この間また如何の事情あらざりしを保せむや。

時雨集

白松園主人

左の一篇は、普通坊間に傳はれる、義光が足柄山にて豊原時秋に笙を授けしことを詠せしなりされ共、其事實の誤謬なる由は、近き頃に證明せられたり。今その事の如何にか丶はらず擧げつ。

○足柄の月　（亡兄作）

新羅三郎義光が　こたびの下向は陸奥
深き由ある事にして　灘波堀江のあしかりが
かりそめならぬ旅なれど　終に伴ひがたからん
かへすは本意とあらね共　[illegible]

人の心もしらま弓
衣袴もしほたれて
の踏のよつの跡
はしきかな師の恵
にましけり畏しな
へらぬものを力なし
ね〳〵て駿河なる
ぐ高嶺は目もはるに
り〳〵て白雲の
屋のひさし色めきて
行き憚り鶴群も
のかためと開くものを
えゆく事のかなふべき
を近めて此處をしも
りいにませ暮ぬまに
かに〳〵と踏み鳴す
かに思へむうらびれて

ひかじ〳〵と辭みつゝ
汗にひぢつゝ打せゆく
踏み埋めては慕ひこし
忘れがたみの愛子はや
かへり給へといへどなほ
旅寢の夢もいつしかと
足柄山につきにけり
九折なる岨路を
棚引く隙ゆもれ出づる
見る目眩く雁金も
い行きたゆたふ東路や
か弱き君がいかにして
勿來の關にあらね共
それと名づけて今はとく
宿につきませやよや君
鐙の金のかたくなに
答ふる詞なかるらん

さゞ波や近江なる
心もしらで歸れてふ
何處までもと夜に宿り
こし甲斐もなく別れなむ
野原の露と消えなまし
穗に出さんと思へども
心づくしをしり顏に
照せぞあはれ隈もなく
悟れぞ即て丈夫が
切り發つ矢のいちはやく
楯を蔀に直らせて
師の賜を更めて
賜ならでちゝの實の
その愛子にぞ還すなる
入調曲と名にのみは
世に懐しき亡人の
筆はありやと問ふ人も

鏡の宿につきてより
人の詞をいなみつゝ
日に歩みては慕ひこし
家の寶は陸奥や
くち惜しきかも花すゝき
流石にそれといひわぶる
山の端近く出る月
うつる心の面影を
赤き心は梓弓
千草の露をかき拂ひ
空穗の底より取出る
君に傳ふる義光が
父の命の記念をぞ
あなに畏き大食調
聞きてまだ見ぬ此ぞこの
現にかきし筆の跡
問はるゝ人もかねてより

覺悟は疾くにしたりきと
うつし出たる眞心を
足柄山の月かげは
草葉における白露は
尾上の松に棲む鳥の
駒のいなゝき兵士の
あたりしめりて見にけり
あな嬉しやも時秋が
此れまで慕ひこしかひの
むくいまつらん山のはて
伴ひてよと乞ひ願ふ
其志の切なるは
畏き御門の樂工と
矢叫びの聲かしましき
入りてその身を亡ぼさば
早く都にたちかへり
家を起すぞ忠孝の

いとゞ哀れをます鐃
盡して吹鳴す笛の音
榮えあり顔にさえ渡り
玉の光りを添てけり
いかなる夢をか結ぶらん
鎧の袖の音絶えて
あたりしめりて見にけり
此世の望足りぬれば
かひある人の恵をば
海の果てをも厭じな
誠はおもてに現はれぬ
さる事ながら百磯城や
仕へますべき御身にて
軍の場に我からと
家の寶もたえなまし
父の職掌うけつぎて
兩の道にかなふべき

我はこれより關越えて
金澤にますこのかみの
いざさらばよと引よする
そがひに見せて打せゆく
ふりさけ見れば衣手の
うるみ顔なる面影は
ゆくて遙けき陸奥や
御許に仕へまつりなん
駒の頭をたてなほし
主の影こそ失にけれ
露に宿れる月さへも
そふる涙の雫なり

箱根の關（下）

此君樓主

今は躊躇ふべき時ならねば、兵左衞門は我が伴ひ來りし幼兒の女子なるよしを語りけるに、彼の浪人は聞きもあへず、偖はさにてありつるか、さらば幸に拙者が伴ひしは男子なれば、暫し此の兒を御身に預けん、關所役方の吟味あらん時は、證據として差出されよ、さてこの事の落着するまで、暫しの間娘御を御預り申上けん、若し又斯くても、猶先程の馬士の申支へん時と

は、何の用捨する事かは、即座に斬捨てらるゝこそ宜しけれと、種々に意見をも加へて、やがて其の過りなる旅籠屋にてぞ入りてける。兵左衛門は思ひもかけず情ある浪人の爲に、身にかゝりし難儀を逃るゝ道を得てしかば、稍心もおちゐ、此の上道を急がば、返つて怪あられて惡かりなんと、態と程近き旅籠屋に立寄りて、暫し勞れを休めけり。

かゝりし處に關所の役人、多數の捕手を從へて兵左衛門が休らひ居る旅籠屋に踏込み、先程女を御連れながら男と僞りて關所を通りぬけ、天下の掟を破りし不屆者召捕らんが爲に馳向ふたりと罵りひしめくに、兵左衛門は最と靜かに出迎ひ、如何にも先程は御關所を通りしかども全く左樣の不法を働きしこと毛頭覺えこれなしと、聊か狼狽し氣色もなく申述ぶれば、役人は何はあれ先づ其の召連れたる子供をこそ吟味せんと云ふに、兵左衛門は兼て期したる事なれば、二人の子供を連れ來り、役人の爲すが儘に身の中殘らず調べしめしも、紛れがたなき男子なれば、たゞこは如何にと云ふばかりなり。先程より眼を光して眺め居たる案内の馬士は、斯くと見て、こは先程睨み置きたる子供とは人柄相違せり、愈々怪き次第なれば、猶一層嚴かに御詮議を遂げ給へかしと云ふに、兵左衛門は、彼の浪人が先程の意見は此の時なりと悟りたれば、役人が言葉をも待たず馬士に向ひて、何奴なれば重ね〳〵我等に難題を申懸くるぞ、最早堪忍なり難しと云ひさま拔打に馬士が頭より斬下げければ、あはれ二言と云はで其の場に倒れ息絶えたり。斯くと見たる役人は、成程こは尤もなる成敗にて委細はこれにて見屆け申したり。定めて急ぎの旅行にやあらん、此處には構はず疾く〳〵出立あれ、馬士が死骸取片付けの儀は、此方に於て宜きに計らふべしと云ひ捨てゝ、役人は人數引きつれ歸りける。

兵左衛門は虎口を遁れし心地にて、始めて安堵の思ひを爲したる處に、先の浪人尋ね來りて、事の首尾宜く

行はれたるを賀したる後、互に子供を引換へんと云ふにぞ、兵左衛門は數度ぬかづきて始終の懇情を謝し、子供を受つ戻しつ、偖て御身はそも如何なる御方にて御姓名は何と申さるゝや承りたく、以後も親敷御意を得たしと慇懃に云へど、浪人、名乘らんことは易けれど、先程よりの次第にて、互に疲勞も覺えたれど、今夜は當驛に宿りをもとめ、明朝は共に立出でゝ道すがら名乘もし種々の御物語も仕らんと云ふにぞ、さらばとて兵左衛門は兎ある旅籠屋に宿り、明くる朝二人の子供引連れ、浪人と共々出立せんとて、恩人如何にと宿の主に尋ぬるに、こは如何に、其の人は俄かに急ぎの用出來たれどとて、まだ夜深き中に出立たれしとの答へに、兵左衛門、偖は彼の人我れ等が昨日の謝禮せんことを厭ひたまひて、態と先に出で行かれしならん、同じ京へ行くとなれど、何時かは又會ふこともあらん、それよりは日々行先々の宿々驛々に心を配りて尋ねけれども、途に見も當らず、會ひもせず、其の人と思ふ影だも探り得ざりき。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

兵左衛門が探り得ざりしも理や。抑々普通の關所破りとは、番所役人の目を忍びて、間道などより通り行くを云ふものなるが、こは直接に役人の目を欺きて、通行禁止と定めある女を通せしにて、なかなかに其罪重く、且、役人共の落度ともなり、番頭たる者は罪死に當り、其の罪を犯したる者は磔殺の刑に處せらるゝなり。さては一人の馬士の訴への爲に多くの人の命にも係はる事なれど、番所中に氣の利きたる人ありて、役人中の一人忽ち浪人姿となり、一人の男子を從へ、捕手の先に廻りて、前に記るしつる如く計りけるなり。この事今の世より見れど、稍滑稽に近き業の樣なれど、當時に在りては、番所の役人多勢の落度ともならず、關所を預かる大久保家の不調法ともならず、實に當意即妙、萬全の計策にてありしなるべし。但、かの馬士の身は刃の露と消えたれど、こは人の弱味につけ入りて

私慾を逞うせんとしたりし天の罰とも見るべきなり。名に負ひし箱根八里の險岨も、今の鐵車の奔るに任せし、人の往來も最と易く、在りし昔の關所の跡は、只場の夢物語となりにけり。

（完）

兩縣令競義婚孤女（五）

湘玉女史譯

下婆娘は早く己が奸計を成就せんと思ひて、當直的を呼び、われ張牙婆に話說すべき件あれど疾く喚來れと吩咐たり。當直的は不一時張婆を伴ひ來りけれど、賈婆はやがて己が房に案内させ、それとなく月香と養娘とを引合はせてのち、他等には暫く閑去せよとて發けり、張婆に對て說き道ふ、我家六年前、這の兩個の了頭を討めたるが、今は大的は忒だ大了たり、小的は嬌々的にて生活的の間に合はず、よりて二人とも他へ賣り與へんと思ふ、汝わがために快く一個の主兒を尋ねよと。原來當先に、此二人を官より賣たるときは、李牙婆の手を經たれども、此時李牙婆既に死し、今は官私ともに、この張婆を推してかれの代りとせしなり。張婆道ふ、那の年紀小的は、幸ひ今一個の好き主兒あれども、怕くは大娘肯ひ給ふまじ、賈婆道ふ、甚の肯はざることあらん。張婆道ふ、其主兒は他にあらず、本縣の大尹老爺なり。大尹覆、姓を鐘離、名を義と云ひ、壽春の人民なり。大尹に一位の小姐ありて。德安縣高大尹的長公子と許配せられ、既に在任中に聘も行みたれは、不日公子の親迎ある筈にて、嫁裝は早や都て十分準備出來たれども、只一個の陪嫁的養娘なきとて、昨日も大尹老爺、老媳婦を召されて、急ぎ搜せよと當面り吩附たまひたれど、老媳婦もさしあまり目當なく、尋思にあぐみて居れり、宅上の小娘子は丁度其撰に中れど、かの大尹は他鄉の人なり、怕くは大娘放ち得玉はぬならん。賈婆心に想ふやう、我初より遠方の主顧を望み居たる處なれど、思ふ壺なり、知縣相公

の要に應じ遣りたりと云はゞ、丈夫回り來るも彼是言ふことは出來まじと、早くも心に思ひ決め、便ち道ふ、官家の陪嫁ならば、我家に在るに勝似こと十倍なり、我什麽て放ち得ぬことあらん、只我は原價を虧ぬことなれば、それにて好し。張婆道ふ、原價は許多なりや。買婆道ふ、十歳の時に五十兩にて討めたる者なれど、如今は飯錢も算用して他か一身に負はせねばならぬ。張婆道ふ、飯錢は算帳に入れず、只五十兩の銀子にて老媳婦引受申さん。買婆道ふ、那の老了頭の方も、我がために一個の人家を覓め呉れよ、他等兩個は初め一夥兒にて來りしものなれば、一個を去了て、一個を家に養ふわけにはゆかず、況て、かれは年紀二十の上を越したれば、最早老公を持つべき頃なり、他而已留めて甚麽かせん。張婆道ふ、那のものは多少の身價なりしや。買婆道ふ、かれは原是三十兩の銀子にて討めたるなり。牙婆道ふ、あの粗貨兒にては、這の許多の金は出しがたし、一半て減じて貰ひたし、老媳婦と一

個の外甥ありて、今は三十歳なり、老媳婦彼に一房妻を娶り遣らんと許しあれど、手頭寛展ならざるゆゑ今日まで推下たり。幸ひかのものを妻せば、似合しき對の雌雄なり。買婆道ふ、儞の外甥のためとあれば、儞に免じて五兩丈を讓ん。張婆道ふ、這の小娘子の媒禮をも在內て十兩だけ讓けたまはれ。買婆道ふ、大事なし、儞早く取引をまとめよ。張婆道ふ、老媳婦は如今先づ去きて、知縣相公に回復して、若し御氣に叶ひなば、一手にて銀子を交し一手にて貨を受取らん。買婆道ふ、儞は今晚還り來るやいなや。張婆道ふ、今晚還りて外甥とも一應商量すべけれど、引返して來るわけにはゆきませぬ、明日早く來りて回答すべし。多分兩個とも、都てわが思ふ通り纏るならんとて別去りたり。

却說大尹鍾離義は、任に到りてより一年三個月を經り。前任馬公と云へるは、那の石大尹の補缺として來りたるなり。この鍾離大尹は、德安縣高大尹と同鄉なり、

を高升と云ひ十六歳なり。這の高登は便ち鐘離公の女婿となる人なり。原來鐘離公は一子なく、止一女あり。名を瑞桃と呼び『今は十七歳なり。本年十月望日を撰び定めて嫁入の式を舉げん約束なり。此時既に九月旬にて、吉期も近き居れは、鐘離公は張婆に吩咐て、切ぎ一個の陪嫁を尋よとなりし。張婆は買家にて這頭の門路を得、就ち去りて大尹に回復したるに、大尹ふ。もし、是人物さへよけれど、五十兩は多からず、日庫上に來りて價を領り、晩には過門るべし。張婆相公の鈞旨を受け、當晩家に回り、又外甥趙二と商して道ふ、這に相應の親事あり、儞がために此婚姻完んと思ふと。趙二は一夜寢ずに歡喜たり。次早趙は急き去りて衣衫をと丶のへ、新郎となる準備を做、張婆は家中の錢を湊足して二十兩の身價を作り、隨に縣に到り、相公の鈞　帖を取り、庫上にゆきて十兩の銀子と兌了、買家に到りて這の兩頂の銀子をりて買婆に交付し、一々に分號たり。買婆都て銀子を收了たり。少頃して縣中より兩名の皂隷と兩名の轎夫とを差はし、一頂の小轎を擡けて買婆の門首に到りて停りたり。買婆は始より此事を月香に通せさりしゆゑ、月香いかて曉り得ん、臨　期　初て他に打發け、轎に上せんとせり。月香は那裏につれ行かる丶やを知らざれど、養娘とともに、天に叫び地に叫び、聲を放て大に哭きたるに、買婆は三七二十一に、張婆の手を借り兩個して儞推し我挽き、漸く他を挽き大門に出了りたり、當下張婆は方纔て說明して道ふ。小娘子よ、さう啼哭きなせぞ、你の家主母は、你を本縣知縣相公の小姐的陪嫁に做さんとて賣與へたり。こ丶を去るはなはだ富貴ならざらんや。官府衙門は是　要　處ならず、今に至りて哭くも亦益なしと諭され、月香は只得涙を收めて轎に上り去たり。轎夫は擡て後堂に進む。月香は鐘離義に見ゑ、只萬福を唱へしのみなれは、張婆は傍より、這は就ち老爺なり、改めて大禮を行ひたまへと心付られ、月香只得頭を地に磕け、漸く身を起し來り

たるも、覺えず涙の球は面に滿ちたり。張婆は他に涙の眼を拭乾せ、又私衙に連行きて、夫人と瑞桃とに見えさせたるに、小姐は小名を問はれけれど、月香は己が名を以て對たり。夫人道ふ、月香の二字甚た好し。別に改むるに及ばずとて、其まゝ他を小姐に伏待しめ、鐘離公は厚く張婆を賞したり。不在話下。

可憐官室嬌香ノ女　權ニ作ニ閨中使令人

（未完）

才くらべ

蓬生屋女史

廣島稻荷町辰巳屋傳兵衛が妻みつ女と云へるは天性至孝殊に才ありて、姑が心をよろこばすこと少なからず其の家もと豐なりけるが、傳兵衛はからざる損耗して家產を失ひ、近き村里に物をうりありきてはかなき暮しをなし、殊に多く内に居らざりけるが、みつ女姑に仕へて甚だ愼しめり、姑年既に八十に越えたれど眼もうとく手も叶はず、而も老耄しながらも、なほ婦女のたしなみは忘れでや、うみつむぎするとて、稚の遊び事する如くなり、何の料にもならざれど、其のはなほ息子夫妻を助けんとする慈愛心、みつ女はよろこびて、日每に綿苧なんど云ふまゝに與へ、げに母さまはれ年よられしほどありて、うみかたのいと巧みなり、尤も遣ひよしなど云ひて、節だらけのうみやう決してあだにせず、いとをしみ仕へど、姑はほく
とよろこび。またある時は己れの年の老いて、其ぐしからぬを、かこては、みつ女は姑の知らぬまにそつと己れがうみたるを足して、今日は殊更美しく多くものし給へり、早く休み給へ、肩さすり申さんなどいて、たゞ姑が心をよろこばせ、其の歡ぶを己がよろこびとすれど、姑も喜びて、あだかも幼子の慈母に於けるが如くなり。之れ等何のつまらぬ事、才も智も入らぬ事と思ぼし給はん人もあらんが、中々てなまずある

…人の成し難き業にして、家を治め姑に仕へんとする若き女たちはかゝる才必ずなかるべからずとてかくなむものしぬ。



書あつめ（五）

草の屋主人

飛鳥井家は世々蹴鞠の業をもて名誉ありけるが、中にも大納言雅世卿は此の道に長けられ、曲鞠とて、輿に乗じて鞠笆の底を脱せ是を御腰に結び付け、高足の鞠を此の笆の中を通して高く蹴上げ給ふこと、よみて幾度にもおよびぬれど此の曲を見る人感せぬはなかりけり、或る年の暮に例の曲　行ありけるに、見物人つね
より増りて群集し、中にも殿上にれはする堂上方
鞠笆の曲を御所望ありけれど、雅世卿例の如く鞠笆
の、蹴卸、けあげしたまふこと幾度つゞきても一度も落つる事なく、さながら笆に引力にてもあるかの如くなるに、貴賤とも手を打ちたゝきてなりどよむ聲天に轟く計りなり。然るに、さやうにたゞ感じと感ずる、群集の中に油賣商人一人ありけるが、何ぞこれ計り
の曲何が夫れほど珍らしきや、幾人の感歎心得が
とつぶやくに、之を聞くもの、一人、小癪なる油
哉、其方の分限にて口に任せてあざけり奉る事の
聞しさよ、此の御曲は、これぞこれ飛鳥井殿家計り
く得させ給ふ御事にて、假令蹴鞠に得たる人も此の

ぞかりは學ぶ事叶はねど、都も鄙もおしなべて擧め奉るを、之を誹謗する汝には如何なる曲かなし得る、たしなよと罵れど、油賣はなほわれぞかりの曲、われぞかりの曲、われぞかりの曲が何に珍らしからんと云ひやまざるに、果ては狂氣人とて人も云はせ置くほどに、曲もすみ御館の外に出でける後、件の油賣は、彼の罵りたるもの共に向ひ、我れ先きほど御家の曲を誹り候とて我をぞいたく罵しられけるが、われ、御鞠の曲を誹るにあらず、思ふ子細ありて、誹りしなり。是れをぞ見られよとて、常に油を荷ふ桶より一舛の桝を取り出し其の舛に油をなみ〳〵と盛り、右の手に錢一文を持ちつゝ油を入る器に、此の錢をあてゝ舛の油を錢の穴より通しけるに、其の油錢の穴の眞中を通りて一滴もけがさず一舛の油器の中へ皆うつしつぎて、錢の穴の淵にもつけ汚がれぬに、見るもの罵りしもの皆驚歎しけり。さて油賣は衆人に向ひ、われ此の曲を習ひて得るにあらず、たゞ毎日油をはかりて器に入るゝ、その微細の穴を覺えず、通し習ひて得るなり、わがこの業は家職の鍛練よりおこり、飛鳥井様の御鞠は家業として御幼雅より學びて、是に至り給ふ。これ程の御曲何ぞ不思儀と云ふべき。是ら油は自得たまふべき事ぞ。空中にありて落ちずと云はゞ、妙とも不思議とも感ずべきが、如何と云へど、罵りたる者ども閉口してまた云ふ言の葉もなかりしとなり。果敢なき事にも鍛練をつめど、かやうに人々を驚すものぞかし。

家庭の花（上篇）

小倉山人

（發端）

世の中に金を厭がる人も無けれど、是れは又隨分藻脫けた慾張から高利貸といふを家業に爲られる隣の慾兵衛どのでさへ、今日は子供衆を連れて瀧の川へ紅葉見

行かれましたといふを聞き、おもはずも筆を擱いて、
くは厭せぬ机の上に頬杖つくづく天の摸樣を眺むれ
、まことや天高く氣澄み渡りて、前の林にわけも無
ピー〳〵と鳴く百舌の聲まで、何とは無しに人の心
チト郊外にお出遊なされと誘ふに似たり。これでは
程慾しや一偏のお隣さまも算盤投げて、紅葉見なん
、優しい氣にも成られし成るべし。われもと硯に蓋
るほどの事も忘れて、鼻緒ゆるびし履物突ッかけ、
駄木山なる我家を後に動坂といふ坂一ッ下れば、畦
傳ひ向ふはやがて道灌山の頂に達したり。一息吐
て四方の景色を見放れば、小筑波も秩父も富士もわ
〳〵見ゐて、端知らぬ萬頃の田面は稻の苅入れ最中
處の森彼處の水に夕陽華やかに射せるもをかしく、
も無き小鴉の矢の如く飛交ひつゝ囀るも趣致ありて
白の花こそ無けれ秋の野は又却々に品韻氣高く、吟
一番する時は、烏渡目前に美なりといへども、まだ
女臭き春の景色の到底及ぶ所にあらず。例へば數多

の風雨を經し秋の景色は、これまで、經來し苦勞の額に
波打てる老女が素顔とも見るべきか。そはいづれにお
われ世の中の開け行くこそ芽出たけれ。回顧すればこ
の邊て、兩三年前までこそ茶店の數も一ッ二ッ、それ
も竹の柱に蓆の壁が頂上にて、外眥の赤く爛れし老婆
が柿賣る位に止りしが、大根畑は時の間に宏大莊麗な
る別莊に變じ、同時に田端の停車場、鐵道も鼻で物い
ふ奥州通ひの外に彼れは水戸行、これは房總行など、
線路縱横に開けたれば、閑地俄かに繁昌の勢ひ此處を
然らしめしか、店小屋ざらりと軒を列ねて、以前秋風
に水涕垂して柿賣りし老婆は何處へか姿を隱し、日に
月にと榮ゆ行く今日にては、是れに代るに白粉したる
十七島田が麥酒の瓶など扱ひつゝ往來の人に聲かけて
おかけなさい、お休みなさいといふを見る。扮裝でか
りは鶴の千羽も墜ちさうなれど、腰には雀二三羽の鈷
獵紳士に幾度か道を讓り、ぶらり〳〵と秋を訪ひつゝ
行くほどに、心無くて日暮の諏訪神社に詣でたり。増

内の秋色えもいひ知らぬに、此處より遠く利根の上流千住、や丶近きは淺草などを眺むる景色またなか〱に趣致あり、去つて花見寺に詣づ。こ丶の景色亦一際妙なれど、小學校の生徒等が運動會に妨げられて飽くまでは賞しえず、愛を割きて裏門より出づ、折しも蜂に鼻の頭を刺れしには、甚だ閉口仕りぬ。ヲ丶痛い〱と鼻に唾を附けつ丶行くに、この邊に住めるは文人墨客物持の御隱居樣、もしくは常に冷たい風に吹れ〱し人々が、世をうぐひすの初音町に出づ。こ丶に一人のわが友住めり。名は深草雨村とて、三十路前後の畫工なり。いつしかその門前に來ぬるものから、山茶花三ッ四ッ優しく咲ける垣間より窺ふに、主人机に頬杖ついて眉を寄せ、何やら切りに腦を痛むるもの丶如し。さては先生畫の圖案中と見える、斯樣な時に邪魔を爲れては相互に迷惑至極、今日は寄るまいと思案して、二歩三歩行き過ぎしが、空通したと後にて聞か

格子戸引きあけ雨村樣、鳥渡お門を通りまするが、今日は失禮致しまする。いづれ又その内ゆる〱伺ひまするど表に出づれど、小倉山人それは酷いぞ。門より内に入りもせず、顏丈見せる位なら空行されしがまだ〱勝なり、幸ひ今日は手も空きたり、聊ては番茶の一口も呑んで歸りなされといふ。拙者も實はその氣でありしが、御圖案中とお見うけ申して、無い氣を利した所でござる。イヤ〱そんな所では無し。先づ〱お上りなされといふに、。鼻緒のゆるびし履物脱いで上にあがり、さて机に靠れて、六ケしい顏爲られたは、大方畫の御圖案中だとお見うけ申したは、爾で無いとは雨村樣、お世辭ではござらぬか。イヤ〱決して虚言で無し。そんなら何んでの御思案なりしぞ、先刻のお顏の摧への澁さ加減は。ム丶彼れでござるか、彼れは女といふ物に就いて、一考して居たところで、別段圖案などではござらぬ。イヤそれは方角違ひの了簡、抑

儘る奴か、目鼻滿足に揃ひし男の爲る事にて、失禮ながら君や僕にはその邊の資格を親が與へて居らず。さりとは惡い了簡かな。止すべし止すべしと一息にいへど、オヤ小倉君、爾酷たらしう言はれまい。拙者が女といふ物に就いての考究は、弓矢八幡近きは日暮里諏訪明神も照覽われ、決して卑しき目的にあらず。實を申せば今日まで、拙者は女その物に少しも重きを置かなんだ、女といふ物は無性に泣いたり笑ッたりするもので男の相談相手などには少しも成らぬ。たゞ最う飯を炊く衣服の世話爲る留守を爲る、その外には愛らしい子を產む位が勢一杯で、その他は夫の邪魔にこそなれ、何んの功能も無い物だとのみ思ひしに、是れは面目次第も無い誤解で、女と云ッて侮られぬ。その心の持樣では、夫を助けて事を天下に爲さしむる。女の勢力たるや實に一家の消長に關するものぢや。否寧ろ一國の盛衰にも關するものぢや。女と云ッて馬鹿には出來ぬ。女は勝い。女は尊い。ア丶霞村の家の細君は勝いものぢや尊いよ。僕も彼んなのが欲しい。小倉君君は何とぢや、と額に青い筋を出し、何やら云ふさま如何にも變なり。コレ〳〵雨村君君は正氣か。狂人に成つてしまるものか。それでは女尊男卑の說に太く敬服爲せられたと見ゑますな。イヤ〳〵決して爾では無いが、僕と同門の霞村の家の細君は實に勝い、彼れが今日の位置を得たのは、全く彼の細君の賜ぢや。さりとは近頃聞きたい話、君一人で感心爲ずに、霞村子の家庭の大略、われにも聞せ給へといへど、深草雨村は得意に成つて、去らぞ話さん聽き給へ。

（その上）

花の都と名にこそ負へれ、線香の烟さびしき谷中の墓地の片隅に去る年の暴風以來突かひ棒の二本ふゑたる垣生あり。主人は桐生霞村とて、腕の割には名前の聞ゑぬ貧乏畫工。年の比は早まつて腹切つてれかるに泣れた勘平ぐらゐ。貧なれやその後は妻をも迎へ切らず最早餘命短き母親を育みながら折々筆は執つては居れ

ど、未だ名の聞えぬ悲しさには、是れとて月に幾何も取れず。随つては僅か母子が生計なれども、これが他人に言はれうか米代無きが往々なれど、常に溜息つく田舎位が珍味の頂上。世には鯛食て不味なんどゝ贅を並ぶる人も多きに、それもへど我れはなさけない意久地が無い。アゝ最ういや〳〵この世はいや。何れもしろくも無い世の中に生存へて、これが眞個の生恥を曝さうよりか、刃物でこの世を二十九年に切りわげやうか。アゝ殘念〳〵、かゝる淺間しき心の起るも、本はと言へど皆是れ貧。貧は諸道の害なりとは、我れ桐生霞村が目下の境遇を能く一言にして盡したり。聊ては此處に何程も無き負債を拂ひ、後に母子が一月の生計を支ふる程の金あらで、微力ながらも男一匹、命を懸けて何がな一枚、書いて氣を吐き血を注ぎ、世を驚かせてくれなんものを、本意無や今はそれすら愜はず。地に根無き草は生へねど、天は祿無き人を生ず。情無き世や、敢是無き我身の

きか、母や路頭に迷ひぬべし。筆執つて生存へんか、その甲斐無きをいかにせむ。かゝる事ども思ひ凝りては日に幾度か悩殺す。誰れしもあること心を外に取はれて、専心業務に從ひ得ざれど、强ひて筆を執つて、書いても書いても出來榮え甚だ面白からず。意氣漸々に消沈して、今はそろ〳〵可怖しき厭世道を辿り初めぬ。

かゝる貧苦の中に在りても、霞村が大事に仕へる母といふは、六十路の上を四ッぢかりも越えたらん媼にて、その顔の優しきには似も附かず、その性質極めて邪見なり、加ふるに近頃は寄る年波が母をして益々邪見に性急に、日は一日と口喧しく成らしむれど、流石に孝心深き霞村も、今ははと〳〵その氣を取りかね、濟まぬ、これも我身の足らぬよりとは思ひつゝ、ひ筆執つていざ是れからといふ時に、傍からその氣を挫かれては、手に爲し筆をそれもはず折つて、腕を引組み

村は胸の中にて泣きぬ。あはれ、おなじく流すその涙等しく痛むるこの頭、紙の上にて流し痛めど、微力なれどもこの霞村、かくまで世をぞ泣かでも濟まむ。世の中に人の不幸は、誠や家庭の不和にあり。

稿料足らねど自から小さき庭前の白菊に秋雨蕭々降りそゝぎて、何とは無しに氣の引立たぬ日和なり。敵眼前に迫れゝど、霞村は強ひて圖案を凝し、いざとて紙に向ふその時、母親手暴く煙管を投げて、お晝の御飯は何う仕ます。朝も水を見たやうな粥、それも腹に足りる程無かつたので、わしは何うやら眩暈が仕さうだ。最う彼れこれ三十にも成つて、わづか一人の母親位養ひ切れず、毎日〳〵斯樣な切ない目を見するは、餘り褒めた話しでもあるい。其許は是れで宜いかも知らねど、母は堪つたものでなし。アヽ馬鹿〳〵しい、何んの爲に苦勞して子は今日まで育てたぞ、と罵る顏色益々凄し。あはれ、霞村は今日も亦母が言葉に鼻を折られて、意匠慘憺、拮据經營、折角凝しゝ圖案は茫々漠々の中に滅え去りて、これに代るに悲哀の觀念むら〳〵と萌し來る、霞村は悄然として聲も揚がらず、何うも誠に濟みませぬ。たゞ濟みませぬでは事が足らない。お晝の御飯は何うおしだへ。これを一枚かきかして、直に行つて參ります。何んだと、一枚かいてそれから直ゥ。はい、暫くお待ち下され、と霞村筆を取直せど母はぐるりと向き直り、膝にて疊に波打たせ、氣の長いにも程がある、老人じやとて生きて居る、飯を食はずに居られるものか。元來その畫は何時までの約束、一昨日までと言つたではないか。わづか一枚の畫をかく位に幾日かゝる。今度に限らず何時にても甕念入れて、わづか一枚の畫をかくに三日四日の日を費す。それで大金にでも成ることか、五十錢か一圓か關の山。そのやうな手遲いことで、この世知辛い世が渡れうか。資本要らずの車を挽いても、日に五貫やそこらは取れる。それに其許は平均して見れど、全体幾何取れるとおもふ。大枚な金をかけて、生じッか畫な

習へず、寧そ人力車夫にでも仕てれけむ、わずか二人位の家内で、このやうに饑餓れる事はあるまじ。それを思へむ亡なられた親父どのゝ氣が知れぬ、と今度は位牌に怨言を轉ず。默然として母の言葉を聞き居たりし霞村、この時始めて口を開き、仰せ一々御道理、誠に以て相濟みませぬ。何うしやう斯うしやうと、束の間も夢れろそかにはして居りませねど、何を言つても思つても、先達つ物は金の世の中、萬事に障害を爲れまして、是れぞと思ふ程の物を畫き得ず隨つては、纒つた金も手に入りませねむ、唯た一人のあなたさまに御苦勞むかり相懸けまする。イヤ最う實に心外でなりませぬ。それに今日は昔と變り、菊を一本畫きまするにも、古人の型をその儘に畫かず、設し一機軸を出すとまでは行かずとも、幾分か新しく畫かねむ世間がゆるしませぬので、鳥渡したものを畫きまするにも、つい、一日二日をかゝりまする。アゝ最うわしや畫の講釋は聞きたくなゝ、た腹が空いて眼眩がする。これじや今に干殺しに爲れるのぢや、と言ひつゝ表の長屋を覗き、アゝ感心じや感心じや、眞個にわしや羨ましくて成らぬ。まだ其許よりは年か若いが、親の指圖も受けないで、今日も早れ米と何やら買つて來た。彼の子のやうに車を挽いても親は養ふ。彼のやうな子を待つた親は、つくづく身を敢果なみ、筆を擱いて呻吟斷腸。老母は益々罵るゝころに、度々のこと面目無や、折も折なり格子戸がたり引開けて、霞村在宅かい、毎日いやな天氣だなア、と傘をすぼめて入來るは老師川上霞峰先生。

（上篇了）

梅の下風（十三）

白魚女史

あはれ夢で嬉しやと思ふものから、なは消ねせぬ夢の面影かくくと夫て亢り、さて容儀正しく告ぐる

、夢はもと思ひねに見るもの、心に懸けんもれろか、まして、父は吉を告げ、母は凶を心づくるとかき、父の現はれ給ひしなれど、嬉しきに似れど、これ又特なる夢、殊にれはや殿の睨められし眼のすさましさ現の身もよだつむかり、のう我が夫、兎に角に身安き堵にれかんが父母の遺躰を大切にする良策、妾一日も早く今の役を退き給はん事を急ぎ侍るなりとる言葉を、傳吉はたゞうなづき居りけるが、今日明にもと急ぎしとて、さは行かず、兎角其日も事に紛暮れなむとする頃傳吉何故か一寸用事あれど、猿島原のほとりまで行き來るとて、何處と行く方を訪ぬぞつねには似ず、何用とも、何處とも告げず歸りて後に告げむとて、そこ〳〵に立出でぬ。猿島河原まは路程もさむかりは遠からず、間もなく歸り來べし門の戸も鎖で待つこと二時三時、とすれど傳吉は歸來らず、如何にしつらんと案じつゝ、戸の方を伺へ今宵はまた月もなく星も見えず、ゐんの闇、鼻摘ま

れんも分かぬ計り、曇りし空を詠めては、そゞろに轡束なさのいやまさりて胸の動氣のなみ立つなみ〳〵ならぬも怪しと思ふ程に、其夜も二更すぎの戸ぼそに訪る丶人の聲しけれど、嬉しや我が夫、歸り來ましてかと、燈火捧げつ丶立ち出づれど、遂に見し事も聞きし事もなき人の、傳吉殿は歸られてかと訪ふ音、まさしく夫と思ひつるに案に相違して、とかうの答もえせで、たゞずみ守るいつもの思慮あるれ專とも見えぬむかりなる折りしも、やは源次郎殿にや、見當り給はでか、やつかれも只今まで其處此處と尋ねたれど覺しき人も見えざりしが。何にもあれ、此の闇、夜の明るを待ちて尋ねさせ給へ、先づ内へ入り給へと云ふにつれさらぞとて、共に内へとすゝむれど、人は心も落付ぬげ、挨拶もそこ〳〵走り行くも道理、之れぞ横川源次郎とて、かぞわかされし女の夫にて、其の女はもと、吉原三浦屋抱への遊女うつせみと云ふものなるが、年明けて、暇を取り、兼ての約束にて源次郎と夫婦にな

りけるが、此の女幼き折り人にかどわかされ、遊女に賣られけるが、故郷は越後とどかり云ふ事をうす〳〵知りて、如何にもして、生みの父母に逢はまほしき日來の心願、源次郎も憐れと思ひ、其の國に至り、何處をか尋ねなむ、又父母の分く事もやと思ひ、女を伴ひ、此の越後へと來りたる路すがら、雲助にたどかられて、女を奪はれ、之を尋ねまどう折りしも、傳吉に出でおひしが、兼て江戸へ奉公中互みに見知りたる中、此の事を語り、此の事を聞き共に氣の毒がりて、もと知りたる女、共に尋ね、萬一逢ひたらば我が家に連れ行くべし、其許も逢はゞまづ我が家に伴れ行き給へと道を敎へ、家を告げ、互みに尋ねたれど見も當りもせざれば、源次郎はなほ心許なくて、腰据ゑぬも道理、傳吉が遲かりしも又かゝるが故なり。

人の患ひを憂ひ、人の歎きをなげく傳吉、まして今日行く先きも告げず家を出でたるは、傳吉其身もよべいま

にかゝれど、猿島河原へト者のあるを尋ねて、その夢をトひてもらはんとてゆきけるが、夢は何なるか吉凶事とのトひ、もとより八卦、信ずるには足らずと思へど、〳〵怪しき雲霧の迷ひ來り、身の事、人の事、心に懸りて、枕には就きしかど、傳吉も心疑ぶれねど、妻もかゝることと〳〵聞きては、一入に女心の安すから ず、あやしき胸の動氣のみ浪打ちぬるに、かゝる折んは身を淸め、容儀を正しくし、心を靜かならしむるにしかずと夜の明くるも遠けれど、早く衣を替へ、身を正せど、傳吉も起き出でゝ、共に佛壇を淸め御あかしを燈して、佛を祈れど、妻も香を手向け、しきみの水かへつゝ、ふと夫が裾を見けるに、あやしや、血のき居るに、驚ろきて心付くれど、つまさきより膝のあたりわけに染みたり。如何せし事と妻はおやしむのみ、傳吉もたゞ不思儀、かなゝへど、夜べ猿島河原にて、何ものにかつまづき伏れけるが、大石もにやと



今思へど不思議、さては石と思ひしは死人にてもありけるかと腕こまぬきけれど、何にもせよ不吉なる衣、洗ひ清めまゐらせん、とう着かへ給へと甲斐〴〵しき妻の心つけに傳吉も妻の意に任して衣を着がへ、何ぞするに日も出でたり、朝飯もものしたり、さては春の營み、とく田に出でんとすれど、妻は鋤鍬そろへ、草鞋取り揃へてふと見れど、飛び石に血の跡あり、さるにても返す〴〵不吉のものを見るよと云ひざま、洗ひ清めんとする折りしも、門にどや〳〵人の足音、そや見そなはせ、彼處の飛び石の血のあと、彼の如く洗ひ落さんとする所にて候。證據は如斯重々に候と組子の頭に指しつゝ先き立ち入り來るは、馮司なり。あな何事と妻が驚く間もあらせず、傳吉は居らずや、御掟ぞと云ひつゝ、組子の頭、手の者を差圖し、こは何故の御掟ぞとおどろく傳吉を捕へ、はやくも繩を引きかくるに、こは心得ぬ狼籍、傳吉未熟の身を以て、日來

んも、未だ繩目にかゝらん程の事を致せし事、毛頭覺え御座なく候と云はせも果てず、だまれ傳吉、天地を云はず、事を以て知らす、汝暗中人を殺して人知るまじと存ぜむが、神明は此の如く暗中を照す、其許の飛び石の血、彼處にぬぎある衣の鮮血まのあたりの証ならずや、有無を云はさず、もの共早く役場へ引き行けとの下知に、傳吉は又さらに驚き、こは思ひもよらぬ御疑ひ、衣の血は、昨夜猿島河原にて物につまづき[illegible]くらまぎれ何とも知らず歸りて只今はじめて知りて我ながら驚き居り候ほどに候、恐れながら彼れを以て罪に落し給ふは御明政とも存じ仕らず、傳吉が人を殺さぬ証、我差添を見そなはし給へ血のあとの之れなきにても御明察をと云ふを半ばうちきゝて、だまれ傳吉、明政ならずとは憎くき云ひ分、衣の血のみにはあらず、なほ他に爭はれぬ証據は數あるぞ、者共早う引き行けとの言葉に傳吉また爭はず、さてはあかしは

り。れ專はたゞ驚き、かなしみ生体なくばかり、村人もまた之を見、之を聞きうちたまぎるばかりなり。



文林

羇中山　　東久世通禧

あつまぢのながめ盡せぬ富士のねは
旅ゆくひとのいのちなりけり

閑庭霜　　高崎正風

人とはぬあさぢが庭はあさひかげ
さすかたばかり霜とけにけり

山家落葉　　前田利嗣

木枯にさそはれてちるもみぢばの
みるみるつもる山かげのには

紅葉映水　　壬生基修

淵すらもこゝによりてや遊ぶらん
みな底かけててらすもみぢは

菊盛　　松浦詮

しもを經ていろそふにはの菊の花
老せぬやどのかざしなりけり

寢覺霰　　長谷信成

寢ざめつる折しも窓におとたてゝ
あられふる夜の寒くもあるかな

海邊月　　諏訪忠元

和田の原波よりいでゝいそやまの
松にかゝれるあきの夜のつき

閑炉　　宮地嚴夫

さくらずみ起して聞ばかまのゆに
響きそめけりまつかぜのおと

山家松　　小出粲

我ものとこのごろしめしやま松に
もとよりすめる鶴もありけり

菊　　鎌田正夫

めづらしき花をあつめて今年また
菊のその生をひろめつるかな

茸狩　千葉胤明

とることに心とられてとりためし
茸はいづこにわすれけん

千代能尼　遠山英一

そこぬけて水もたまらぬ桶の内に
こゝろの月のかげはさしけむ

田家初冬　内藤存守

もりすてし庵の鳴子をいたづらに
嵐のならすふゆはきにけり

湖上月明　藤井行麿

近江海わきよくはれて照るつきの
まどかの浦はよるとしもなし

谷如意翁の七十七の賀に　大畑弘國

大ひねや小ひねの山のふたならび
[illegible]

兒玉宗久翁の七十七の賀に　仝

玉だすきかけていのらむもゝ年も
千年のさかもやすくこゆべく

茂木梅溪翁の七十七の賀に　仝

梅の花さかりを家にゆづりおきて
みはもゝとせの春にはあはなむ

豆腐といふ物を　三浦千春

もえ出る春のをかべの木の芽よし
梅さくころのあわゆきもよし

橋本辰次郎　むめ　佐々豊水

富をかやはたれと高き名をあげぬ
はなかぐはしき梅のふたもと

近衞佐道清の妻　仝

陸奥のおくゆかしくもきこえけり
口づからうみをすひしまごゝろ

征韓論　赤松景福

[illegible]

あたらわが身を斬りてけるかな

人に別るとて　　磯野德文

あへむまた別るゝ世なり別るとも
またあふ事のなどかなからん

仝

別るともなにかなげかむ近からぬ
千里のはてもとなりなる世に

寄書言志　　草野隆道

れいが身もうれしきものは敷島の
ふみのはやしをたどるなり鳧

雪ふりけるあした　　足立正枝

我が宿の門邊もわかず降りつもる
ゆきふみわけて訪ふ人もなし

月前鹿　　宇井正夫

長き夜も月にうらみはなきものを
などさを鹿のなきあかすらん

時雨似涙　　木庭芳香

神無月そらさだめなき世のなかを
なげく涙のしぐれてやふる

まちてむなしき　　安齋篤敬

契りおきし人こそみえね月かげの
かたぶくまでも空だのめなる

秋山家　　後藤春藏

拾ひとるうなゐがゑみもこぼれ鳧
かたまにあまるしゐ栗の實に

暮秋菊　　伊藤純三

くれてゆく秋のかたみか庭の面に
折りのこしたる菊のひともと

寄石祝　　伊東祐賢

君が代のためしにひけるさゞれ石
いはほとなりてかげず崩れず

翠松　　鍋島榮子

としどしに緑もふかくしげりあふ
松をめぐりのやどぞのどけき

森時雨　前田朗子
紅葉せぬときはの森としらねはや
　けふもしぐれの降そゝぐらん

山寺暮秋　柳原愛子
軒にはふつたの紅葉かつちりて
　あきもくれゆく峯のふるてら

時雨　西四辻茂子
冬さむみかせのゆくてのむら時雨
　あられまじりになりにける哉

落葉深　小池道子
夜もすがらちりし紅葉に山さとは
　のこれる菊もうつもれにけり

夜落葉　松平健子
よもすから散もみぢはの音きけば
　耳にさはりてねられざりけり

秋夕雨　諏訪晴子

あはれをそへてむら雨のふる

初雪　保科節子
都路はまたさゑぬとも思はぬに
　はつゆきふれりをつくばの山

落葉滿水　遠山いね子
たゑずふる木の葉のあめに谷川の
　みづはなか〳〵かれはてに鳧

遠山初雪　中牟田常子
初ゆきは遠のやまべにふりにけり
　みやこに見るもほどなかる覧

瀧邊紅葉　田中竹子
たきつ浪枝にかゝれるもぢばの
　濡いろふかく見ゑわたるかな

海眺望　原田蒼生子
釣たるゝ小舟のかすもみゆるかな
　しばのうらなみ靜かなるらん

かきつめて友まち酒やあたゝめん
ちりつもりたる庭のもみぢは

故郷秋月　　高橋美代子

住みすてし年ふる里をきて見れば
軒のしのぶにあきかぜぞふく

籬菊　　足立三尾子

千歳をも庭のまがきにゆひこめて
さかり久しきしらぎくのはな

孫佐々政寛が身まかりける頃よめる今様歌　　佐々豊水

いくたびとなく忘れんと　わがしきたへの枕をも
かへしつれども現にも　夢にもみねてあなかなし
結びの神のたまはりし　あやにくすしき四のたま
天かけりきて和やかに　皇國まもれ御代まもれ

(十月廿四日)裁縫講習生卒業證書授與式に臨みて

〔諏訪郡上諏訪郡役所にて擧行〕

諏訪忠元

人の世にありてなすべきことわざいと多し。されど、男とをみなとは、おのづからにけぢめあり。世のすゝむにつけて、くさ〲の學の道ひらけ行中に、我國にありては、いにしへよりこがひのわざにつきて女子のつとむべきは、此たちぬひの道にして、まのあたりにかくべからぬわざなりけり。今年の夏、殊更に裁縫の道の講習會をたてられしも、全く此地の女子ともをして、其わざに巧みならしめむが爲にて、いともめでたきことになむありける。今日は其卒業式を行はるゝと、おのれにも臨むべき旨を、教育會長小島ぬしよりものせられぬ。つく〲とおもへば、去年きたりし時は中學の開校式あり。こたびは此擧のあるに出あひぬるは、此郡の教育の上につきて、いと悦ぶべきことのかぎりなりけり。されど、今より後、いやつとめにつと

たるも、覺えず涙の球は面に滿ちたり。張婆は他に涙の眼を拭乾せ、又私衙に連行きて、夫人と瑞桃とに見えさせたるに、小姐は小名を問はれければ、月香は己が名を以て對たり。夫人道ふ、月香の二字甚た好し。別に改むるに及ばずとて、其まゝ他を小姐に伏待しめ、鐘離公は厚く張婆を賞したり。不在話下。

可レ憐官室嬌香ノ女　權ニ作ニ閨中使令人

（未完）

才くらべ

蓬生屋女史

廣島稻荷町辰巳屋傳兵衛が妻みつ女と云へるは天性至孝殊に才ありて、姑が心をよろこばすこと少なからず其の家もと豐なりけるが、傳兵衛はからざる損耗して家產を失ひ、近き村里に物をうりありきてはかなき暮しをなし、殊に多く內に居らざりけるが、みつ女姑に仕へて甚だ愼しめり、姑年既に八十に越えたれば、眼もうとく手も叶はず、而も老耄しながらも、なほ婦女のたしなみを忘れでや、うみつむぎするとて、稚子の遊び事する如くなり、何の料にもならざれど、其の心はなほ息子夫妻を助けんとする慈愛心、みつ女はよろこびて、日毎に綿苧なんど云ふまゝに與へ、げに母さまはれ年よられしほどありて、うみかたのいと巧みなり、尤も遣ひよしなど云ひて、節だらけのうみやうみ決してあだにせず、いとをしみ仕へば、姑はほく／＼とよろこび。またある時は己れの年の老いて、其はかぐ／＼しからぬを、かこては、みつ女は姑の知らぬまにそつと己れがうみたるを足して、今日は殊更美しく為くものし給へり、早く休み給へ、肩さすり申さんなどゝて、たゞ姑が心をよろこばせ、其の歡ぶを己がよろこびとすれば、姑も喜びて、あだかも幼子の慈母に對けるが如くなり。之れ等何のつまらぬ事、才も智も入らぬ事と思はし給はん人もあらんが、なかく

人の成し難き業にして、家を治め姑に仕へんとする若き女たちはかゝる才必ずなかるべからずとてかくなむものしぬ。



書あつめ（五）

草の屋主人

飛鳥井家は世々蹴鞠の業をもて名誉ありけるが、中にも大納言雅世卿は此の道に長けられ、曲鞠とて、輿に乗じて鞠筥の底を脱せ是を御腰に結び付け、高足の鞠を此の筥の中を通して高く蹴上げ給ふこと、よみて幾度にもおよびぬれど此の曲を見る人感せぬはなかりけり、或る年の暮に例の曲行ありけるに、見物人つねより増りて群集し、中にも殿上におはする堂上方彼の鞠筥の曲を御所望ありければ、雅世卿例の如く鞠筥の、蹴御、けあげしたまふこと幾度つゞきても一度も落つる事なく、さながら筥に引力にてもあるかの如くなるに、貴賤とも手を打ちたゝきてなりどよむ聲天に轟く計りなり。然るに、さやうにたゞ感じと感ずる、群集の中に油賣商人一人ありけるが、何ぞこれ計りの曲何が夫れほど珍らしきや、幾人の感歎心得がたしとつぶやくに、之を聞くもの、一人、小癪なる油賣哉、其方の分限にて口に任せてあざけり奉る事の浅間しさよ、此の御曲は、これぞこれ飛鳥井殿家計りよく得させ給ふ御事にて、假令蹴鞠に得たる人も此の曲

ばかりは學ぶ事叶はねど、都も鄙もれしなべて擧め奉るを、之を誹謗する汝には如何なる曲かなし得る、たしなよと罵れど、油賣はなほわればかりの曲、わればかりの曲、わればかりの曲が何に珍らしからんと云ひやまざるに、果ては狂氣人とて人も云はせ置くほどに、曲もすみ御館の外に出でける後、件の油賣は、彼の罵りたるもの共に向ひ、我れ先きほど御家の曲を誹り候とて我をばいたく罵しられけるが、われ、御鞠の曲を誹るにあらず、思ふ子細ありて、誹りしなり。是れをば見られよとて、常に油を荷ふ桶より一舛の桝を取り出し其の舛に油をなみ〳〵と盛り、右の手に錢一文を持ちつゝ油を入る器に、此の錢をあてゝ舛の油を錢の穴より通しけるに、其の油錢の穴の眞中を通りて一滴もけがさず一舛の油器の中へ皆うつしつぎて、錢の穴の淵にもつけ汚がれぬに、見るもの罵りしもの皆驚歎しけり。さて油賣は衆人に向ひ、われ此の曲を習ひて得るにあらず、たゞ毎日油をはかりて器に入るゝその微細の穴を覺えず、通し習ひて得るなり、わがこの業は家職の鍛錬よりおこり、飛鳥井様の御鞠は家業として御幼少より學びて、是に至り給ふ。これ程の御曲何ぞ不思儀と云ふべき。是ら油は自得たまふべき事ぞ。空中にありて落ちずと云はゞ、妙とも不思議とも感ずべきが、如何と云へど、罵りたる者ども閉口してまた云ふ言の葉もなかりしとなり。果敢なき事にも鍛錬をつめば、かやうに人々を驚かすものぞかし。

家庭の花（上篇）

小倉山人

（發端）

世の中に金を厭がる人も無けれど、是れは又随分藻脱けた慾張から高利貸といふを家業に爲られる隣の慾兵衛どのでさへ、今日は子供衆を連れて瀧の川へ紅葉見

に行かれましたといふを聞き、れもはずも筆を擱いて、強くは厭せぬ机の上に頬杖つくづく天の摸様を眺むれば、まことや天高く氣澄み渡りて、前の林にわけも無く、ピー〳〵と鳴く百舌の聲まで、何とは無しに人の心をチト郊外に出遊なされと誘ふに似たり。これでは程慾しや一偏のれ隣さまも算盤投げて、紅葉見なんと、優しい氣にも成られし成るべし。われもと硯に蓋するほどの事も忘れて、鼻緒ゆるびし履物突ッかけ、駄木山なる我家を後に動坂といふ坂一ッ下れど、畦傳ひ向ふはやがて道灌山の頂に達したり。一息吐いて四方の景色を見放れど、小筑波も秩父も富士もわ〳〵見ねて、端知らぬ萬頃の田面は稲の苅入れ最中、處の森彼處の水に夕陽華やかに射せるもをかしく、名も無き小鳥の矢の如く飛交ひつゝ囀るも趣致ありて、潔白の花こそ無けれ秋の野は又却々に品韻氣高く、吟咏一番する時は、鳥渡目前に美なりといへども、まだ乳女臭き春の景色の到底及ぶ所にあらず。例へば數多の風雨を經し秋の景色は、これまで、經來し苦勞の額に波打てる老女が素顔とも見るべきか。そはいづれにもわれ世の中の開け行くこそ芽出たけれ。回顧すれどての邊こゝ兩三年前までこそ茶店の數も一ッ二ッ、それも竹の柱に蓆の壁が頂上にて、外皆の赤く爛れし老婆が柿賣る位に止りしが、大根畑は時の間に宏大莊麗なる別莊に變じ、同時に田端の停車場、鐵道も鼻で物いふ奥州通ひの外に彼れは水戸行、これは房總行など、線路縱横に開けたれど、閑地俄かに繁昌の勢ひ此處を然らしめしか、店小屋ざらりと軒を列ねて、以前秋風に水洟垂して柿賣りし老婆は何處へか姿を隱し、日に月にと榮ゑ行く今日にては、是れに代るに白紛したる十七島田が麥酒の瓶など扱ひつゝ往來の人に聲かけておかけなさい、お休みなさいといふを見る。扮裝なかりは鶴の千羽も墜ちさうなれど、腰には雀二三羽の銃獵紳士に幾度か道を讓り、ぶらり〳〵と秋を訪ひつゝ、行くほどに、心無くて日暮の諏訪神社に詣でたり。境

内の秋色はもいひ知らぬに、此處より遠く利根の上流千住、やゝ近きは淺草などを眺むる景色またなか〱に趣致あり、去つて花見寺に詣づ。こゝの景色亦一際妙なれど、小學校の生徒等が運動會に妨げられて佗くまでは賞しねず、愛を割きて裏門より出づ、折しも蜂に鼻の頭を刺れしには、甚だ閉口仕りぬ。ヲゝ痛い〱と鼻に唾を附けつゝ行くに、この邊に住めるは文人墨客物持の御隱居樣、もしくは常に冷たい風に吹れ〱し人々が、世をうぐひすの初音町に出づ。こゝに一人のわが友住めり。名は深草雨村とて、三十路前後の畫工なり。いつしかその門前に來ぬるものから、山茶花三ッ四ッ優しく咲ける垣間より窺ふに、主人机に頰杖ついて眉を寄せ、何やら切りに腦を痛むるものゝ如し。さては先生畫の圖案中と見ゆる、斯樣な時に邪魔を爲れては相互に迷惑至極、今日は寄るまいと思案して、二歩三歩行き過ぎしが、空通したと後にて聞か

格子戸引きあけ雨村樣、鳥渡お門を通りまするが、今日は失禮致しまする。いづれ又その内ゆる〱伺ひまするど表に出づれど、小倉山人それは酷いぞ。門より内に入りもせず、顔丈見せる位なら空行されしがまだ〱勝なり、幸ひ今日は手も空きたり、聊ては番茶の一口も呑んでお歸りなされといふ。拙者も實はその氣でありしが、御圖案中とお見うけ申して、無い氣を利した所でござる。イヤ〱そんな所では無し。先づ〱お上りなされといふに、鼻緒のゆるびし履物脫いで上にあがり、さて机に凭れて、六ケしい顔爲られたは、大方畫の御圖案中だとお見うけ申したは、爾で無いとは雨村樣、お世辭ではござらぬか。イヤ〱決して虚言で無し。そんなら何んでの御思案なりしぞ、先刻のお顔の拵への澁さ加減は。ムゝ彼れでござるか、彼れは女といふ物に就いて、一考して居たところで、別段圖案などではござらぬ。イヤそれは方角違ひの了簡、抑

儲る奴か、目鼻滿足に揃ひし男の爲る事にて、失禮ながら君や僕にはその邊の資格を親が與へて居らず。さりとは惡い了簡かな。止すべし止すべしと一息にいへど、イヤ小倉君、爾酷たらしう言はれまい。拙者が女といふ物に就いての考究は、弓矢八幡近きは日暮里諏訪明神も照覽あれ、決して卑しき目的にあらず。實を申せば今日まで、拙者は女その物に少しも重きを置かなんだ、女といふ物は無性に泣いたり笑ッたりするもので男の相談相手などには少しも成らぬ。たゞ最う飯を炊く衣服の世話爲る留守を爲る、その外には愛らしい子を産む位が勢一杯で、その他は夫の邪魔にこそなれ、何んの功能も無い物だとのみ思ひしに、是れは面目次第も無い誤解で、女と云ッて侮られぬ。その心の持樣では、夫を助けて事を天下に爲さしむる。女の勢力たるや實に一家の消長に關するものぢや。否寧ろ一國の盛衰にも關するものぢや。女と云ッて馬鹿には出來ぬ。女は勝い。女は尊い。アヽ霞村の家の細君は勝いものぢや尊いよ。僕も彼んなのが慾しい。小倉君君は何らおぢや、と額に青い筋を出し、何やら云ふさま如何にふ變なり。コレ〳〵雨村君君は正氣か。狂人に成つてたまるものか。それでは女尊男卑の説に太く敬服爲せられたと見えますな。イヤ〳〵決して爾では無いが、僕と同門の霞村の家の細君は實に勝い、彼れが今日の位置を得たのは、全く彼の細君の賜ぢや。さりとは近頃聞きたい話、君一人で感心爲ずに、霞村子の家庭の大略、われにも聞せ給へといへど、深草雨村は得意に成つて、去らむ話さん聽き給へ。

（その上）

花の都と名にこそ負へれ、線香の烟さびしき谷中墓地の片隅に去る年の暴風以來突かひ棒の二本ふゑたる垣生あり。主人は桐生霞村とて、腕の割には名前の聞ゑぬ貧乏畫工。年の比は早まつて腹切つてかゝるに泣れた勘平ぐらゐ。貧なれやその後は妻をも迎へ切らず最早餘命短き母親を育みながら折々筆は執つては居れ

ど、未だ名の聞えぬ悲しさには、是れとて月に幾何も取れず。隨つては僅か母子が生計なれども、これが他人に言はれうか米代無きが往々なれど、常に溜息つく田舍位が珍味の頂上。世には鯛食て不味なんど、贅を並ぶる人も多きに、それもへど我れはなさけない意久地が無い。ア、最ういや〱この世はいや。何れもしろくも無い世の中に生存へて、これが眞個の生恥を曝さうよりか、刃物でこの世を二十九年に切りあげやうか。ア、殘念〱、かゝる淺間しき心の起るも、本はと言へど皆是れ貧。貧は諸道の害なりとは、我れ桐生霞村が目下の境遇を能く一言にして盡したり。聊ては此處に何程も無き負債を拂ひ、後に母子が一月の生計を支ふる程の金あらど、微力ながらも男一匹、命を懸けて何がな一枚、書いて氣を吐き血を注ぎ、世を驚かせてくれなんものを、本意無や今はそれすら恊はず。地に根無き草は生へねど、天は祿無き人を生ず。情無き世

きか、母や路頭に迷ひぬべし。筆執つて生存へんか、その甲斐無きをいかにせむ。かゝる事ども思ひ疑りては日に幾度か惱殺す。誰れしもわること心を外に奪はれて、專心業務に從ひ得ざれど、强ひて筆を執つて、書いても書いても出來榮え甚だ面白からず。意氣漸々に消沈して、今はそろ〱可怖しき厭世道を辿り初めぬ。

かゝる貧苦の中に在りても、霞村が大事に仕へつゝ母といふは、六十路の上を四ッぞかりも越えたらん如きにて、その顏の優しきには似も附かず、その性質極めて邪見なり、加ふるに近頃は寄る年波が母をして、益々邪見に性急に、日は一日と口喧しく成らしむれた、流石に孝心深き霞村も、今はほと〱その氣を取りかね、濟まぬ、これも我身の足らぬよりとは思ひつゝも筆執つていざ是れからといふ時に、傍からその氣を挫かれては、手に爲し筆をれもはず折つて、腕を引組み差

村は胸の中にて泣きぬ。あはれ、おなじく流すその涙等しく痛むるこの頭、紙の上にて流し痛めど、微力なれどもこの霞村、かくまで世をぞ泣かでも濟まむ。世の中に人の不幸は、誠や家庭の不和にあり。

肥料足らねど自から小さき庭前の白粥に秋雨蕭々降りそゝぎて、何とは無しに氣の引立たぬ日和なり。敵眼前に迫れゝど、霞村は強ひて圖案を凝し、いざとて紙に向ふその時、母親手暴く煙管を投げて、お晝の御飯は何う仕ます。朝も水を見たやうな粥、それも腹に足りる程無かつたので、わしは何うやら眩暈が仕さうだ。最う彼れこれ三十にも成つて、わづか一人の母親位養ひ切れず、毎日〳〵斯樣な切ない目を見するは、餘り褒めた話しでもあるい。其許は是れで宜いかも知らねど、母は堪つたものでなし。アゝ馬鹿〳〵しい、何んの爲に苦勞して子は今日まで育てたぞ、と罵る顏色益々凄し。あはれ、霞村は今日も亦母が言葉に鼻を折られて、意匠慘憺、拮据經營、折角凝しゝ圖案は茫々漠々の中に消え去りて、これに代るに悲哀の觀念むら〳〵と萠し來る、霞村は悄然として聲も揚がらず、何うも誠に濟みませぬ。たゞ濟みませぬでは事が足らない。お晝の御飯は何うされしだへ。これを一枚かきまして、直に行つて參ります。何んだと、一枚かいてそれから直ッ。はい、暫くお待ち下され、と霞村筆を直せど母はぐるりと向き直り、膝にて疊に波打たせ、氣の長いにも程がある、老人じやとて生きて居る、飯を食はずに居られるものか。元來その畫は何時までの約束、一昨日までと言つたではないか。わづか一枚の畫をかく位に幾日かゝる。今度に限らず何時にても套念入れて、わづか一枚の畫をかくに三日四日の日貴す。それで大金にでも成ることか、五十錢か一圓か關の山。そのやうな手遲いことで、この世知辛い世を濟れうか。資本要らずの車を挽いても、日に五貫やそこらは取れる。それに其計は平均して見れど、全体幾何取れるとおもふ。大枚な金をかけて、生じッか畫なふ

習へず、寧そ人力車夫にでも仕てれけば、わずか二人位の家内で、このやうに饑餓れる事はあるまじ。それを思へば亡なられた親父ぞの丶氣が知れぬ、と今度は位牌に怨言を轉ず。默然として母の言葉を聞き居たりし霞村、この時始めて口を開き、仰せ一々御道理、誠に以て相濟みませぬ。何うしやう斯うしやうと、束の間も夢れろそかにはして居りませねど、何を言つても思つても、先達つ物は金の世の中、萬事に障害を爲れまして、是れぞと思ふ程の物を畫き得ず隨つては、纏つた金も手に入りませねば、唯た一人のあなたさまに御苦勞ばかり相懸けまする。イヤ最う實に心外でなりませぬ。それに今日は昔と變り、菊を一本畫きまするにも、古人の型をその儘に畫かず、設し一機軸を出すとまでは行かずとも、幾分か新しく畫かねば世間がゆるしませぬので、鳥渡したものを畫きまするにも、つい、一日二日をか丶りまする。ア丶最うわしや畫の講釋は聞きたくない、腹が空いて眼眩がする。これじや今に干殺しに爲れるのぢや、と言ひつ丶表の長屋を覗き、ア丶感心じや感心じや、眞個にわしや羨まし〱て成らぬ。まだ其許よりは年か若いが、親の指圖も受けないで、今日も早れ米と何やら買つて來た。彼の子のやうに車を挽いても親は養ふ。彼のやうな子を待つた親は、嘸樂みであらうと言へば、霞村はつく〲身を敢果なみ、筆を擱いて呻吟斷腸。老母は益々罵るところに、度々のこと面目無や、折も折なり格子戸からり引開けて、霞村在宅かい、毎日いやな天氣だなう、と傘をすぼめて入來るは老師川上霞峰先生。

（上篇了）

梅の下風（十三）

白魚女史

あはれ夢で嬉しやと思ふものから、なは消えせぬ夢の面影かく〲と[illegible]

う、夢はもと思ひねに見るもの、心に懸けんもれろか、まして、父は吉を告げ、母は凶を心づくるとかきく、父の現はれ給ひしなれど、嬉しきに似れど、これは又特なる夢、殊にれはや殿の睨められし眼のすさまじさ現の身もよだつぞかり、のう我が夫、兎に角に身を安き塔にれかんが父母の遺躰を大切にする良策、妾は一日も早く今の役を退き給はん事を急ぎ侍るなりと語る言葉を、傳吉はたゞうなづき居りけるが、今日明日にもと急ぎしとて、さは行かず、兎角其日も事に紛れ暮れなむとする頃傳吉何故か一寸用事あれど、猿島河原のほとりまで行き來るとて、何處と行く方を訪ぬれどつねには似ず、何用とも、何處とも告げず歸りての後に告げむとて、そこ／＼に立出でぬ。猿島河原までは路程もさむかりは遠からず、間もなく歸り來べしと門の戸も鎖で待つこと二時三時、とすれど傳吉は歸り來らず、如何にしつらんと案じつゝ、戸の方を伺へど今宵はまた月もなく星も見えず、しんの闇、鼻摘まれんも分かぬ計り、曇りし空を詠めては、そゞろに覺束なさのいやまさりて胸の動氣のなみ立つなみ／＼ならぬも怪しと思ふ程に、其夜も二更すぎの戸ばそに訪るゝ人の聲しけれど、嬉しや我が夫、歸り來ましてかと、燈火捧けつゝ立ち出づれど、遂に見し事も聞きし事もなき人の、傳吉殿は歸られてかと訪ふ音、まさしく夫と思ひつるに案に相違して、とかうの答もえせで、たゝずみ守るいつもの思慮あるれ專とも見えぬぞかりなる折りしも、やは源次郎殿にや、見當り給はでか、やつかれも只今まで其處此處と尋ねたれど覺しき人も見えざりしが。何にもあれ、此の闇、夜の明るを待ちて尋ねさせ給へ、先づ内へ入り給へと云ふに、れさらむとて、共に内へとすゝむれど、人は心も落付かげ、挨拶もそこ／＼走り行くも道理、之れぞ横川源次郎とて、かどわかされし女の夫にて、其の女はもと、吉原三浦屋抱への遊女うつせみと云ふものなるが、年明けて、暇を取り、兼ての約束にて源次郎と夫婦にな

りけるが、此の女幼き折り人にかどわかされ、遊女に賣られけるが、故郷は越後とぞかり云ふ事をうすく\知りて、如何にもして、生みの父母に逢はまほしき日來の心願、源次郎も憐れと思ひ、其の國に至り、何處をか尋ねなむ、又父母の分く事もやと思ひ、女を伴ひ、此の越後へと來りたる路すがら、雲助にたぞかられて、女を奪はれ、之を尋ねまどう折りしも、傳吉に出であひしが兼て江戸へ奉公中互みに見知りたる中、此の事を語り、此の事を聞き共に氣の毒がりて、もと知りたる女、共に尋ね、萬一逢ひたらむ我が家に連れ行くべし、其許も逢はゞまづ我が家に伴れ行き給へと道を敎へ、家を告げ、互みに尋ねたれど見も當りもせざれど、源次郎はなほ心許なくて、腰据ゑぬも道理、傳吉が遲かりしも又かゝるが故なり。

人の患ひを憂ひ、人の歎きをなげく傳吉、まして今日行く先きも告げず家を出でたるは、傳吉其身もよべいま

にかゝれど、猿島河原へト者のあるを尋ねて、そが夢をトひてもらはんとてゆきけるが、夢は何なるか大凶事とのトひ、もとより八卦、信ずるには足らずと思へど、く\怪しき雲霧の迷ひ來り、身の事、人の事、心に懸りて、枕には就きしかど、傳吉もえ寢ぶれねど、妻もかゝることゝく\聞きては、一入に女心の安すからず、あやしき胸の動氣のみ浪打ちぬるに、かゝる折りは身を清め、容儀を正しくし、心を靜かならしむるにしかずと夜の明くるも遠けれど、早く衣を替へ、身を正せど、傳吉も起き出でゝ、共に佛壇を清め御あかしを燈して、佛を祈れど、妻も香を手向け、しきみの水かへつゝ、ふと夫が裾を見けるに、あやしや、血のつき居るに、驚ろきて心付くれど、つまさきより膝のあたりわけに染みたり。如何せし事と妻はあやしむのみ、傳吉もたゞ不思儀、かなゝへど、夜べ猿島河原にて、何ものにかつまづき伏れけるが、大石もにやと心



先きも告げず家を出でたるは、傳吉其身もよべいま
しさ夢を見、日一日心をやりたれど、如何にも心

み、傳吉もたゞ不思儀、かなへをへ、夜べ猿島河原に
て、何ものにかつまづき伏れけるが、大石もにやと心
にもとめざりしが、思へば其の折り草履のなめりしも

今思へど不思議、さては石と思ひしは死人にてもありけるかと腕こまぬきけれど、何にもせよ不吉なる衣、洗ひ清めまゐらせん、とう着かへ給へと甲斐〴〵しき妻の心つけに傳吉も妻の意に任して衣を着がへ、何ぞするに日も出でたり、朝飯もものしたり、さては春の營み、とく田に出でんとすれど、妻は鋤鍬そろへ、草鞋取り揃へてふと見れど、飛び石に血の跡あり、さるにても返す〴〵不吉のものを見るよと云ひざま、洗ひ清めんとする折りしも、門にどや〳〵人の足音、そや見そなはせ、彼處の飛び石の血のあと、彼の如く洗ひ落さんとする所にて候。證據は如斯重々に候と組子の頭に指しつゝ先き立ち入り來るは、馮司なり。あな何事と妻が驚く間もあらせず、傳吉は居らずや、御掟ぞと云ひつゝ、組子の頭、手の者を差圖し、こは何故の御掟ぞとおどろく傳吉を捕へ、はやくも繩を引きかくるに、こは心得ぬ狼藉、傳吉未熟の身を以て、日來 [illegible]

んも、未だ繩目にかゝらん程の事を致せし事、毛頭覺ゑ御座なく候と云はせも果てず、だまれ傳吉、天物を云はず、事を以て知らす、汝暗中人を殺して人知るまじと存ぜむが、神明は此の如く暗中を照す、其許の飛び石の血、彼處にぬぎある衣の鮮血まのあたりの證ならずや、有無を云はさず、もの共早く役場へ引き行けとの下知に、傳吉は又さらに驚き、こは思ひもよらぬ御疑ひ、衣の血は、昨夜猿島河原にて物につまづき、くらまぎれ何とも知らず歸りて只今はじめて知りて我ながら驚き居り候ほどに候、恐れながら彼れを以て罪に落し給ふは御明政とも存じ仕らず、傳吉が人を殺さぬ證、我差添を見そなはし給へ血のあとの之れなきにても御明察をと云ふを半むうちきゝて、だまれ傳吉、明政ならずとは憎くき云ひ分、衣の血のみにはあらず、なほ他に爭はれぬ證據は數あるぞ、者共早う引き行けとの言葉に傳吉また爭はず、さてはわかしは [illegible]

り。れ專はたゞ驚き、かなしみ生体なくばかり、村人もまた之を見、之を聞きうちたまぎるばかりなり。

文林



羇中山　東久世通禧
あつまぢのながめ盡せぬ富士のねは
旅ゆくひとのいのちなりけり

閑庭霜　高崎正風
人とはぬあさぢが庭はあさひかげ
さすかたばかり霜とけにけり

山家落葉　前田利嗣
木枯にさそはれてちるもみぢばの
みるみるつもる山かげのには

紅葉映水　壬生基修
魚すらもこゝによりてや遊ぶらん
みな底かけててらすもみぢは

菊盛　松浦詮
しもを經ていろそふにはの菊の花
老せぬやどのかざしなりけり

寢覺霰　長谷信成
寢ざめつる折しも窓におとたてゝ
あられふる夜の寒くもあるかな

海邊月　諏訪忠元
和田の原波よりいでゝいそやまの
松にかゝれるあきの夜のつき

開炉　宮地嚴夫
さくらずみ起して聞ばかまのゆに
響きそめけりまつかぜのおと

山家松　小出粲
我ものとこのごろしめしやま松に
もとよりすめる鶴もありけり

菊　鎌田正夫

めづらしき花をあつめて今年また
菊のその生をひろめつるかな

茸狩　千葉胤明

とることに心とられてとりためし
茸はいづこにおきわすれけん

千代能尼　遠山英一

そこぬけて水もたまらぬ桶の内に
こゝろの月のかげはさしけむ

田家初冬　内藤存守

もりすてし庵の鳴子をいたづらに
嵐のならすふゆはきにけり

湖上月明　藤井行麿

近江海おきよくはれて照るつきの
まどかの浦はよるとしもなし

谷如意翁の七十七の賀に　大畑弘國

大ひゑや小ひゑの山のふたならび
[illegible]

兒玉宗久翁の七十七の賀に　仝

玉だすきかけていのらむもゝ年も
千年のさかもやすくこゆべく

茂木梅溪翁の七十七の賀に　仝

梅の花さかりを家にゆづりおきて
みはもゝとせの春にはあはなむ

豆腐といふ物を　三浦千春

もゑ出る春のをかべの木の芽よし
梅さくころのあわゆきもよし

橋本辰次郎　むめ　佐々豊水

富をかやはたれと高き名をあげぬ
はなかぐはしき梅のふたもと

近衛佐道清の妻　仝

陸奥のおくゆかしくもきこゑけり
口づからうみをすひしまごゝろ

征韓論　赤松景福

あたらわが身を斷りてけるかな

人に別るとて　磯野德文

あへむまた別るゝ世なり別るとも
またあふ事のなどかなからん

仝

別るともなにかなげかむ近からぬ
千里のはてもとなりなる世に

寄書言志　草野隆道

れいが身もうれしきものは敷島の
ふみのはやしをたどるなり鳧

雪ふりけるあした　足立正枝

我が宿の門邊もわかず降りつもる
ゆきふみわけて訪ふ人もなし

月前鹿　宇井正夫

長き夜も月にうらみはなきものを
などさを鹿のなきあかすらん

時雨似涙　木庭芳香

神無月そらさだめなき世のなかを
なげく涙のしぐれてやふる

まちてむなしき　安齋鶴[illegible]

契りおきし人こそみえね月かげの
かたぶくまでも空だのめなる

秋山家　後藤春藏

拾ひとるうなゐがゑみもこほれ鳧
かたまにあまるしむ栗の實に

暮秋菊　伊藤純三

くれてゆく秋のかたみか庭の面に
折りのこしたる菊のひともと

寄石祝　伊東祐貫

君が代のためしにひけるさゞれ石
いはほとなりてかげす崩れず

翠松　鍋島榮子

としどしに綠もふかくしげりあふ
松をめぐりのやどぞのどけき

森時雨 前田朗子

紅葉せぬときはの森と志らねはや
けふも志ぐれの降そゝぐらん

山寺暮秋 柳原愛子

軒にはふつたの紅葉かつちりて
あきもくれゆく峯のふるてら

時雨 西四辻茂子

冬さむみかせのゆくてのむら時雨
あられまじりになりにける哉

落葉深 小池道子

夜もすがらちりし紅葉に山さとは
のこれる菊もうつもれにけり

夜落葉 松平健子

よもすから散もみぢはの音きけぞ
耳にさはりてねられざりけり

秋夕雨 諏訪晴子

[illegible]

あはれをそへてむら雨のふる

初雪 保科節子

都路はまださえぬとも思はぬに
はつゆきふれりをつくぞの山

落葉滿水 遠山いね子

たえずふる木の葉のあめに谷川の
みづはなか〳〵かれはてに鳧

遠山初雪 中牟田常子

初ゆきは遠のやまべにふりにけり
みやこに見るもほどなかる闌

瀧邊紅葉 田中竹子

たきつ浪枝にかゝれるもぢぞの
濡いろふかく見えわたるかな

海眺望 原田蒼生子

釣たるゝ小舟のかすもみゆるかな
志ぞのうらなみ靜かなるらん

秋夕雨　諏訪晴子

かきつめて友まち酒やあた丶めん
ちりつもりたる庭のもみぢは

故鄕秋月　高橋美代子

住みすてし年ふる里をきて見れど
軒のしのぶにあきかぜぞふく

籬菊　足立三尾子

千歳をむ庭のまがきにゆひこめて
さかり久しきしらぎくのはな

孫佐々政寛が身まかりける頃よめる今樣歌　佐々豐水

いくたびとなく忘れんと　わがしきたへの枕をむ
かへしつれども現にも　夢にもみねてあなかなし
結びの神のたまはりし　あやにくすしき四のたま
天かけりきて和やかに　皇國まもれ御代まもれ

釣たる丶小舟のかすもみゆるかな
ゑむのうらなみ靜かなるらん

(十月廿四日)裁縫講習生卒業證書授與式に臨みて（諏訪郡上諏訪町役所にて擧行）

諏訪忠元

人の世にありてなすべきことわざいと多し。されど、男とをみなとは、おのづからにけぢめあり。世のす
むにつけて、くさぐの學の道ひらけ行中に、我國に
ありては、いにしへよりこがひのわざにつきて女子の
つとむべきは、此たちぬひの道にして、まのあたりにか
くべからぬわざなりけり。今年の夏、殊更に裁縫の道
の講習會をたてられしも、全く此地の女子ともをし
て、其わざに巧みならしめむが爲にて、いともめでた
きことになむありける。今日は其卒業式を行はると
て、おのれにも臨むべき旨を、教育會長小島ぬしよ
り物せられぬ。つくぐとおもへど、去年きたりし時
は中學の開校式あり。こたびは此學のあるに出あひぬ
るは、此郡の教育の上につきて、いと悦ぶべきことの
かぎりなりけり。されど、今より後、いやつとめにつと

めて、此郡の、かこひ糸ひく業の盛なるにならひて、他所の人々に立まさらむことこそは望ましけれ。

すはの水海　そこふかき
郡のをさの　めぐみをぞ
忘るゝ間なく　もろともに
たちぬふ業を　はげみてよ

越のわかれ

師岡須賀子

思ひきや越のしら山夢ならで
　見られぬ身ともなりにけるかな

實に世の中の事ばかり思ひの外なるものはあらずかし。今年七月の末つかた、夏休の折、故郷の都に歸りて以來、帝國敎育會の講習を度々の事ながらもうけつゝ、歸校の後の敎授の材料をもあつめてんと、照りつゞく八月を末までもまぎれくらしつ。かくて講習をもをへ、休暇の日限も近づきぬ。彼方に着きては何をせんかを話さん、此處にはこれを彼處にはかれをなど、言傳の事まで取認めて、其の日を待ち渡りぬ。さるに、いかにかしつらん、其の前より、少しく痛みし左の耳、劇しく痛みてたへがたし。醫師に見するに、鼓膜に腫物あり、切らすぞと云ふ。しかも、其れ充分にうみ腫らしたる上の事とせん。されど、今よりは猶痛むべし。其れ堪へて後ぞといふ。其れより後の痛みとわびしさ堪へがたし。今思ひやりてもなん。かくて其れ切る頃は、はや九月になりぬ。休の限は過ぎぬ。業は始まりぬらんと思へど、心もとなし。されど、とても出立つべくもあらねど、よしや切るとても七日は出でし。それまでには痛みも怠りなんとて、その屆しつゝ治療す。其の程今日は如何なる授業やありし、かのなつかしき敎子等いかにしつらんなど思へど、殆ど忍びがたくて、此のまゝにも、飛び立まほしきに、いとゞ痛さのまさるぞくやしきや。七日になりぬ。いねず、なかなかに劇しくなやみて、頭も耳も共になやむ。その心地、なや

みし人ならずては思ひやるべくもあらざらん。唯々人心地なし。かくする程、いつしか日數へぬ。心厚き校長、友どち、敎子たちの見舞の文とも、日々に十度の上になりぬ。見る毎に、忝さも、嬉しさも、なつかしさも增りて、片時だに斯くてあるべき身ならぬにと思ひせまりては、恥しさも口惜しさもそひて、たゞたゞ心も空になりぬ。さるに、人々の病は心よりなり、かつは、この病腦より出でたるもの、一月二月にて全く癒ゆべきにもあらず。かつは、日頃勝れて健にも有らず、醫師も心をつくす中にして、こを捨て勤めたりとしも、物事聞こゑずしては何かせん。今暫し試みよ。師ありてこそは又つくすべき折もあるべけれ。など言をつくして耳元に來てはかたる。さはいへ、一日々々と職を空しくする罪恐ろしけれど、今は我を罷めさせ給への願とも差出しつ。

あはれ、昨年の始より、わけ暮唯その內にのみありて立ちならしたりし學校。これや再び見かん、かれや語らんの心がまへ、皆むなしくなりぬる歎き、思ひやる人ありやいかに。まして、地方といふもの始めてにて、第一の故鄕と思ひ住みなれし處なるをや。さるに、學校よりは、病あらむ養生せよ。一月二月にても許さんをと心厚き言葉はいはん方なく嬉しけれど、其の後とて なは全じ狀なり。二月三月にいかでかいえん。よしや癒ゆとても、其の間の事心にかゝりて堪へがたけれど樣々と乞ひつゝ、しひて休養の許を得つ。その折の心苦しさ、校長のなさけ、容易く盡させず。さるに、たは書狀のたよりは、まして堆き迄となりぬ。卷き込めし情の程を思へど又しも出で立まほしくて、心も身もいたしたゝれぬるぞ詮方なきや。

十月の初よりは少し快くなりぬ。心の落居たれなるべし。さるに、半の程、校長の出でられぬといふに、嬉しくて、痛もわすれて急ぎ逢ひまつりぬ。此程よりの心づくしを思へど、胸のみふさがりて、少時は何の言葉も出でざりき。なは快からむ來りてよとのことなが

ら、其の頃より、父の病のために、家に歸りたりけれど、諸ともに出で立つべくもなし。されど、こ度もまた強ひて辭びつ。それより後は、たゞ／＼癒ゆべき道のみはかりたりしに、嬉しくも日に／＼聞ゆる事多く、人の物語も誤ること少くなりぬ。いと／＼樂しや。されど、彼方の事思ふ折ぞ、なほ氣上るやうなり。されど、今は大方快くなりぬ。全くの耳しひともならざらん。人々よ、心をな痛めそよと知らせまほしくて、枯れ枯れなりし文机のもとに立ちよれど、時雨をさそふ風と共に、色こき紅葉さと吹き入りぬ。

三十一年十一月の末つかた　　すか子

病のために職を辭して後に越前の人に　　師岡須賀子

秋またで越えんと云ひし歸山
　雪ふるまでも都べにして

又

　福井の空やいかにさゆらん

愛宕山は福井市第一の紅葉の名所なり

あたこ山千しほの紅葉この秋は
　たゞ人傳にきくのみにして

足羽山上の鐘は東京の號砲のごとくなれど

足羽山鐘の響はわすれぬを
　きこえぬ身ともなりにける哉

又その地の友のもとに

諸共に愛でにし時をしのぶかな
　藤島の花北潟の舟

堅達に又吉崎に鯖江にと
れなじく
　あそびしことをいつか忘れん

敎子たちをれもひやりて

心して文の林を分け／＼て
高嶺の花を折れよ人々

まづかしき越の若草こゝろせよ
雪ふりぬべくはやなりにけり



雑報

●大御心　高く廣くおはしますこと、今さらならず、かけんもいとかしこし。世はおしなべて、おごりにのみ流れゆくめるに、大みみづから、つゝまやかなるを旨とせさせ給ふとこそ。さきに、河内、和泉、攝津の國々にて、陸軍の大演習をせさせ給はんとて行幸せんとし給ひし時、鐵道局にては、海外諸國の帝王の御車のさまをかたどり、なほこれに、さまぐ＼のたくみをつくして、御車を造り奉らんと、宮内大臣によりて、奏し奉りしに、陛下、きこしめし給ひて「こたびの行幸は、戰の場におもむくにことならねど、例の御車こそよけれ。そは禁めよ」と詔ひきとぞ。かくて、おはしまして後も、大本營とせさせ給ひし行在所も、いとゞ、質表にせさせ給ひきとなむ。おほかたの臣民たらんものは、皆、大御心を心として、おごりはともに、いましむべきなり。かねての大御言にも、「恭儉己れを持し」とも詔へるにあらずや。ゆめ。

●聖德　かくて、大演習はてゝ後、大阪偕行社にて、内外の官民、三千人あまりを集へて、御宴を賜はりき。この時、陛下には、玉座をも、殊更にわけては、設けさせ給はず、御椅子よりはじめて、諸の器、供御の御饌をさへ、人皆と、ひとしくせさせ給ひきとぞ。さればぞ、皆、大御心に感じ奉らざるはなく、殊に、外國の人々は、目のあたり、このありさまを見奉りて、いとゞ、心に感動したりきといふ。

●居留地通御　大演習のをり、神戸に行幸し給ひし時、そこに住める外國人等は、切に、居留地を通御せさせ給はんことをこひ奉れるに、こをゆるさせ給ひしかど、ありとある外人等、みな、喜ぶことかぎりなく、

あらんかぎりの敬意を表して、迎へ奉れり。

●君臣の分は、萬古かはることなし。かしこかれども、天神まづ、この國土を修め給ひ皇祖、皇孫をこの國の君と定め給ひしより、皇統一系、連綿として、かはらせ給はず。歷代の皇上あつく、臣民をあはれませ給ひ、臣民も、其のもとを尋ぬれども、天神、或は、代々の皇上より分れたれど、忠孝を主として、一へに、敬ひつかへまつりつゝ、曾て、分を亂しゝことなきは、今更に、もの新しげにいふべくもなし。これ、國體の萬國に勝れ。また、君臣の間柄の世界に比なきありかたちなり。さきごろの大演習の折にも、陪觀の外國人等數多ありしが、皆、まのあたり、
天皇陛下の御稜威の勝れて、たかく尊くおはしまし、はた、臣民の一へに敬ひつかへ奉る心深きを見て、心動かぬはなく「あゝ、大君は、かく御稜威たふとくおはしまし、臣民は、かく一へに仕へ奉る、かゝるよき君、この臣民をすべ給ふに、何事を企てゝか成らざらん」とていたく感歎して、しどゝ侍從武官等に物がたれりとぞ。抑、我が國にしては、幾千萬年以來の國風なれど、さどかり事新しくは、誰かは思はん。されども、遠く海をへだてたる外國人の眼には、かく見ゆるも理なりけり。こを推しても、この國と、彼の國との、ありかたちの異るを知を得べしかし。

●行啓　皇后宮陛下には、去し十九日、華族女學校に行啓せさせ給ひて、生徒の運動會をみそなはし給ひ、やがて、御歸路には、赤坂離宮に御車を寄せ給ひて、今を盛とさきにほへる菊の花をみそなはし、有爵の者等にも、陪觀せしめ給へり。かくて又、去し廿八日には、橫須賀軍港に行啓せさせ給ひて、新造軍艦をみそなはし給ひ、大臣夫人、海軍將官夫人等にも陪觀せしめ給へり。

●御物　聖上陛下の常に用ゐさせ給へる御湯の御釜

大君は、
り給へり。
●鍛物　聖上陛下の常に用ゐさせ給へる御湯の

七寸あり。これに、比翼菊の御紋散ありて、少しく彫刻をそへたり。蓋は、ともぶたにて、龜甲拔の摸様ありとぞ。こは、かの鍛金に聞え高き鈴木長翁齋（東京淺草區福井町に住めり）が、おほせをうけたまはりて、かの源頼朝（七百年前）の用ゐし純金製の釜を見本として、作り奉れるなりといふ。又、さいつころ、陛下の朝鮮國王陛下におくらせ給へる御香爐は、純銀四貫つき、高さ一尺八寸、胴張一尺三寸、三足猫足、蓋に、八重菊御紋透しにて、こも亦、長翁齋が作り奉れるなりとぞ。こは、おほせのまゝに、三日が內に作りこへて奉りきといふ。

●東宮御所　は、後造營の間、青山離宮をかりに定めさせ給ひ、去し一日、うつりおはしませり。

●降誕　博恭王殿下の妃經子殿下は、去し十四日、王子をうませ給ひ、御名を恭子とつけ給へり。

●天長節詠進和歌　御題は、「萬民祝」にて、其の歌ども、左にかゝぐ。

不二のねも新高山もさゝよむまてうたへやうたへ君かよろづ代　正
大君をことほく聲そきこゆなる人もかよはぬやまのおくまて　直
民草の野にもやまにもしけりあひて豐なる代を祝ふけふかな　利
萬代をうたはぬ里のくまもあらし日の大御旗かゝけつらねて　興
たのしさのあまる心もほに出てゝさゝよさしうたふよもの民草　資
ひらけゆく御國の民の家ことにいはふは御代のさかえなり鳬　承
ひさかたの天長かれさたみぐさのわか大君をいはふけふかな　路
天なかく地ひさしくさ大君のいく日のたる日いはふけふかな　光
くりかへしさしのなかく大君のあれましゝ日をいはふ國民　通
きみか代を千代萬代さうたふらむ國つみ民のけふをいはひて　昆
明らけくおさまる御代を國民の祝ふこゑこそよもにみちけれ　哉
民草のなひきなひきて君か代をうたふもたかきよろつ代の聲　光
高砂もねそか千島も日のみ旗たてゝそいはふ御世のさかえを　利
幾ねゆくこの大御代のけふの日をあふきいはゝぬ民なかり鳬　忠
年毎のいねのみのりに民草のゑまひさかゆく御代のゆたけさ　済
天さかるひなのはてまて大君のよろつ代よはふ聲さよむなり　美
天てらす日のもとのみか外國の人までけふをいはゝぬそなき　通
けふさいへは都もひなも家ことにみはたをたてゝ千代祝ふ也　延
家毎に朝日のみはたたてなへて御代をいはゝぬ里なかりけり　[illegible]
日のみ旗かゝやきわたる大御代を千代さうたはぬ民なかり鳬　[illegible]
けふみれは宮もわらやも君か代を祝のはたにおほはれにけり　近
千島より高砂かけて君か代のこゑあめつちにさゝよむけふかな　秋
北のうみも南の島も御めくみのなみしつかなる代をいはふ哉　[illegible]
大君のひろきめくみの民草のいつれのくまかさかえさるへき　有
大君のよろつ代なれは天の下うたはぬ人はあらしさそおもふ　麗
大み世の青人草も四方の海のあまもうたふかよろつ代のこゑ　樞

君か代を千代にやちよとさ日のみはた掲けてけふをいはふ民草　長言
家ことに朝日のみはたかゝけつゝ千代にやちよとさ祝ふけふ哉　行久
野の末もみ山のおくも君か代をいはふこゝろはかはらさりき　有義
さすたけの君よろつよとさうたふなる聲こそとよめ國の内外に　綱二
進みゆく御代のさかえは打なひくあを人草のうへにみえつゝ　正夫
業もけふはやすみて君か代をいはひかはせりあまもきこりも　胤明
けふのこの大みよいはふほさみえていつくの県も賑はひにき　英一
幼子もかたこゝなから君か代を千代にやちよとさうたふけふ哉　義濟

●御兼題和歌詠進　御題は、「香水」にて、其の歌ども。

もさよりも妹かゑまひは花なるをうはらのかさへ添てける哉　正風
花紅葉かけもとゝめぬみつなれさかゝるかをりは珍らしき哉　延通
乙女子かそゝける水の香ひこそめにはみえさる飾りなりけり　直大
たくひなきかにもある哉恐ろしき針ある花のつゆさしもなし　利嗣
鶯もこてふもしらしたをやめか花のくしけのみつのかをりは　豊頴
香ひかのよのつれならぬみつよこは月のかつらの雫なるらむ　眞頼
たをやめの花をかされる黒かみにそゝきし水のかこそ高けれ　承昭
うめかゝをさめしたもさゝ思ふ哉にほひゆかしき花のかの水　詮
そらたきをくゆらしゝよは昔にて今はかをれる水をそゝけり　光尊
衣手にそゝけは薫る水あれはそらたきもの[illegible]におくれける　光昭
黒かみにかをれる水はもゝくさの花をかさせる心地こそすれ　利鬯
ひさつほに清き薫りをたくはへて水のいろさへうるはしき哉　忠敬
いろ〳〵の花の雫くをあつめてや春秋しらぬかににほふらむ　清
そらたきのくゆる烟りにまされるはかもしゝ水の薫りなりき　通治
まさぬするひさのころものこゝちよく香は水の薫りなりけり　長延
維之

をさめこかむすひあけたる黒髪にゆかしくかをる花のつゆ哉　愛
たをやめか花の袂にうちそゝく水のかをりのふかくもある哉　任
いろもなき水にはあれさ衣手にそゝく薫りのなかくもある哉　文
花の香の袖にのこるさおもひしはそゝきし水の香ひなりけり　房
あされかみけつろくしけにさり添し水の薫りの深くもある哉　敦
行過し人はたれかさみかへりぬかをれる水のなつかしくして　道
うちそゝくくしけの水は淺けれさ花のかをりの深くもある哉　兼
衣手ににほひをさめし花の水すきしあさまてゆかしかりけり　好
あて人のすきゆくあさに花の香の水のかをりそなほ殘りける　三
一雫くそゝきし水のいつまてか花のたもさに香をのこすらむ　愛
春あきもわかてめてたき花の香の水かをるよさなりにける哉　嚴
袖の上に日をへてあせぬ花の香は垣根の菊かのへのうはらか　正
菊うはらさま〳〵の香そにほふなるこれやさこよの花園の露　秋
雲井まて立のほるよさなりにきそらたきならぬ水のかをりも　衆
たち花も梅もなにせんふりそゝく水のかをりはさきなかりき　有
やまひさのをろ菊ならぬ花の露はらはさりせはちよ薫らまし　楹
よにかをろみつのみなかみたつぬれは草木の花の雫なりけり　興
ひさそゝきそゝける袖のかをれるはいかなる花の雫くなる閑　行
ふさやかにゆひたるいもか黒髪に花の露さへうちかをりつゝ　綱
手弱女か袖にそゝける水の香はそらたきよりもなつかしき哉　正
そゝきたる水の香ひにたをやめのかさしの花も色まさりつゝ　胤
たをやめか袖のかをりはそゝきつるうはらのはなの雫なりき　英
そらたきの香ひはあれさ此水の高きかをりにあにしかめやは　義
手拭のしめらぬほさの雫にもかをりはいたくうつりけるかな　久

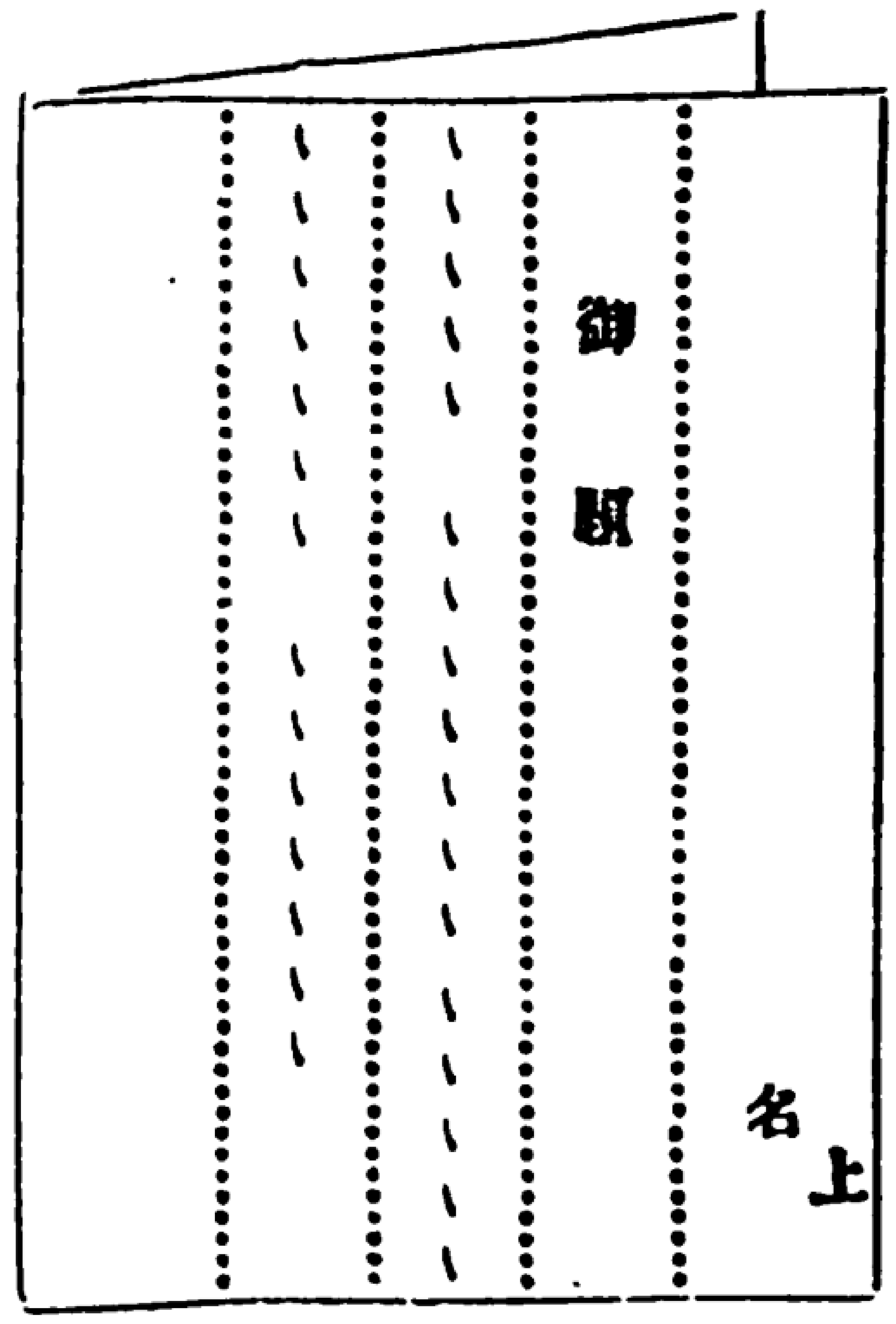
●歌御會始御題　來ん卅二年、歌御會始御題は、「田家煙」と定め給へり。こは、例のたかき卑きをいけ

歌よみ出でゝ、大御心を慰め奉り、こよなき御感蒙れかし。詠進書式、期限等は、

料紙は檀紙、奉書、杉原紙又は美濃紙を用ふべし

詠進期限は一月十日まで

竪詠草（但し五ツ折）



裏面書式

某府縣下某國某
郡市某町村
華士族又は平民
苗字　名

官位勳功及有爵者は苗字の上に記載すべし

●華族女學校生徒運動會（第七回秋季）を、去し十九日、その構内なる庭園にてもよほせり。この日、皇后宮陛下、皇女常宮、周宮、富美宮、恭宮の四內親王殿下のぞませ給ひ、又、小松、北白川、有栖川の御息所殿下も、おはしませり。さて、陛下をはじめ奉りて、みけしきいとうるはしく、さまぐ\のあそびをみそなはし給へり。其の運動會次第は、

第一	唱歌（皇后陛下御製金剛石）		生徒全體
第二	ポロネース		初等小學全體
第三	遊戲（旗取）		幼稚園幼兒全體
第四	方形運動（第一）		高等中學第三級
第五	毬門毬投ケ	（紅勝）	高等小學第三級
第六	方形行進		初等中學第三級
第七	蛇行進	（白勝）	初等中學第二級
第八	舞（船遊）		高等小學第一級　唱歌 初等中學第三級
第九	韓球競爭	（白勝）	初等中學第二級
第十	綱越	（互角）	高等小學第二級
	休憩		
第十一	ローン、テニス	（互角）	高等中學第一級　四人
第十二	矯正術		高等小學第一級
第十三	毬籠	（互角）	初等中學第一級
第十四	方形運動（第二）		高等中學第一、二級
番外	御好綱越		小學科生徒
第十五	唱歌（君ケ代）		生徒全体　高等小學第二級

●貞婦　岡山縣、上房郡、津川村に住める小野鹿藏が妻、ふで女といへるは、心いとすなほにして、夫に事ふること、なべてならず。嫁きて幾許もなきに、夫鹿藏、癩病にかゝりて、足腰もたゝぬを、かてゝ、眼

病をわづらひ、兩眼しひて盲目となれり。ふで女朝夕に、みとりおろそかならず、暇あれど、人にやとはれ、いさゝかの料を得て、醫藥をあがなひ、貧しきなかにも、滋味をすゝめて、つゆも倦める色なく、父母離婚をときすゝむれども、うけひかず、操を守ること、こゝに十年一日の如くなりけれど、事、知事にきこえて、このほど金三圓を賜はりて、褒賞せられたり。さて又、さいつころより、ふで女、ふと、寒冒にかゝりて、今に五ヶ月ばかり、うち臥せるを、この家の隣に、今津小學校といふがありて、教員生徒ども、ものをおくりて、之を慰め、又、放課時間毎には、年長の生徒等、そこにゆきて、何くれとたすけものすといふ。これも、ともに感ずべし。

●孝子　上野國、碓氷郡、磯部村に、二人の兄弟あり。兄を大手善三郎といひ、弟を馬吉といへり。この二人、心ばへいとすなほにして、まめに兩親につかふ

●良教師　伊勢の國なる湊村小學校の訓導に、大松光三郎といふ人あり。親、年老いて、且、盲なるに、毎朝昇校せざるさきに、まづ、自、新聞紙をよみてきかするを常とし、なほ、孝養おろそかならずといふ。教師としては、げにさもあるべしかし。

●勤學　下野の國、烏山小學校の四年生に、石川若三郎といふがあり。日毎に、二里半の山路をこえて、學校に通ひ、入學せしよりこのかた、いまだ、一日欠席せしことなく、試驗毎に、成蹟優等なりといふ。校長、書籍を與へて、之を賞せりとぞ。

●質素　を旨とすべきは、學校生徒には、殊に必あらまほしきことなり。九州、熊本女子高等小學校長は、女生徒の服裝、華美に流れゆくをうれひ、生徒服制を定めて、綿布の外は、用ふまじきことゝして、之をいましめつといふ。よきことなり。

●横濱高等女學校　さきにも、はやくかゝげたり

其の旨趣を採用し、こたび、縣會に、議案を提出せりといふ。費用總額二萬四千五百二十八圓九十錢一厘にて、この内、校舍新築費は、一萬四千百三十七圓五十錢の豫算なりとぞ、一日もはやく、成りなんことのみぞまたるゝ。

●日本赤十字社　にては、去し十日、看護婦の簡閲點呼を行へり。抑、この點呼には、四つの別あり。一には、戰時。二には天災救護の時。三には演習。四には、平時の四種なり。さて、こたび行へるは、平時のなりといふ。かくて後、幻燈會をもよほし、幹事清水俊氏、幻燈畵の説明をせり。來會者は、看護婦二百四十餘名、この外、赤十字社病院輕傷患者をあはせて、三百餘名なりき。抑、日本赤十字社は、　皇室の看護を蒙り、戰時には、彼我のわかちなく、傷つき病める者を救ひ護け、又、天災にかゝりて、傷つきなやめる者を救ふを旨とせり。はじめ、明治十年、西南の役に、伯爵佐野常民、子爵大給恒氏等、こを起し、名を博愛社といひしが、明治十九年、我が政府、ジユネーヴ條約に加盟せしより、改めて、日本赤十字社と稱へ、瑞西國ジユネーヴ府萬國赤十字社中央部と交通を開けり。當初は、社員の數も、わづかなりしが、廿七八年戰役に功を立てし後は、頓に增加して、今は五十餘萬人の多きに至れり。又、その養成せる看護婦は、三百九人、同じき生徒五百三十九人ありといふ。さて又、去し卅年九月、澳國維也納府に、萬國赤十字會議をもよほせし時、幹事文學士有賀長雄氏赴きて、參列せしに、彼の國の人、日本赤十字社の盛なるさまを聞きて、其の故を問へるに、有賀氏、答へて、「我が國には、特種の二大勢力あり。一には、　皇室と、臣民との關係、萬國に比類なきこと。二には、國民の義勇奉公の天性に富めることとなり。」といひしに、甚く、感動したりとぞ。

●鈴木重嶺翁みうせぬ　さきに、ふと、車よりおちて、傷つき、爲に、病みて、ふしどにあり、療養おろそかならざりしが、そのかひもなくて、去し廿六日、

午前二時遂にみうせられぬ。いとをしきかぎりなり。翁、よはひ八十路あまりを重ねて、言葉の道に、いたり深く、歌に文に、秀でたりしを、今は、空しき人の數に入りぬ。誰かは、惜まざらん。誰かは、悲まざらん。嗚呼。

●和歌募集　熊本縣、肥後の國、鹿本郡、山鹿町の人、西澤靜春子といへるは、もと、長野集といへる人の長女なりしが、後、西澤文右衛門に嫁げり。さて、夫ははやくうせつれども、家の名をおとさず。年わかゝりしほとより、本居大人のをしへ子なる長瀬眞幸が子、幸室につきて、皇典を修しかど、晩年には、從ひて學ぶものも多かりけり。さるを、今年七十九年の春秋をかさねて、身うせぬれど、をしへ子等相はかり、靈祭を行はんとて、左の題にて、廣く和歌を募るといふ。

（海棠軒主人の報による）

妾等が詠歌作文の師なる西澤靜春子は、今年七十九歳の春秋をかさねて身まかりぬ。こゝに靈祭を執行

玉作を妾どものうちに御投與を伏て乞ふ

熊本縣肥後國鹿本郡鹿山町主唱者總代○西澤美登子○長野多加子○江上嘉都子

●交際　およそ、開港地にては、事知夫人などは、外國の婦人と交を結ぶべき要あり。さて、神奈川縣知事淺田徳則が夫人は、月ごとに、第二第四の月曜日を應接日と定めて、其の訪問を受くといふ。

●頓智　は、時にとりて、功をたつること、今には、はじめぬことなり。されど、とみの事にあへど、多くは、心うつけて、常に智ある者だに、後に思へど、あやしきまで、おぢけて、物心うすること、男にも、少からぬがならひなり。さるを、このころ、下野の國なる那須村に住める某といへる婦、夜、車に乗りて、親戚のもとにゆかんとしけるを、賊、途にたちふたがり、刀をぬきはなちて、金を得んとせまるを、この婦、車の中より、にはかに、男のまねして、聲あらゝげ「ピストルにてうち倒さんず」とさけびけるに、賊は、あわて、ふためきて、

歌の庭



十二月五日兼題 松の雪

天

三河國寶飯郡下地町 永井さい子

十かへりのそれかわらぬか白雪の
はなこそさけれ松のこすゑに

地

大阪市北區安治川通上二丁目乙十七番地 髙橋かね子

めなれたる松のすかたもふる雪に
けさわたらしくなりにける哉

人

常州稻敷郡鳩崎 關口光子

塞けれどいざれりたちて拂ひてむ
ひめまつが枝の雪れもけなり

人

岡山縣八番町 降田槇子

さよ嵐ふきしつまりてときはなる
まつにもゆきの花そさきける

秀逸 （十首）

肥後 佐々小琴子

夜あらしの音しづまりてあけ渡る
のきよりつづく松のしらゆき

東京 羽田三緒子

たゆみふす木々の梢をよそにみて
ゆたかにつもるまつのゆき哉

東京 仕山幾子

庭松の木すゑまむらにふりそめて
花かとまがふけさのしらゆき

三河 石川頼子

松か枝に清くもつもるしらゆきは
はなにも優るながめなりけり

北海道 畠山百合子

れしなべて雪は積れどことさらに
まつのこずゑはれもしろき哉

備前 西艶子

拂はすは枝や折れなんしかはあれと
さはるもをしきゆきの松かな

遠江 岡部やよ子

訪ふ人もいまはあらしの音をさへ
うつみはてたる松のしらゆき

出雲 岸なみ子

ふりつもるゆきに梢はうもるれと
松のみさをはかくれさりけり

信濃 齋藤かつ子

一群の田鶴のあそふと見ゆるかな
まつにふりたるけさのはつ雪

山形 金森とし子

き丶なれしまつの嵐はしつまりて
こすゑゆたかにつもる雪かな

（以下原稿到着順）

溝口貞子

夜もすがらしらべし琴のねをたねて
まつにもつれろゆきの木たかさ

石井豐子

ふる雪にうづもれながらおいまつは
千代のみさほのいろまさりけり

浦井豊子

梢ふきしあらしもいまはおさたねて
ゆきにうもろ丶にはのまつが枝

めつらしと思ひながらもふるゆきに
　かたふくまつはうしろめたしや　淺井靜子

ゆふあらししづまりはてゝ山まつに
　ふりつもりたる今朝のゆきかな　安孫子かづ子

朝日かげにほひまばゆくまつのゆき
　てりかはしてもみねにけるかな　佐々有鄰子

住の江のきしのひめまつしろたへに
　ねむれるすがたおいさひてけり　竹村竹呈子

なかなかにいろこそまされ老まつの
　そのいたゝきにゆきのつもりて　塙いさむ子

ゆきふればみさりの松もいろかへて
　すがたのみこそさきはなりけれ　横山柳子

白ゆきはまつのこずゑにつもりけり
　さきはのいろもしはしかくして　中山さみ子

朝ぼらけゆめにもしらぬしらゆきの
　こゝろのさけきみれのまつが枝　川村高子

からさきの松のみさりもうつもれて
　まはゆく見ゆるけさのしらゆき　坪内晴子

さきはなるまつのみさをも雪ふりて
　くれゆくさしの今日ぞしらるゝ　福原菫子

おしなへて雪はふれどもさきはやま
　まつの木ふりそこさになかしき　名取正代子

なかなかに松のみさりのいろはねて
　ゆきは千させのはなさここそ見れ　坂田きみ子

ふる雪のなかにみさをはあらはれて
　まつのすがたのおもしろきかな　名取よし子

おしなべてこずゑにゆきは積れども
　こさにめでたきまつのねたぶり　碓井信子

たかさこのをの上の松にしらゆきの
　まつが枝ばかりすがたたゝしき　伊藤うめ子

老のみさともにつもりしわがにはの
　つもるさまこそゆたかなりけれ　萩原瑋子

さきならぬ花かさまがひみゆるかな
　さしふるまつにかゝるしらゆき　河田いし子

やままつのさきはの色もうづもれて
　なみたつまつにかゝるしらゆき　木村かね子

老まつにふかくもつもるしらゆきは
　ゆきのしたにやはるなまつらむ　楠精子

ふりつもるゆきの下にもいろかへぬ
　あたゝかげにもみゆるなりけり　島田好子

あしびきの山のまつが枝ゆきふれど
　まつのみさをはかくれざりけり　中島房子

わがやどの松のこずゑにつむゆきは
　ひさりみどりのいろはかはらず　西村虎子

みわたせば常磐のまつもうづもれて
　はななきさきのはなさこそみれ　品川登羅子

幾代へしまつにやあらむかしらにも
　しづ枝はおもくゆきぞつもれる　森若子

君が代のさかゆくまつのそのうへに
　つもるかけさのゆきのしろたへ　濱口直子

いさきよきすみよし浦のしらゆきは
　けさはかゝれりしらゆきのはな　町田鶴子

年ふりしまつのみどりにいろそへて
　まつがねたれてはなさきにけり　松原常子

珍らしやさきはのまつのはなゝさも
　こずゑにかゝるしろたへのゆき　吉川國子

千歳ふるまつのこずゑもわかぬまで
ふりそめにけるけさのゆきかな　横山初子

ちとせふるまつのみどりも埋むまで
ゆたかにかゝるけさのしらゆき　横山美子

ゆたかなる年のしるしにつもるゆき
まつさへねだをならさゞりけり　水島真子

おいまつのこずゑましろに雪ふりて
いくよのはるをおくるなるらん　神田靜子

常磐なるまつのこずゑにふるゆきは
きみがよいはふしるしなるなむ　野田千代子

ありあけの月かげきえしやままつの
しろきはゆきのいつかふりけむ　高橋信子

ぬば玉のよのまのゆきもきえなくに
まつにもはなをさかせけるかな　大島愛子

さきはなるみどりの松もしらゆきの
つもりてこそはねはありけれ　秋園菊子

庭の面はふゆがれはてゝいろぞなき
まつのこずゑにゆきのふりつゝ　秋園露子

よそめには花かさみえてすみよしの
うらのまつにもつもるしらゆき　四村芳子

なれもなほふかきみさをや頼むらん
おい木のまつにふれるしらゆき　篠崎ふさ子

こゝのへの大うちやまのまつがねに
さしゆたけしさつもるしらゆき　篠崎りん子

しばしだに消えぬを頼むこゝろにて
ゆきさへまつにつもるなるらん　志鎌たか子

みやひをにいさ見せはやな山さとの
まつのうは葉にふれるしらゆき　遠藤真久子

こゝかしこ松のみどりもほのみえて　志茂多ひろ子

ねだもたわゝにふれるしらゆき

しらゆきの積るにつけてまつが枝は
はるにしられぬはなぞ咲きける　高橋つた子

さね〱しあらしの音もたえはてゝ
まつのこずゑにかゝるしらゆき　遠藤さくの子

冬さればまつのこずゑもさきならす
はなさ見るまでゆきぞつもれる　秋野しぐれ子

我が宿のにはのまつがせおさたえて
けさめづらしくゆきぞつもれる　高橋きよ子

幾千代もさかゆるにはのおいまつの
こずゑましろにゆきぞふりける　土田さた子

うれしさのはてさへ見えぬはま松に
まつさやかにもふれるゆきかな　谷口さた子

さね〱しあらしも今朝は音たえて
まつが枝しろくゆきぞふりける　澁谷いく子

千枝しけるまつの一枝のみさりたに
おほひのこさぬ今朝のゆきかな　澁谷恭子

塩さぬのおさしつまりてはままつの
ねだもたわゝにゆきぞつもれる　谷口婦佐子

けさははやに匂はぬ花の咲きそめて
ひさまつが枝につもるしらゆき　四條駒子

さきそめしふゆの花さや見ゆるらん
なかへのまつにかゝるしらゆき　安村歡子

花さみるゆきにこずゑはうづもれて
まつのみさりもわかたさりけり　椎野ぬき子

冬ふかみはなやもみぢのいろもなし
しばしな消えそまつがねのゆき　新見てる子

さふ人をまつのさほそもうづもれて
みちさへわかぬけさのゆきかな　中村壽枝子

しろたへに雪はつもれどときはなる
　まつのみさをはうもれざりけり　仁保しま子

ふる雪にときはのまつもうつもれて
　みるもさやけきながめなりけり　宮内信子

さゆれどもあけはなち見ん珍らしく
　まつのうへしろくつもるしら雪　綿野りき子

千とせなる色はおほへどさすがにも
　まつのすがたにつもるしらゆき　美濃君子

ときはなるにはの小まつも一夜にて
　かしらにゆきをいたゞきにけり　河野まさ子

しらゆきの積りし今日はことさらに
　いろうるはしきにはのまつかな　橋本さよ子

降りつもる雪のすがたぞおもしろき
　まがきに這へるにはのおいまつ　山下はま子

しら雪はふりつもれどもとこしへに
　まつのみどりはうもれざりけり　佐々敏子

花とのみ木ごとにゆきはつもれども
　まつのすがたにゝるものぞなき　吉岡歌子

松が枝のいろこそいよゝまさりけれ
　ふりつもりたるけさのはつゆき　佐藤喜代子

小夜ふけて吹きしあらしに誘はれて
　ふりにけらしなまつの上のゆき　小早川朝世子

とさあくるまつどの音にそとみれば
　はや積りけりまつのしらゆき　木原順子

朝日さすつまのこずゑのまばゆきは
　ふりにしゆきの名ごりなるらむ　木原夙子

朝戸あけてわがいて見ればときはなる
　まつのこずゑにしらゆきぞふる　野田みす子

　葉ごとにかざるはなのしらゆき

おしなべて雪はつもれどことさらに
　まつの木ぶりのおもしろきかな　藪内津義子

しげりあふ松のみどりにつむゆきは
　なつとふゆとのながめなりけり　高山信子

ふりにける千とせの松にしろたへの
　ゆきはふかくもつもりぬるかな　木村きく子

けさ見れば花かとまがふしろたへの
　ゆきぞかゝれるにはのまつが枝　栗生きく子

ときはなるまつのみどりの色をしも
　けさはうづみてつもるしらゆき　仲田惠以子

よもすがらふり埋めたる雪のひまの
　まつのみどりぞたふとかりけり　梅屋美子

ときはなるみどりをこめて松が枝の
　すがたながらにつもるしらゆき　日吉あさ子

ふるまゝにつもりし雪をけさみれば
　みどりのまつもはなさきにけり　高屋はきの子

住の江のきしのまつはらいろかへて
　ふりつむゆきや千代のともなる　絹川ますゑ子

あさひさすかたより背むまつが枝は
　ゆきのあしたのながめなりけり　笹子雪子

久かたのそらよりかゝるゆふならん
　かみの御まつにふれるしらゆき　敷島花子

降るゆきにまつのみどりも蔽ろひて
　しばしときはの名にもれけり　笹子嵐子

目くはせはまばゆくもあるか朝ひかげ
　さしそはりたるゆきのまつが枝　野簗ちか子

風の音もやゝしづまりてふゆのよの　[illegible]

けさのいさゝまさろかきせわたに
まがひてまつにかゝるしらゆき　舘脇ます子

へてふる雪のこすゑもまかはぬは
まつのしたはのみさりなりけり　小曾根しう子

きはなるみどりの色も見ねぬまで
まつもおもげにつもるしらゆき　池谷富子

さしのしろしもみねてわがやどの
まつのうは葉につもるしらゆき　戸塚てつ子

きすさふあらしの音もうつもれて
しつかにつもるまつのしらゆき　中桐杏子

かなる世々のひかりのみゆるかな
ゆきふるまつのきよきすかたに　野口三子

ろあきもおなじ色なるまつが枝に
ふゆこそゆきのはなはさきけれ　河村君子

さり見むこさも皆やさきねぬ間に
さもまつがねのゆきをめでてつゝ　石川楽子

れ〳〵と詠むるにはのまつがねに
たわむはかりにつもるゆきかな　石川南江子

よりももみちはよりもあはれなり
はつゆきつもるにはのまつがね　石川久子

磐なるまつのみどりもふりつみし
けさのみゆきにうづもれにけり　中條露子

りつもる雪にもまつはいろかへず
ひさにまされるみさをありけり　島山千代子

びしくものこれる峰のひさつまつ
けさはゆきにそうづもれにける　島山千惠子

かへぬさきはのまつもしらゆきに
しばしすがたをまかせつるかな　高橋照子

きすさふあらしもいつかたね果て　田代艶子

こたかくつもるまつのゆきかな

白ゆきはつみかされてもたかまつの
みさりのいろはかくれさりけり　田代綾子

霄よりはみれのまつかぜおさたねて
ねだもたわゝにつもるしらゆき　德永萬壽子

さきはなる松のみどりもしろたへに
おもかはりせりゆきのあけぼの　小森田輝子

足ひきのやまのをちこちみわたせば
あらおもしろのゆきのまつがね　澤田春子

しら雪のつもるあしたはわがにはの
まつのすがたはをかしかりける　佐伯きぬ子

我やどのにはのおいまつおもしろく
ゆきこそつもれにはのおいまつ　野中朝子

しくれには染まぬこゝろを松が枝の
なさしらゆきはゆるしたりけむ　菅貞子

もちにはそまらぬまつも今朝見れば
はなさみるまてゆきそつもれる　白石梅子

咲わかぬはなさも見ねておもしろく
まつのこずゑにつもるしらゆき　森こさ子

さきはなる松のこずゑもうもれけり
ひさ夜のうちにゆきのつもりて　高市さし子

ふりつもる雪のなかにぞさきはなる
まつのみさをは見るべかりける　眞島千鶴子

たまくらの寒さおぼねてけさみれば
はつゆきしろしをかのべのまつ　香澄梅代子

常盤木のまつにかゝれるしらゆきは
ちさせのはなさいふべかりけり　竹腰隆子

たかさごの尾の上の松も今朝見れは
木すゑにゆきそふりつもりける　竹腰八千代子

あしひきのやままつか枝のしら雪は
みどりのいろをふりかくすらむ
豊さしのためしもしろきおいまつの
ねたもたわゝにつもるしらゆき
年ころのまつのみさをはあらはれぬ
つもりしゆきにみどりまさりて
ことのはも筆のしわさもおよはねは
はつゆきつもるにはのまつか枝
ゆくみちのつかれもしはし忘れけり
ゆきおもしろきみれのまつか枝
さきはなるみさりのいろも埋もれて
まつのうへしろくゆきそつもれる
しろ妙のゆきをかさしてひめこまつ
きよきみさをのしろしみねけり
ゆくすゑを千とせの松にまかせつゝ
こゝろしつかにつもるしらゆき
いくよへし松のこすゑにゝほふかな
つもりてきよきしらゆきのはな
ふりつもるおまつか枝のしらゆきは
巣くへる田鶴といろきほふらし
千代經てふ松につもれるゆきなれど
消ゆるならひはのがれざりけり
つゐつきてたてる尾上のおいまつの
いたゝきしろくつもるゆきかな
しろ妙のゆきはつもれさまつか枝の
さきはのいろはかくれざりけり
幾千とせかはらぬ御代のためしなる
まつの木すゑにつもるしらゆき
[illegible]

野澤をのね子　早川信[illegible]子　渡邊てい子　加藤眞子　加藤[illegible]惠子　加藤英子　加藤蕭子　木下つれ子　木下千代子　都水波留子　目黒佐喜子　大竹治子　山根久子　鵜濃喜代子

こすゑにつもる今朝のはつゆき
ひめ松のさむからましさおほそらは
ゆきのわたきぬきせておほへり
さきはなるまつのこすゑのしら雪の
はなそひさよのうちにさきける
みやまなるこまつが原にしらくもの
かゝるさ見しはみゆきなりけり
よもすがらふみよむまさにふる雪の
つもりてきよきにはのまつか枝
けさはしも日なかゞやきぞ風よきよ
まつか枝のゆきいましばしみむ
いましばし消ねすあらなむさこしへに
みさをたかへぬまつの上のゆき
しろたへの色にかはりはなけれども
ゆかしく見ゆるまつのゆきかな
ちさせふるみさりいろこき松か枝に
つもれるゆきそめてたかりける
あらわしのすむてふ峰のたかまつも
をれんはかりにふれるしらゆき
けさ見ればにはの小松はおいにけり
かしらましろにゆきのつもりて
いつのまにふりつもりけんわか松の
みさりもわかぬけさのしらゆき
きのふまてみさりもふかき松か枝に
けさ咲き初めぬしらゆきのはな
今朝見れば軒のおいまついろかへて
ゆきのはつはなねだにこそさけ
常盤なるみさりのいろも見ぬつまて

飯竹さし子　西村ひろ子　秋月すみ子　板倉文子　藤井榮子　沼越無艮子　寺尾まさ子　河原芳子　漆原きしゑ子　林環子　香川頌子　梅園ふみ子　香川ちゑ子　青木たよ子

まつのしろきみさをゝたよりきて
　　こゝろやすけくつもるしらゆき　　根岸豐子

まつのまたうらわかきみさりはに
　　なさしらゆきの降りつもるらん　　浦井豊子

きは木の松のこす烝もさなからに
　　はなさかはれりゆきのかゝりて、　　所佐以子

かせのおさもいつしかうちたねて
　　こす烝しつかにつもるしらゆき　　區摩高繁子

きはなる松のみさりのわかぬまて
　　ちさせもつもれけふのしらゆき　　坂井つるき子

すゑふくあらしもやみて松か枝に
　　たつのすむかさ見ゆるしらゆき　　竹村貞子

銀のはなかさ見しはにはのおもの
　　まつの木すゑにふれるしらゆき　　丸木久樂子

ら雪はつもらはつもれさこさはに
　　まつのみさをはかはらさるらん　　尾立富子

こさはにかはらぬ松はだ枝ごさに
　　ふるしらゆきのはなそさきける　　尾立英子

きはなる松のみさりもうつむまて
　　ふりこそつもれけさのしらゆき　　村上てい子

ゆ深みふりつむゆきにうもれてそ
　　まつのみさをはあらはれにける　　服部かつみ子

き直なる松のこす烝なしろたへに
　　なしつゝふれるけさのゆきかな　　大谷あや子

壽木の千世もかはらぬまつが枝に
　　見るさへきよくあはゆきぞふる　　長谷川さだ子

もすがらさねしあらしの誘ひけん
　　まつにかゝれるけさのはつゆき　　阿保松子

たねてしづかにつもるまつがねに　　村尾郁子

　　ちさせのはなさみゆるしらゆき

さきはなる松のみどりのわかぬまで
　　つもりしゆきのうるはしきかな　　春野はな子

千代ふべきまつも老しさ見ゆるかな
　　いたゝきしろくゆきのつもりて　　齋藤よし子

池の面に千代のみさりのかけ見ねて
　　ゆきましろなるなかしまのまつ　　小川うた子

池みづにみどりのかけは見ねなから
　　ゆきふりつもるきしのまつが枝　　小川直子

はるもなほおよばざりけり雪ふれば
　　さきはのまつにはなのさきつゝ　　河口みどり子

十二月五日兼題　居宅新築を祝ふ

天　　伊勢國渡會郡宇治中之切　河村君子

すがしき、此の新室よ、神路山の麓、五十鈴川の流にそひて、高き屋は月に棹さす如く、低き屋は流に枕する如し。神路山のうごきなきは、此の室の榮ゆる影。五十鈴川の流つきせぬは、此の室のかはらぬ姿。春は見はるかすきはみ花さき、秋はながむるかぎり紅葉匂ふ。げに此の室こそ、たくみらの黒縄のながきか如く、いや榮ねに榮ねゆくめれ。あなめでたの新室や。

地　　越中　吉岡歌子

大方家居にこそ人の心もれしはからるれと、雙か岡の法師も云ひ置きけん、こちたき迄きらしく磨きなしたる家居は、見るに目とゞまる心地し侍れど、風流

たる住居の勝れたるには、似るべくもあらずかし。我友某の君、月花の優なる御心用ひは更なり、衛生の法まで、隈なく明らめ給ひて、こたび高燥閑雅の地に造りなされし御住居よ。金殿玉樓の莊嚴なきも、四時の木草は庭にみち、遣水の音鳥の聲、世を隔てし趣あり、樓に登りて東を望めば、立山高く雲に聳え、西北を顧みれば、蒼海渺茫として天を浸し、雲の波に漕ぎまよふあまの釣り船、雲路にきゆる雁の聲、見るもの聞くもの、心を樂ましめずと云ふことなし。げに住ひては斧の柄のくつるも忘るべきこの家居をしも、千代のすみかとしめたまふ、某の君の御心清さ、おしはかられて貴しや。おのれ今新室ほぎの御むしろにつらなり、うれしさの余り、拙き言の葉にかけて祝ひまつるになん。

人　東京麴町區飯田町六町目廿二番地齋藤謙方　青木義子

去にし日、音なひ參らせし折、圖にて拜見せし御住居の、早出來上り給ひて、今日はにひむろの御祝せさせ給ふとか。只圖にて拜せしだに、御間どりの樣、御庭の配りなど、いとみやびに床しう見參らせしに、いよ〱出來給ひては、いかに麗しからん。殊に御屋敷は、土地も高く、眺めもよけれど、春は東の御窓より、紫立つ筑波嶺も見らるべく、夏は西の御ひらきより、花乘せて筏師の下り行く隅田の流も、御目の中なるべし。

今は秋更けて、淸き月に琴かなで給ふ御すさびこそ聞かれね、やがて來ん雪の日には、簾かゝげ給ふ御姿も見られなんと、いと〱床しう思ひ參らする餘り、礎の幾千代動ぎなく、御庭の松に鶴巣ひ、御池の石に龜遊べと、かく祝ひまつるになん。かしこ。

（以下原稿到着順）

中山富子

此程より御心づくしの御ふしん、淸らかに御さゝのひ、御日がらもよく御わたましなし給ひしよし、み心もおのづから御すが〱しうおはしますらんと目出度祝ひまつろになん。就ては鯛一折御祝の印までにしんじはべれば御納め給ひれかし。何れ御悅びにまかりてこま〱拜見致したくなん、先は文もて御祝ひ申すになん、あなかしこ。

福原蓋子

新むろばかり、心地すが〱しくたのしきものは侍らずかし。はやう石作りや、木たくみが、ゐこみ侍る由はきゝ侍りつろも、かく速やかならんとは、思はざりしを、きのふはや、新やへうつらせ給ひぬとか。さきはの松の柱の、幾千代と、芽出たくぞんじ侍り。三つ葉四つ葉にむね〱しう、御しつらひごもこそ、いかに御うろはしう、をかしからめ、さくまゐり、こゝほぎ申すべきを、あやにくまらうどの絶ゐまなければ、よろづは明日さふらひて、聞ゆべくこそ。こはいさゝかなる品には侍れど、御祝ひのしるしまでにさてまゐらす。

佐々有鄰子

楯のもり田の君は天の下におもふくまなく、朝は烏がねさともに起きいで、夕はゆふつつの光を背になして家にかへり、夜さなく晝さなくいそしみつとめ、尊王愛國の心をふりおこして、世をわたり、數萬のたからはさらなり、黃金白銀をつみかされ、名の名をたて、祖先の遺勳をあらはし、[illegible]

に、みづの殿はさりふげるかやのそそぎなく、そこつ岩根のきわみ立ゑたまへさ、祝旨奉る。あなかしこ。

名取正代子

つ頃より新たにたてもうけさせ給へる御別荘、はやも御落成にて、きふかしこに引きうつろはせ給へりさ承ろなん、いさ〳〵めでたうよこび聞ゑ侍ろ。さても新むろばかりすが〳〵しう心地よきは侍らざろを、まして御しつらひの、よろづに清らをつくし給へろは更なり、庭のながめも、さこそさ推しはかり給ふれど、そがひにおのづからな山水のけしきをしめさせ給ひ、ここに愛たげなる鳥の聲さへ、折ふにきゝすまし給ふべくさかや、さにては御心地もいかばかりのさ〳〵しうおはしたまふらんさ、御うらやましうこそ。いかで、一たびはゐのぼりて、せんだんの柱水晶のみ階さやらんも、物しおらまほしうもひ給ふれど、あやにくさり離き事の侍れば、まづ御祝のしろしまで、さかな一折使にもたせ、御らんぜさす、いづれ其内まゐりのぼりてこそ。かしこ。

塙いさむ子

堅の空も高くきよらに澄み渡り、園生のくさ〳〵の菊花は、今を盛り色に香に匂ひぬろいさめでたき折から、御許君には、こたびいさみやかに美しく新家をしつらせ給ひ、其御祝の式をあげさせ給ふさよ、い〳〵めでたき限りになむ。げにこゝらの年月御心こめて、工匠等をはましつゝ作らしめ給ひたれば、其構造より、部室の配置、また園生のあさまなど、いかばかりかめでたくゆかしうおはすらむさ、をこながらしあて奉りぬ。あはれ此家よ、動きなき御心の柱、つきかためて立てゝものなれば、ここしなへにゆろぎなく、君がうからも、園生の常磐木のや榮ゑに榮ゑますらんさ、いさ嬉しく悦ばしさの餘りにかくなむ。

河田いし子

御新築出來上り、昨日は御わたまし遊ばされ候由、御目出たく存し奉候、兼て承りおよぶに、用材も稀なるものを、御集め遊ばされ、其他物も夫々御心盡され候事さて、目を驚かす結構、殊に御客間御茶座敷なさは、ほむろにこさの葉もなきまてに出來上り候由、御兩親様始め、嘸々御喜び遊ばされ候御事さ存し參らせ候、此品誠に麁末にはへ候さも、萬々年も限り無く榮ゑさせ給ふ。御新築へ、御引移りの御祝ひさして、鶴龜の置物一つ御覽に入れ候間、御笑納下されたく候、いつれ近日御歡びにまうのぼり、ゆろ〳〵拜見致し候はんさ、たのしみ居り候、何も其のをりにゆづりてなん、あなかしこ。

篠崎ふさ子

今秋御移初めあそばされし今土の御新宅、思ひしよりはやく落成して、明後日は御わたましのよしにて御まねきいたゞき、有り難く御禮申上げ候、あなた様御方は、四方の眺望もいさ晴やかにて、夏の月、冬の雪、春秋は云ふも更なり、殊更に隅田川を池さなむ、築波の山を築山さなぞらふべき好景色、さぞやさぞさ、今日よりたのしき心地いたし候、隅田の川の長き流、築波の山のふかきかげ、いづれもゝれぬ吉例の、いく久しく御榮ゑを祈り上げ申し候、麁末ながら此短册御祝のしろし迄に差し上げ候、おはもじには候へども、別に腰折一首認めたろもの相添へ候、何卒巧拙は打ちすてゝ御祝賀の眞心をよろしく御汲み取り下されたく、何れ參堂の折よろづ申しあぐ可く候、かしこ。

綿野りき子

鶴龜のさはの御住居、兼て御新築中さ承り侍りしが、きのふいよ〳〵御落成のよし、實に御目出たきかぎりにて、扨ても御心こめの御ふしん、さぞかし御結構を盡させ候らん。こはありふれたろ品に侍れど、いさゝかことほぎのしろしにさて松魚一折まゐらするになん、あなかしこ。

降田槇子

新に建てさせ給ひし御住居、いよ〳〵出來上り、昨日しも引移らせ給ひぬさや、いさも〳〵目出たき限にこそ、各様方の御よろこびはさらなれど、何かさ、御取こみのことさ推しはかり侍りぬ、廣かりしもさの御住居にも、なほ立まされりさ承り侍れば、いかに御廣やかに、且清らに侍るらん。ここに御茶の間などは、其道にくはしきたくみに仰せて造らせら

れしさ承れば、いさ風流やかに、數寄をつくし給ふらん。御庭の趣など、嘸ゆかしう侍らんさ察し奉り、さくまゐりて壽ごさ申述べまほしう侍れど、あやにくにあしわけ小舟のさわり侍れば、いさ無禮なれど、拙なき筆もて、御よろこび申上ぐるになん。さて此花瓶一對、いさ粗末には侍れど、御祝のしるしにさ、送りまゐらするを、うけ給ひてよ、何れ近き内さぶらひて、萬聞ゆ上ぐべくこそ、あなかしこ。

佐藤喜代子

あはれ此さわがしきちまたをいさひ給ひて、いさ物しづかなる向島に、こたび伯母君の御望みにて、御新築遊さるゝさかや、こはいさ〳〵御身の上にもよろしき空氣のかよひて、幸あるのみならず、終にちごたちの御學問にも、いか斗りよろしからん、夫に伯母君の御意によりて、御室内は申すもさらなり、み庭のおもには、いさひろやかなる池に、ふん水を設け、そのかたはらには東屋をも設け、終ひぬさかや。さぞさぞ目出度う千代のよはひのつるかめもやがてはなち給ふ御事さ、今よりこよなくうれしうてなん、あなかしこ。

藪内津義子

此程より、つくりみがゝせ給ひし、御別墅、思ひしよりも早う成りて、いよ〳〵明後日は、御わたましのよしにて、數ならぬ、私供までも、御招き下され、うれしう存じ上げ候、承れば、こたびの御すまひは、四季のながめもすぐれさせ給ひ、なかにも逢阪の月、遠山のけしき、一方ならず、ことには空氣の流通もよろしきおもむき、御家は、これよりいや榮ゆに榮ゆ賜ふならむさ、祝ひ上げ候、御當日には、さぞ〳〵おごそかなる儀式もあり、且つは花子様の琴のしらべ、飾り物など、くさ〳〵さり行はるゝ由、かならずまかり出て御祝詞申し述べたく、先は、拙き筆もて、御祝かた〳〵御招きのかへりごさまて、あら〳〵申述ぶるになむ、あなかしこ。

戸塚鐵子

木からしの風に、庭のもみぢは、行く〳〵なりなりぬる折から御細書うれ

かや、めでたういはひ壽き上げ候、明日はその御祝宴にて午後より來ら
さの仰せ、有りがたく、不風流なる私故、御席につらなるはいさはづか
しく存じ候へども、いかばかりかの黄金を以てなせる御造作のめでた
さを、拜見も致し度、御居宅は御高燥の御地さいひ、御庭もいさひろやか
の由なれば御見はらしもさぞかしよろしからん、丁度明日は舊曆の十
五日さか、秋に入りて上總館出る月の、御池の水の面照り渡り候ひな
ば、此世の外のけしきからましさ、ゆかしう萬事を打すて參と仕るべ
く候、なほ申上げたき事の數々は拙筆に盡しがたくよろづは拜顏の
しさ、あら〳〵申殘しまつは取あへず御祝ひまでに、めでたくか
しこ。

目黒佐岩子

其後はいさ遥々しく打過ぎ侍りしが、いつも恙なう渡らせ給ふなん嬉
來る。扨去ぬる年購ひ給ひしさ聞く某の地に、先つ頃より新たに御居た
しつらはせ給ひつるが、こたび成りて、いよ〳〵引移らせ給ふさか、い
もく〳〵日出度く、幾久しう壽き參らするになん。未だ見參らせねど、
は海に向ひて、遙かに富士の峰を眺め、後は遠く山を望み、近くは
田の面を見渡し、かつ水滑く市に近きなど、所すでに得難きに、ある
の君の御好のみやびなる、萬づ質素を旨さして、趣深く造らせ給ひ、
に御庭のたゞずまひなど、世の常ならず、別きて御茶室は、みこゝろ
盡されし跡見ゆて、愛でたし共愛でたしさ、見し人の只管取りはやす
に、まだ見ぬ先きより其景色の推し斗られ、まこさに千歳の齢を延べ給
ふべき御すみかならんさ、只さく見まほしければ、來む月の朔日頃訪
ひ申さむに、見せ給ひてよ。

河原芳子

うけたまはり侍れば、おもさには、こたびあらたしく家造りして、近
吉日に、御ひきこしなさるゝよし、げに目出たきかぎりなりや。
あゝその新室や、下津葛根の。ゆるぶことなく、朽つることなく、常
堅磐にさきはひ、樛の木のいやつぎ〳〵にさかゆまして、高府山の高

、あはれ、

あたらしき室にむかふる新玉の
　春の光りは千世もつきせじ

づれ、わらはもまかりいでゝ、たくみ給ひしみやびのつくりごとな、見たてまつらまほしうあれば、何ごとも、その御目見得のふしに。ゆりはべらむ、こは。おくりまゐらすべう品にあられど、みいはひのしにとて、さしあげつれば、たくみがたの御まかないになりと。用ひまはゞ、うれしきかぎりになん、かしこ。

岡部やよ子

れ〱、伺ひなり候ひし、御とのつくりのこよなく、とゝのはせられふよし、御土地がらさへよきに、まして御いへゐのさまの、衛生にかなひ候ふは、さらにも云はず、いと趣味ある、御すきを、つくさせ給へば、ときなり〱の、御ながめにも、とませ給ふて御そのふなど、いしらず、御めでたく、御庭の松のときはかきはに、さかゐさせ給はん、ぎりの厳の、千代萬代に、うごきなき、御ためし、御見わたしの、海かけて、幾久しく、御祝ひ申し上げ候、まづは、とりあへず、御ことぎまで、かしこ。

所佐以子

々に、さむさを加へ候處、御許様始め、皆々様には、障なう御すごしばされ候哉、伺ひ上げ候、偖も、此度は、御舊家にもまして手廣に御築造ばされ、且つ御高燥にて空氣の流通もよろしく候由、御健康にもし、いく久しく榮ゐまさん事、御よろこび申上げ候、付ては鯛鮭二尾、一荷、いささか御祝のしるし迄に、差上げ申し候間、御受納下され度、其來る何日の御祝日には、私共迄も御招ぎに預り、難有存じ奉り候、其ははやく〱と参上致し、及ばず乍ら御手傳仕るべく候、先は御祝迄、かしこ。

田中ひろ子

しう、みむなこめさせ給ひて、御ふしん中とのよしは、早うより、人てならで承り侍りしが、昨日今日とは思はざりしに、早も、此程成り給ひて、あさては、御わたましのよしにて、拙き姿までも御招ぎ給はりしうれしさ、げに此上やあるべき、みがき立てさせ給ひし御殿つくりは、さもこそ、四方のながめいとうはれやかに、はたうろはしうおはすらめ、御高欄より海山の景色を、はるばる見わたしたらむには、いかばかり床しからましと、今よりいみじう、たのしみになん、この九谷燒花瓶、並に文晁松竹梅三幅對、進じまゐらするを、幾久しう納めたまはらば、いとうれしうなん、あなかしこ。

●明治卅二年度女鑑月並歌文兼題

一月五日	歌	新年松	十二月廿日〆切
	文	梅をめづる詞	
一月廿日	歌	都雪	一月十日〆切
	文	鶯を待つ	
二月五日	歌	尋梅	一月廿五日〆切
	文	婦人慈善會に入會を勸むる文	
二月廿日	歌	霞隔行船	二月十日〆切
	文	同返事	

〆切期日に遲れたるは總て採用せず。

一月五日兼題に限り歌文とも特に
左の賞品を參らすべし

●天
土佐日記燈　一部

●地
女鑑　半ヶ年分

●人
女子の本分。女子處世論。女子教育要言。雅文消息集。修身百首。の内望みもの一部

●秀逸

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名
……………………
……………………
……………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　住所　姓名
……、……、……。
……、……、……。
……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名字は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總て沒書とす。

●秀逸 帝陛冊（安藤朴翁著） 一部

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名字は普の平假名にて個々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總て沒書とす。
○女子よ、……

第六版

●○●○●○三輪田眞佐子女史著○●○●○●

女子乃本分

定價金廿五錢	金銀摺彩色表紙
郵稅金六錢	大和綴最優美

全壹册

本邦固有の道徳に基きて、我か國の婦女が盡すべき本分を明にせるもの之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは世間既に定評あり、敢て贅せず。

●所載極めて擴大試に其目次を示さむ●

第一章 總論●風俗の變遷●本著の目的●人の人たる所以●女子本來の面目●日本女子と西洋女子と●維新前の女訓●西洋女子の才能●折衷

第二章 女德●節操●孝行●和合●慈悲●節婉と靜止と●恭謹と勤勞と●自重と忍耐と●女德の基源

第三章 女子特別の身分●妻道●婚嫁の主義●早婚の弊害●夫婦とは如何●從順●補佐●誠實●母道●胎教●育兒●慈愛●教戒●母の責任●繼母の道

第四章 女子藝業●女藝の本領●例證●松苗先生と紅蘭女史との言●實用の藝●裁縫●料理●經濟●衛生及生理●家内の整理●良人と同藝●優美の藝●和歌●音樂●活花●茶道●[illegible]●專門の藝●文學●美術●教師●醫業●西洋の女業●貴女の職分

第五章 女子の容裝●人類と禽獸と異なる點●動作●靜逸●天眞●恭敬●裝飾●實用●禮儀●雅致●高尚●風禮●結髮●服制●佳人の資格

第六章 女子の人に接する道●交際●女子の交際●交際の効德●親切●愛嬌及世辭●自遜と他愛と●禮節●恒敬●交際上の責任●秘訣●心得●女禮●進退●事宜●自然●習慣●婢僕を御する法●寛容●範例●奬勵●採用

第七章 女子の生活及人物●生活●幸福●快樂●高尚●質實●安心●脱塵●中庸●女子に適する學派●人物と養生と●天稟●性癖●多能●達才●富貴●美貌●好人物の本相●上流●中流●下流●應報

第八章 結論●公道●女卓の原因●反動●御國の道●女權に就いて●恩報

東京京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社 電話(本局)八八

杉谷正隆編

家庭歌訓 修身百首

本書は我が國古今の和歌の中に就きて格調高遠旨趣純潔にして修身の訓誡となすべきもの一百首を撰び之に簡快なる義解と假名とを附し誰人にも一讀其本義を了得し大に發明する所あらしむ四方の淑女諸士進んで此篇を讀みて德器を養ひ給へかし

＊＊＊＊＊＊＊

全一冊 菊版美本

定價金二十錢

郵税金四錢

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話本局八八）國光社

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價	
一冊	十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢
十二冊前金（半年分）	壹圓
全國遞送料	[illegible]

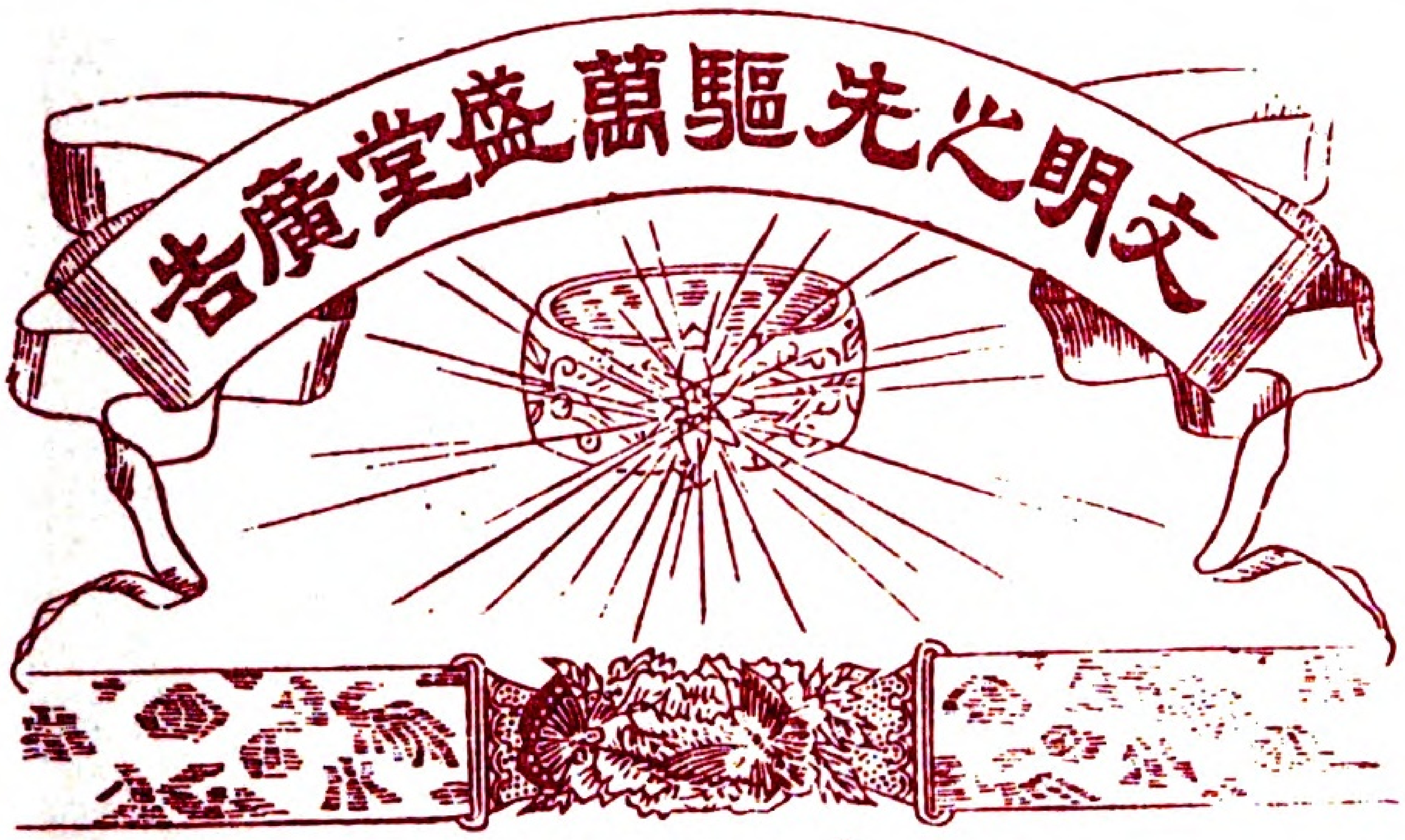
廣告料
五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治三十一年十二月四日印刷
同年十二月五日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛

印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木頁雄

發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號新橋八八）國光社



従來世間にありふれたる
品物とは比較下さるべく候

我國美術の精粋
金製諸寶石入 彫刻付並ニ
指環帯止

萬盛堂

神田區
小川町
壹番地

御閑暇の節ハ御購求の有無に
拘らず御枉駕の程奉願上候